

# かんかん虫は唄う

吉川英治

青空文庫



## 木靴

「食えない者は、誰でもおれに尾ついて来きな。晩には十わ銭銀貨だらふた二ツと白銅の五銭玉一ツ、みんなのポケットに悪くねえ音をさせてやるぜ」

かんかん虫のトム公は、領土の人民を見廻るように、時々、自分の住んでいるイロハ長屋の飢う餓えをさがし歩いた。

彼は、貧民街の同胞たちから、長屋のプリンスの如く人気があった。事こころざしと違って、二年や三年食いはぐれて見ても、外国のようで日本のようで、金かね儲もけで埋かまもううているようで、金

を摺<sup>す</sup>らせる埧<sup>るつぼ</sup>塙<sup>ぼ</sup>のようで、得体のわからない貿易港から、ふしぎにもよく仕事のアナを探つて来る彼は一種の天才だった。

「おじさん、労働したことがないって言ったね」

「まったく経験がないんです、勤人なんてものは、落魄<sup>おちぶ</sup>れると実に困りものだなあ。なかなか二度とは雇<sup>く</sup>口<sup>ち</sup>がないし、家族はみんなあんなだし……」

「悄<sup>しよ</sup>げなさんな、お天<sup>てん</sup>陽<sup>と</sup>さまが出るうちは、心配はねえツてことさ」

「助かりますよ、今日から仕事があれば。——だが、僕にできま  
すかな」

「のみこんでるよ」

「一つ、よろしく」

「だが、おじさん、帽子の縁を、鼻まで引ツ張ったり、女が来ると、下を向くのだけはよしねえ」

今朝の彼の同伴者は、イロハ長屋へ落ちて来てからまだ間のない四十前後のよく肥ったカイゼル髯ひげのある男だった。大人おとなしく官吏でいればいいものを、開港場のばか景気にそそられて、健気けなげな発奮をしたため、立志伝の逆をやり遂げてしまったというのが彼の述じゆつかい懐かいであった。

十四のトム公は、生活力をスリ減へらした四十男をしりえに連れて、ぽかぽかと木靴を躍わらして歩いた。矮わいたん短たんな体をズボン吊つりで締めて、メリケン刈かりの頭がまへ蟻いぼの疔いぼみたいに光る烏打帽を乗つけて

いる。

彼のいちばんお花客先とくいは、横浜の船渠会社ドックであつた。まだ葉いろの職工さえその門に見えないうちに、全市のかんかん虫は煙のように高い煉瓦塀の下に蝟集いしゆうする。わらじ、ボロ靴、ゴム足袋、木靴、洋装、和装、裸装、あらゆる労働的色彩が睡眠不足な蠢動しゅんどうをしている。女は女でかたまり、男は男でかたまつている。鉄の門には、まだ朝霧がふかい。結核性な匂いをもつ青白い瓦斯燈ガスが、ほそい眼をして、いつもそこに簇むらる夥おびしい求食者の群を見下ろしている。

「きようは百二十人、百二十人」

前のめし屋のランプの影から、やがて二、三人編上靴あみあげぐつを穿はい

たのが出て来て、こういう時は仕事のある福音だった。

しかし、三分の一は、ハネをくって帰った。落伍者はたいがい労働にたえそうもない病人や老人だった。ほかへ行っても、ハジかれる率の多い者にきまっていた。

トム公には、あぶれて帰る人たちの執着がわかった。大人になつたら、おれはかんかん虫の指揮者になりたい、病人や老人はあぶれさせないようにしてやる、と彼はポケットの中で握り拳を固くした。

「親方」

「なんだ、トム」

「この人をたのむよ」

「ほ、お髯さんか。立派なもんだな」

「官員さんだもの」

トムは顔が利く。お髯さんは処女みたいに顔を赤くした。まったく彼が着て来た失業前の遺物かたみらしいチヨツキは異彩を放ち過ぎていた。

そらけもの  
空の獣

かんかん虫とは、星の夜に、秋草の蔭で、しおらしい美音をまろばすあの鉦かねたたき虫のことではない。同じく、鉄はたたくが、目も鼻も耳の穴も、まっ黒になって、船のサビ落しをやる労働者



の名だ。或いは、港の船を目あてに、ペンキ塗りでも何でもやる自由労働者のことと通用してもよい。

<sup>ひる</sup>午の、ドンが鳴った。

トム公は、ほかのくろんぼ連と一緒に、七千トンの※<sup>ダンブル</sup>槽の底から午飯を食べに甲板<sup>かんばん</sup>に上がって来た。半日の作業で、どの顔も、<sup>ろうそく</sup>蠟燭と、カナ錆<sup>さび</sup>でまっ黒に生れ変っている。

その中をキョロキョロしながら、

「オーイ、おじさん」

あの立派な髯<sup>ひげ</sup>も、見当がつかなかった。

「おじさーん。亀田さーん」

亀田は、別人のようになって、これもうろうろトム公を探して

いた。一等船室キャビンの甲板から頓馬とんまな首をのぼして、

「ここにいます」

「上がっていたのか」

「弁当を食べようと思って」

「そこはいけねえ、外国船の船長キャプテンのやつ、癩かんしゃく癩くもちだか

ら、甲板をよごすと怒るぜ」

「え、いけませんか」

小心そうに、亀田の大きな体がそのブリッジを降りかけて来た時だった。ふとうしろから、茶色の丸っこい動物が、彼の肩を越えて、上の船橋ブリッジへ跳び上がった。

それと共に、一つの船室から、ハイヒールのあわただしく弾むはず

登あしおと音と、ゴム草履ぞうりとが、もつれながら駈けて来て、

「あれ！ たれか、あれを捕えて下さい」

亀田の肩をたたいた。泣き出しそうな声だった。

彼の眼は、受令的に、船橋を彷徨ほうこうしたが、何も見つけえなかった。二人の婦人は、彼が有鬚ゆうぜんのかんかん虫であったと気づくと、きたない物のそばを離れるように飛び退といた。そして、こんどは、水夫や事務長を呼び立てた。

幾つもの扉が一時に押された。赤い顔や、のツぼや、デブが溢れ出して、亀田は早口な外語と葉巻くさい体臭に取り巻かれた。

彼は、あわてて下甲板へ降りた。船渠ドックの壁も、船の中も、たちまち人間で埋まった。

「先刻さつきのだ、先刻さつきのだよ」

「なんだ、あの女は」

「らしやめん」

「芸者」

「いや、奥様に、お嬢様」

「わかるもんか」

「年増がいいな」

「おれは、若い方がいい」

「いや丸っこ過ぎる」

職工たちの無遠慮な眼や指が、わいわいと騒いでいた。入にゆうき

渠よ している外国汽船の船員か客かを訪問して来たこの異彩は、

とつくに、彼らの好奇を煽<sup>あお</sup>っていた。

年上の婦人は、洋装だった。着こなしが肌につきすぎて、粹というのもおかしいが、垢<sup>あかぬ</sup>抜けがしている。もうひとりは、こつてりと、日本髪で、あどけない。

だが、ふたりとも衆目もなく、羞<sup>しゆう</sup>恥<sup>うち</sup>もなく、黄色い声でさげんでいた。

「たれか、早くあれを！」

「たれか、取って来て」

「私のオペラバッグです、あの中には、大事な物ばかり、はいつてるんですから」

彼女らの指につれて、人々は、眩<sup>まぶ</sup>しそうな眼をみな帆柱の上へ

やった。暗褐色の小さい怪物が、銀の鎖を啜くわえて、そこに、丸ま  
ツていた。

「猿だ」

「インド猿！」

「うまくやったぞ、オペラバッグを啜くわえて逃げやがった」

「お智むこさんにするなら、返してやるとよ」

ワーツと陸おかで囃はやした。

船キャプテン長は、まっ赤になつて、それへ呶どごう号を返した。難船ひんに瀕

したせつなのように、大きな拳が空でうごいた。会社側の職工長  
は、陸の者を追いながら、一足跳びに棧タラップ橋を渡つて来た。

二人の水夫が、見事な速度で、帆柱マストへ登つて行つた。小さな、

賢いインド猿は水夫がそこへ来るまでに、蜘蛛の巣のようなロープを渡つて、まったく、手の届かない所へ、腰をすえ込んでしまつた。

「誰か捕まえて下さい、いいえ、あのオペラバッグを取つて下さい、あれを紛失なくしては、大変なんです！ お礼は、いくらでもあげる。事務長さん、どうして下さるの。もし、あれを紛失なくしたら、船へ責任を持たせますよ。宝石だけでも十万円位なものは、はいっているんですから」

婦人は、金持臭い哀命をふり撒まくそばから、ヤツ当りに、上級船員へ詰問した。船キャプテン長の赤い顔も、のつぽな事務長の顔も、空へ向いたまま硬こわばってしまった。

飛んでもない悪戯者<sup>いたずらもの</sup>へ、あらゆる方法で捕獲の手が試みられた。だが、彼はそれに対してトンボや綱渡りを酬<sup>むく</sup>いて見せるだけだった。そして最後には、信号柱の尖<sup>さき</sup>へ行つて、オペラバッグを齧<sup>かじ</sup>り始めた。

## プリンス

「飼主は誰ですか！」

婦人の眼は、ヒステリカルに周囲を物色した。

「あの猿は、船のですか、それとも、誰か飼主があるんですか」

飼主は一等船客の外人だった。彼は、日本婦人の狂<sup>きょうそう</sup>噪<sup>そう</sup>を軽



蔑しながら、そんな大事な物を船室の外へ置いたのが悪い。こつちに責任はないという意味を一息に周囲へ向つてしやべつた。

「猿を買います！　船キャプテン長、猿の代価を払いますから、短銃ピストルで射殺してください」

飼主は、やや日本語がわかるとみえて、ひろい肩幅を婦人の前へ押して来た。

「いけません、猿、売りません」

「いいえ、売ってください」

「飼主、わたくし愛している、動物の生命を売る！　否ノー、否ノー」

飼主の顔も猿みたいになった。

「あなた、会社の職長さん？」

「はっ」と、職長はいらいらした拳を腰につつかって、

「——高瀬さんの奥さまでございましたな」

「はい、弁天通りの高瀬でございます。主人の代理で、船へ、お贈り物を持って来たところですよ」

「飛んだご災難ですな」

「何とか、会社として飼主へかけ合つて下さいませんかでしょうか」  
「かけ合つてみましょう」

船底作業が終つたので、午後から船渠ドックに水を張つて三時四十分の満潮期には、キツカリ、船を出さなければならぬ。同時に、次の入渠船の約束もあるので、職長としては、なおさら、気が気ではなかつた。

職長と飼主の間に、りゆううちよう流暢な外語で、交渉が始まった。しかし、交渉はすぐに破裂して、飼主は、ごうぜん傲然と首を振った。理論に於て、上級船員たちも、とりな取做しがつかなかった。ただ船キャプテン長長の裁判権に解決を待つよりほかはない。

「ふうツ……」

船長は当惑そうに首を振り動かした。

「射殺して下さい」

婦人はまた、それをくり返した。

職長も口をそえた。

「ドック船渠の底へでも落されたらそれツきりです」

発電所の煙突は、時間どおり、黒煙を吐いて怒濤どとうのように、海

水を吐き入れていた。一時の汽笛きてきが鳴っても、職工たちは、わい  
わいとさわいで、就業にかかりそうもない。

「困りましたなあ」

「ほんとに、どうして下さるの」

「船長！」

職長は、時計を示しながら、

「三時四十分にしゅつきよ出渠しゅつきよできないと、一日延びますが」

「それは、いかんです」

「会社こそ困ります。次の入渠船へ、莫大な違約料をとられます  
からな」

船長は大きくうなずいて、ボーイに短銃ピストルを取りにやった。短

銃は空へ向けられた。空の猿と甲板デッキの飼主とは、主従で腹をあわしているように船長へ齒をむいて吠えた。

短銃を見せても、猿は下りて来ない。問題は紛糾ふんきゆうした。相互の感情と利害は妥協の余地が見出せないように相反している。

上甲板は、喧々囂々けんけんごうごうとした。

トム公は、木靴を脱いだ。

「なにを騒いでやがんでい」

彼のすがたが、栗鼠りすみたいに帆柱へ駈け登ってゆくと、彼を知る彼の仲間のかんかん虫たちは、こぞつて拍手と歓呼を下から送った。

「プリンス！」

「うまくやれ」

「一割取ってやるぞ」

「一割じや承知できねえ」

ワーツ、という動揺どよめきに、上甲板の醜い喧噪けんそうは、一時に押し黙ひとみつて、眸ひとみを吊り、眉をひそめ、生唾なまつばをのんだ。

トム公は、太陽の中にいた。

## 私服

帆柱マストの上から堅パンが落ちて来た。トム公は敬礼していた。群集にしたのではない、猿に。

猿は、白い歯を与えたのみで、敬礼を忌避きひした。トム公は、帆柱へ足を巻いて、また一枚堅パンを出した。

半分は自分が食った。

半分は、彼が抱えて行つた子猿に食わした。彼は、再び、親猿に敬礼した。

万雷のような歓呼の中へ、トム公は、二匹の猿を連れてすべちり落ちて来た。——甲板へつくと同時に、彼はくろんぼの波に胴上げされて、狂的に手から手へ送迎された。

猿も、オペラバッグもたちまちどこかへ素つ飛んでしまった。

船はいつのまにか、船渠ドックの地上から十尺も高く泛うかび出している。職長の指揮笛が、両舷のワイヤロープへあわただしく鳴っている。

三時四十分――

汽車の発車時刻のように、満潮期の海へ、船渠は口を開いた。  
山のような影を、ゆるやかに吐き出した。

「どうしたい、あの、らしやめんは」

「いつのまにか、ドロンでやがる。ふてえ奴だオイ、どうする気だ、プリンス」

「何がよ……」

ペンキ小屋の裏で、ストライキが起った。彼の支持者たちは、不平だった。トム公は、草原の中に乾いている快走船ヨットの中で、阿あ片へんの混合している噛み煙草を噛んで、黄いろい泡を口の中で揉みながら、夕方の空をながめていた。



「何がって、あのオペラバッグよ、十万両の一割なら、一万両だぞ」

「会社へそう言つてやれ」

「黙つてるばかがあるもんか、職長へかけ合えよ」

だが——そのうちに六時半の解放汽笛が鳴ると、みんな頑張る氣を失つてしまった。一刻も早く帰りたい方が、先になった。

きんぼたん  
金 釦

をつけた守衛は、いつもの出口に立つて帰る者のポケットや弁当箱を、両方から一人一人撫でまわした。それは通常のこと、侮辱とも感じないほど馴れきっているが、きょうのは、いやに手間がかかつて、なかなか先が吐き出されなかつた。

から  
空の弁当箱は、いちいち解かれた。口を開かせられたり、綱を

跨がせられたり、ひどく、きびしい。

「私服が来ている」

そんな囁ささやきが、伝わった。

「私服、どうしたってんだい」

トム公は、反抗的に、前の者をグイグイ押した。すると、彼の前に立っていた髯の亀田が、

「ちよつと、君」

と、私服に引つ張り出された。

「なんですか」

「まあ、いい、こつちへ来い」

背中を小突かれて、守衛部屋へはいつて行った。

## お馬車

トム公は、驚いた。

「開けてくれ、おじさん」

木靴の先で、守衛部屋の戸を蹴った。

「おまえに用はない」

会社の守衛は、彼をつまみ出そうとした。

「こつちで用があるんだ」

彼は、中へとびこんだ。

先刻の夫人と令嬢がびっくりして、卓テーブルから立った。オペラバツ

グが、彼女と刑事の間にあつた。

刑事は、彼女たちを、眼でかばいながら、

「なんだおまえは」

「かんかん虫のトム」

「何しにはいつて来た！」

「おれの連れだよ、その人は。一緒に帰るんだ」

「これは泥棒だ」

「冗談じゃない……」

「——奥様」

刑事は、体を横に反そらした。

「ご紛失の腕輪は、これでしような」

プラチナだいの金剛石ダイヤモンドの環が、燦然さんぜんと、卓の上におかれた。

「え、これですの！ ……まあ、よかったわねえ、奈都子なつこさん」

「ほんとにネ」

「ほかに、まだ何か、あつたように伺いましたが」

「え、書類と、粒の宝石が、…でも、ようございませわ、これさえ戻れば」

「宝石じゃ、ちよつと出ませんな。指輪ぐらいなもの、食つてしまいますからな、こういう動物は」

と、亀田の頭へ、手をのせた。

「動物だ？」

亀田は、刑事の手をふり落しながら、わなわなふるえる声で、

「動物たあ何ですか。その品が、吾輩わがはいのポケットから出たから、吾輩が泥棒だというように言うが、全然、知らんこツてす。まったく、誰かそばにいた奴が」

「いかんよ、後で聞こう」

「冤罪えんざいだ、動物とは、何ですか」

「よせ！ 興奮するな」

そこへ、会社の給仕が、扉を開けて、

「奥様、お馬車が参りました」

刑事や守衛は、いっせいに壁へひらいて、

「とんだご迷惑をかけましたが、どうぞ、ご主人に、悪しからず」

「じゃ、後はどうぞ……」

トム公は、立ち塞ふさがった。

「待ってくれ、オイ」

「……………」

奈都子は、まっ蒼さおになった。

「伯母さん、こわいわ」

「人に濡ぬれ衣ぎぬを着せて、すまして、帰るのか、てめえツちは」

「こら！」

「何がコラだ。もつと、調べろ」

「明白じゃないか」

「うそだい」

「君！ このチビを追い出してくれんか」

守衛は、両方から、トム公の襟くびをつかんで、ズルズルと引張った。トム公は、両方の手を、扉ドアと壁に突ツ張って、木靴でバタバタと床をたたいた。

「こら、出んか」

「出ン」

「どうしましょう」

「よろしい」

刑事は立って来て、柔道何段かの實力を示すように、トム公の喉首を壁際へ持つて行った。

「さ……奥様、お通りください」



柔道何段かの前には、トム公も毬まりのようだった。守衛たちは、さんざん転がった彼の体を、三人でかついで、門の外へ抛ほうり出した。

「畜生」

トム公は、閉じられた鉄の門へぶつかって行った。亀田を返してもらわなければ、十銭銀貨二枚を待ちこがれて、ランプの石油も買わずにいる彼の五人の家族に対してまみえることができない——という気持でいっぱいだった。

「やい、ヘツポコ、チョンガリ、南京虫ナンキンむし！」

赤と青の角燈の光が、彼のうしろから虹のように投射して掠め  
去った。トム公は、それが本社の表口を離れた馬車だと知ると、  
まっしぐらに追いかけて、馭者台ぎよしゃだいへとびついた。

「あつ、違ッた」

二頭立ての中に見えたのは、トム公の知らない小父さんおじだつた。  
前内閣総理大臣大隈重信おおくましのぶの顔も、新聞を見ないトム公には、  
幸いにも、あのへの字口が、そう大したものに見えなかつた。

だが、彼は、それが先刻の二婦人でなかつたことに狼狽ろうばいした。  
馭者の鞭むちは、風を切つて、飛び降りた彼の影をビュツと払つた。

とたんに、馬車の戸を排して、ふたりの憲兵が、外をのぞいた。  
トム公は胆をひやした。横ッ飛びに逃げ出した。豪放な笑い声が、

そのうしろで聞こえたように思った。

「プリンス！」

「どこへ行くのさ」

野毛橋のげぼしは、通せんぼをして、彼を通さなかつた。彼は、咽むせるような匂いに包囲されて、軽々と、河岸の暗い所へ運ばれてしまつた。

「なぜ、黙つて通るの？」

女たちは、みんな、熱帯人種の好むような強い臙脂えんじのハンケチを襟にむすんでいた。共同便所の異臭と柳の葉のそよめく闇に、十二、三の白い顔が、海月くらげみたいにぽかぽかと彼を取り巻いた。

夏に、秋に、春に、夕暮となると、享樂の開港場の街を押し流

してあるくハンケチ工場の女工たちである。西戸部にはむらさき組、大田町には臙脂組、きたかた北方にはコバルト組、それらの色とりどりが、伊勢佐木町いせざきちようの夜景を、どんなに濃くすることか。

「どうしたの？ トム」

「まあ、やアだ！」

「泥だらけよ」

「血が」

「なめてあげよう」

トム公は甘んじて、頬と、右の肱ひじを、こそぐツたい舌に舐めさせていた。

「喧嘩したの？」

「ううん」

トム公は、彼女たちを見廻して、

「たれか、五十銭一つ貸してくれ」

「五十銭？」

「貸してくれ」

「ないわ」

「たれか、あるだろう」

「二十銭なら」

「わたし、五銭ならある」

トム公のてのひらに、白銅が二つ、小さな銀貨が三ツばかり集まった。

「これから、<sup>ナンキンまち</sup>南京街？」

「それどこじやねエよ。人の家へ持つて行くんだ」

「違うわね、いつもの、プリンスと」

「<sup>しゃく</sup>癩にさわった、おら、癩にさわった。もう<sup>ドック</sup>船渠へは仕事に行つてやらねえ。警察と喧嘩してやる。——それから」

「まア、大した威勢だわよ」

「だから、好きサ」

トムは、肩をゆすぶつて、女たちの手を振り落しながら、

「今夜は、ふざけッこなしき。おれは怒ってるんだ。——弁天通りの高瀬つて、何屋だい」

「高瀬なら石炭屋だわ」

「石炭かつぎかあ」

「違うわよ、百万長者だつていうじゃないの」

「もとは、おれツちと、おんなじだ」

「そうそう、それがどうしたの」

「火を放<sup>つ</sup>けてやる！」

「え」

「ウソだよ」

トム公は、いきなり、足もとの砂利をつかんだ。左の手から一つずつ取つては、川<sup>かわづら</sup>面へ向つて低く飛ばし始めた。

暗い水面に、燕<sup>つばめ</sup>の腹がするのように、小さな飛沫<sup>ひまつ</sup>がピヨイピヨイと切れてゆく。

「二つ切れた——」

「三つ切れた！」

プリンスに習って臙脂の女たちも、ポカポカと石を投げこんだ。キヤツキヤツと笑って手を打った。

木靴は、めんどろ臭くなって、大きな石を一つ蹴落した。どぼーん！ と白い水玉が岸まで上がった。

「ひどいわ！」

水鳥のように、女たちが分れ飛んだ。トム公は、野毛橋のらんか闌干から振り向いていた。

「——今のこと、誰にも言うな」



## 商魔

朝、まだ朝霧や紙屑がほの白い横浜はまの町を、二人曳びきで波止場へ飛ばしてゆく四、五台を見る。——その上には、ゆうべ、真金町の日本ムスメに、もてたか、ふられたかした赤羅紗ラシヤの外国士官どもが、籐とうの細いステッキを膝に挟んで、強烈なウスケの大おお壇たんを喇叭らっぱ飲くみにつかみ、俵くるまから俵の上へ、手わたしに飲くみ廻まわしながら銀貨の音で、車夫の細い脛すねを叱しつたして行く。

傍ぼう若じやく無く人ぶな俵じん上しやの聲じよう、日本ムスメの貞操と、シンガポール、蘭らん領りようあたりの女のそれとの値段の比較や、いわゆる、大和やまとなでしこの、低級だまさ、騙だましよさ、肌くのよさ、髪かみあぶらの臭くささ

などを、日本人なみの惚気のろけまじりに、唾つばを吐きつつ爆笑して行つた。

それが、当時の浜ツ子には、いかにも颯爽さつそうと見え、開化の賓ひ客んきやくらしく見え、偉えらく見え、文明人らしく見えた。

商館の通勤者、税関吏、お茶場女、燈台局の官員さん、沖仲おきななか仕し、生糸検査所へ初めて採用された海老茶袴えびぢやばかま、すべて朝まだ

きの人通りは、みな彼らに道をひらいた。先生に、そうせよと教えられているのか、小学生は、脱帽した。

そんな時、彼らが、俥しやじよう上から捨てる葉巻の吸いかけを見る  
と、きつと、パンへ飛びつく痩せ犬のように、頭から南京米ナンキンまいの麻袋をかぶっている男が、鳶とびのようにあらわれて、攫さらい取るよう

に、自分の口へ横に啞くわえた。

だから彼等が、どんなにジャップを輕蔑し、また開港場の我利我利人種も、それに対していかに、安ッぽく媚こへつらび諂へつらつたことか。

横浜で屈指といわれる豪商でも、ここぞと思う大商おおあきないをす

る時は、船の碇ていはく泊期間だけ、目ぼしい外人を生擒いけどつておくため

自分の妻、妾めかけ、娘さえ提供するのがあるというほどに。で、北仲

通りの高瀬商会などにも、チヨイチヨイそんなのが出入りする。

そのためにか、店の横から裏通りへとおして華麗な、和洋折せつち

衷ゆうの青楼おちややとも住宅ともつかないものがあつて、今朝も、ふた

りの洋人が、濁った眼をして、棧橋へ歸つた。

それを、送り出すと、夫人マダムお槓まきは、伸びをして、やけに、ひと

りで肩を叩きながら、まだ煙草の煙の濁っている西洋間の長椅子へ、自分を抛り出していた。

「もう、くさくさしちまう。いくら店の為になるつたつて、毛唐のお客は、たくさんだわ」

「……………」

うすい髪の毛に、ていねいに櫛の歯をとおしている、脂肪性赤鼻質の彼女の主人の、高瀬理平は、ちらつと、新聞紙から額ひたいごしに彼女をながめたが、また、黙ってしまった。

「あなた」

「ム？」

「わたし、きょう、千歳ちとせへお供するのは、ごめん蒙こうむりたいわ」

「なぜ工？」

「なぜって……」

「いかんわえ、そんなこたあ。ゆうべのもだいじなお客筋だが、きようのは、なお大事なんじや。千歳の方をひきあげさせて、ぜひ、わしの本<sup>ほん</sup>牧<sup>もく</sup>の別宅へお連れ申さにやならん。そういうことは、女の交際術で、上手にやるのが役目だ。またお前が、そういう方にかけては、諸事抜け目がない奴と思えばこそ、家へ入れたのだからな。でなければ、以前の<sup>あいて</sup>ように、金<sup>こん</sup>春<sup>ぼる</sup>の姐<sup>ねえ</sup>さんに帰るか、日蔭者になつて、猫でも対<sup>あいて</sup>手にするがええ」

「まったく、今になつて、大後悔だわ。妾<sup>めかけ</sup>といわれても、尾上町に別になつていた方がよッぽどよかつた」

「ば、ばか！」

「でも、ここへ来て、夫人マダムといえばおていさいはいいいけれど、しよツ中、異人のお相手ですもの。——まるでチャブ屋おかみの女将だわ」

「よせ！」

誰か、ノックしていた。

「奈都子なつこさん？」

「ええ」

理平は、姪めいの顔を見ると、すぐ言った。

「奈都子、きようは大隈伯のお顔を見せてやるぞ。前の総理大臣閣下、新聞でよりほか見たことはあるまい、御前様のお顔は」

「なんのご用事で行いらっしやるの」

奈都子は、やがて義父になる伯父と、生なさない伯母の前に、一つずつ珈琲コーヒをおいた。

「そりや、商売じゃ」

「だって大隈さんは、石炭なんぞ、買わないでしょう」

「大隈さんに、石炭は売りつけられんよ、運動してもらうんじや、海軍の方へ。こんどの遠洋航海の艦隊だけでも、たいへんなもんだよ。また、生いと糸の方でも、いろいろといい便宜がある」

石炭と生糸の話になると、奈都子は、理平の顔が、石炭に見えたり、さなぎに見えたりして来た。開港場成功者は、みんなそうであったがこの伯父が昔、石炭かつぎをしていた頃の姿まで見え  
て来て、いやであった。

「伯母さん、きょう、どうなさるの」

「疲れているから、今、お断りしていたところなのよ。奈都子さ  
んだって、大隈伯なんて、おじいちゃん顔なぞ、見たくないわ  
ね」

「え……でも……何でしょう」

目交めまぜで、クスリと笑っていると、理平は、新聞に眼を突かれ  
たように、ガチリと、珈琲茶碗をおいて、

「おい、こら、お前たちや、きのう船渠ドック会社へ何しに行ったんじ  
や。——新聞に出とる、新聞に」

と、新聞をたたいた。



ゆうかぜ  
夕風の鞭むち

「あらつ」

お槇と奈都子は、下品に笑い出した。

「ま、新聞に？——じゃ、隠していてもムダだったわね、こう暴露しちまッては」

「ろくな所へ行きおらん、あんな、かんかん虫どもの集まッとする所へ行ったら、ペスト菌きんにとツつかれる。自体、何しに行ッたんじゃ」

「外国船のM号に」

「M号には、わしの店では、石炭を売っておらんが」

「ハムスンさんへ、お礼に伺ったんですわ」

「ハムスン？ あのグランドホテルで、何かやった下手へたツくそな、音楽家の」

「え。贈り物をいただきましたから——奈都子さんも、あたしも」  
理平は、不快そうに、新聞をクシャクシャに持って、もう一度読み直しながら、

「それはええが、お榎は、わしがやった腕環を盗まれ損ねたというじゃないか。なぜあんな高価なものを持って歩く？ すぐ、犯人が捕つかまったからよいけれど、もし宝石いしをバラバラにしてこかされたら、それ限りぎじゃないか。金庫へでもしまッつけ。ばか！」  
「よく、ばかの出る朝ですこと」

「毛唐の客は、うるさいの、嫌いのと言つて何だ、あんな西洋乞食のヴァイオリン弾きの尻などを追ひ廻して」

ちようどよく、その時、電話のベルが鳴つてくれた。

「あ……千歳ちとせの女将おかみからだろう、大隈伯がお目ざめになったら、知らせてくれるように頼んでおいたから」

理平は、あわてて受話器を耳にあてた。

「……おう、わしは高瀬、左様、主人の理平じゃがね……え……えつ……何？ ……何だア？ ……何じやつて？ ……」

耳を疑るように、何度も訊き返していたかと思うと、彼は、電話機が相手の顔に見えて来たように、呶どな鳴ツた。

「——わしは、お前みたいな者は知らん。それでも来ると言つて

も、面会はせんぞ。——何、奥さんに？ 奥は旅行中じゃ。——  
愚連隊じやろう貴様は……来るなら来い！ 刑事を呼んでおくか  
ら！」

「おじ様、どうなすツたの」

奈都子は、電話口を離れて椅子へ戻った彼の顔いろに、彼以上の動悸どうきをうけ取って訊たずねた。

「なに、愚連隊にちがいない」

「何だつて言うんです」

お榎も、不気味そうに白けて言った。

「——今朝の新聞を見た奴じやろう、そのことについて、わしか  
おまえに会いに来ると言うから、呶鳴りつけてくれたんじや、警

察でも、あの愚連隊のやつらを、何とかしてくれんと困る」

そう言いかけて、彼はまた、ぎよつとしたように振り向いた。

つづけさまに、電話は、生きた怪物ばけものみたいに震鈴していた。

「お槓、おまえ出ろ。あ……おまえじやいかん、奈都子、女中になつて、おまえが聞いとけ。……そしてな、今の奴じやつたら、

ご主人は只今もう東京の方へお出ましになりましたと」

だが、今度かかって来たのは、港町の青楼おちややからであった。や

さしい女の声なので、奈都子は、落着いて聞くことができた。

「おじ様、千歳の女将さんよ」

「そうか、大隈の御前様はまだおいでるらしいのか」

「え。ですけれど、きようはまた、水上警察旗相定祝賀会という

のへご出席なんですつて。晩には、グランドホテルで、大使館の方や知事さんなんかの晩餐会があるから、とても、きょうはお目にかかる隙ひまがないでしょうつて」

「だから、そこを頼んであるんじゃないか、あの女将おかみも役に立たん女じやの」

「いいえ、ですから、まだ三、四日は、ご逗留とうりゆうになるらしいから、よい折があつたら、お電話でお知らせするというんでしよう。おじさんみたいに、半聞きで、すぐに人を働あたしちや、失礼だわ」

「分つた、分つた、それならば、それでいい。折角、横浜はまへ来た大官を、利用せずには帰しちやつまらんからの」

「どうしておじ様は、官員様ばかりそう崇拝すうはいなさるの」

「崇拝はせんよ、勲章くんしょうを佩さげた鴨かもをつかまえんじや、大きな

実業家にはなれやせん。知己は、上に求むべきものさ。たとえば、将来おまえのお智むちを探すにしても」

「わたし、勲章を下くだげた人、嫌いだわ」

「そうとも、お金持の方が、遥かにええ」

「金持なんか、なお嫌い」

「じや、貧乏人になりたいのか」

「働く人が好き。ねエ、おばさん、船渠ドックへ行いつてみて、わたし初

めて、金持の悲哀を知しつたわ、あの、汗みどろになつた職工の顔や、ハンマーの音を聞きいてさえ、物が美味おいしく食くべられそうな気

がしやしない？」

「ま、変っているのね、奈都子さんは。わたしは、気持がわるく  
つて、しじゅう鼻を抑えていたほどのなのに」

「それみろ、あんな所へ連れて行くから、すぐペスト菌にたから  
れて来<sup>き</sup>おる。それよか、ぼつぼつ支度をしなさい」

「千歳は、お見合せになつたんでしよう」

「わしにも、招待状が来ておるから、グランドホテルの方へ出席  
してみよう、大隈伯にも、そんな場所で顔を知って戴いてからの  
方が都合がええ、——榎も、おまえも、うんと盛装せい、伯は派  
手好きじやという話だから」

各 《めいめい》の朝湯と化粧に、三時間ぐらい費<sup>つい</sup>やされた。



首よそおだけ粧よそおったところで、万珍楼まんちんろうの支那料理をとって昼食がすむ。髪結が帰る。洋服の着付師のお定さんが来る。理平は、万年青展覧会ほどある屋上庭園から降りて来て、ちよつと、店へ顔を出して、金庫の鍵を鳴らしながら奥へ引っこむ。

午後四時——やつと女中が馬車会社へ電話をかけている。夫人マダムお槇は、かつらのように夜会巻ゆに結ゆつて、居留地仕立の洋装に開化人のあらゆる粧よそおいを凝こらし、バイオレットの香液を咽むせるほどふりかけて、金こんぼる春時代の全盛さを、ちよつと理平の眼しに惚ほぼせた。奈都子はまた、きのうとは下から帯まで色彩を変えた裾模様しに、白金と宝石のかがやきを歩身から撒き散らして、フロツクコートの伯父を中に挟んで、馬車へ乗った。

夕風を切つて、馬車のムチは鳴る。

赤塗の轍わだちはれきろくと関内かんないの文化街を真つすぐに疾走した。

前の台に胸を張つて、二頭の馬を操あやつりながら、辻々の人を避けさ

せてゆく馭者ぎよしやの鞭振むちふりを眺めつつ行くことは、彼女たちに快い

誇りを満たした。長い点火器の棒を持って飛ぶ瓦斯ガス燈夫や、石せき

油罐かんとキャタツを腕にかけた軒燈屋が、縦横に町を駈けて、町

の夜を華やかさせてゆく。

「あらっ?」

うしろの幌ほろが、ばり、ばりッ、といったのでお槓も奈都子も、

同じ姿態をして、振り向いた。

「あ……」

理平も首を捻じ向けた。

そして、三人とも恟きよツとしたように浮腰を立てかけると、そこ  
の幌ほろを、海軍洋刀メスで十文字に切り破って、メリケン刈の頭を突き  
出した少年マドロスが、にっこり笑って、

「大将、今朝ほどは失敬」

と、言つた。

## 宣戦

「こらっ、そんな所へぶら下がっちゃいかん。降りろ、怪我けがをす  
るぞ！」

少年マドロスは、なれなれ狎々しい眼で、理平の襟元から車内をジロジロと見廻した。

「怪我をすりや、病院に入れてくれるだろう。だが、ご心配はいりませんや、馬丁台に足を掛けているんだから」

「あぶない！ けがらわ穢しい！ 降りろ」

「いいよ、グラन्दホテルまで送って行くよ」

「ああそうか、おまえ——波止場乞食か。これをやる。寄るな」

理平は、あわてて、五十銭銀貨一枚を彼の手に握らせた。彼は掌の銀貨に軽蔑をくれて理平の顔へほう抛りつけた。

「何をするツ」

「おれを、波止場乞食ツて言やがったからよ。こう！ おれにや、

立派な商売があるんだぞ」

「なんだツ貴様は」

「今朝も、電話で言ったじゃねえか、よく覚えとけよ、おいら、かんかん虫のトムってんだ」

「あつ、今朝のは——おまえか」

「おれだよ。紳士だろう、ちゃんと、電話で、お目にかかることを、断っておいたんだから」

「おい、ぎよしや馭者ぎよしやつ、馬車を止めい」

「おじさん」

トム公の海軍洋刀メスの先は、真まつ蒼さおになつて顫おのいている奈都子の顔のそばまで届いていた。

「騒ぐと、お嬢さんの顔を、こここの、幌ほろみたい破やぶッて逃げちまうぜ」

「……………」

「卑ひきよう怯じゆうなことをしつこなしさ。おら、ただ懸かけあい合あいに来ただけなんだよ、何も、人殺しに来たんじやないよ」

馭おん者は、聾ろうのように、自己の使命だけを守つて、税関前の大通りを曲がり、前よりもはやく快走をつづけている。——理平は、子供だとは思いながら、幌の破れから突き出している顔だけを見ているので気味が悪かった。

「お槓おん、おまえは、このかんかん虫のトムというのを知っているのか」

「い、いいえ」

彼女のことばは、ひつつれた喉からやつと洩れた声だった。

「だって、今朝の電話では、昨日のことについてと言ったが……」  
「そうだ、そのことさ！」と、トム公は流暢な横浜弁はまべんで一息に言った。

「——きのう、ここにいる女の人が、船渠ドックのM号へ遊びに来てる間に、オペラバッグを船のインド猿さるに攫さらわれたんだぜ。その中や十万円もする腕環がはいってると言ッてベソかを掻かいてたから、おら、可哀そうだと思ッて、マストへ登ッて取り返してやっただ」

「ウム……新聞で見た」

「——その礼なんかをセビリに来たんじゃねえぜ。——ところが、船渠の退け時間になつて帰ろうと思うと、警察の私服が来やがつて、おれが、初めて商売に連れて行つたうちの近所の亀田さんて人を、いきなり泥棒だといつて捕えやがつた。亀田さんは、そんな人じゃねえ！ おら、言つてやつたのさ、だが、刑事のボンクラ野郎は、亀田さんのポケットから、指環といつしよにあつた腕環が出て来たから、何でも、承知しねエんだ。そして、とうとう警察署へ連れて行つてしまやがつた」

「フーム」

「フームじゃねえよ、大変だよ、亀田さんが帰らねえと、イロハ長屋に残っている病気のおかみさんの、子供だの、五人の者が



乾干<sup>ひほ</sup>しになるんだぜ」

「だから、どうせいと言うのか、おまえの要求は」

「亀田さんを返せッてんだ」

「そりゃ、警察に言う筋じゃないか。ほんとに泥棒せんものなら、今に帰してくれるだろうし悪心のあるものなら、監獄へ行くのが当然じゃろう」

「それでいいのか」

「おまえ、幾歳<sup>いくつ</sup>じゃ」

「大きなお世話だい。それでいいのか、それで……」

「子供のくせに、そんな心配は、せぬがええ、生意気じゃ。お上<sup>かみ</sup>のご裁判にまかせておけば間違いはない」

「木刀お巡査まわりに任して、安心していられるもんかい。——やい、そこにいる女！ てめえツちも、そうだぞ。礼なんか欲しかあねえが、あんなに、ベソを搔いていた品物を取返してやっても、おれに、有難うとも言わなかつたじゃねえか。ほんとなら、てめえたちが頼んでも、亀田さんを貰い下げしてくれるのが、あたりめえだろう」

「……………」

「やい、何とか言えよ、何とか」

「……………」

「らしやめん奴」

「……………」

「それでいいのか。それでいいのか。そいつをきようは聞きてえんだ。その返事次第で、こつちも宣戦布告をするからな。やい、何とか言えよ」

その時、トム公のからだは、後ろから大きな手に抱き込まれて、フワリと馬丁台からかかえ降ろされた。馬車は、いつのまにか、ピタリと止まっていたのである。

「やつ、いけねえツ」

トム公は、足を宙にバタバタさせながら、水上警察署の青い瓦斯燈スとうを見た。馬車はその門の中へ、半分はいつていた。馭者は、石段の上の扉を半分押しして、内部の巡査へ応援をさけんでいる。

「こんちよろチビ奴。餓鬼がきの分際しおツて、本官に、反抗しちよ

るかッ、こらッこらッ、来いッちゆうに」

トム公の首根っこを抱き締めて、勇猛に引き摺り込んで来た木刀の巡査は、石段の前まで来ると、

「あッ」

と彼の首をつよく押して、火のついた手袋を脱ぐように、振り離れた。トム公は、仰向けに転びながら、巡査の指の肉片を、口から吐き出した。そこへ、飛びかかろうとした馭者は、彼の木靴の先ッぽで顎あごの骨を蹴飛ばされた。

さきんくつ  
砂金窟

トム公は、青い夜の中へ駈け込んだ。晩餐樂ばんさんかくのゆるい奏曲が、ホテルの窓から海へ吹かれていた。

彼は、居留地の七番館の塀の蔭に、首を沈めて屈かがんでいた。木刀を抑えた駈足かけあしの巡査が、三、四名、眼の前を掠かすめたが、振り顧かえつたひとりの眼が、トム公を見つけた。

トム公は、煉瓦の上へ躍ドックつた。船渠の板足場をわたる時の軽快な足どりが、巡査を擲や擲ゆするようにヒヨイヒヨイと弾はずんで、塀のミネを駈け出した。そして、すばらしい迅はやさで、隣りの八番館の庭へとびこんだ。

何処かの領事館であった。巡査はたじろいだ。彼らが、門の前で何かガヤガヤ評議している間に、トム公は、コック部屋の外に

干してあつた白い前掛エプロンを胸にかけ、肉屋の籠を肩にかけて、ついでに、そこにあつた自転車に乗つて、フルスピードで警官たちの前を弧を描いて走り去つた。

ナンキンまち

南京街の肉問屋、田村の前まで来ると、トム公、ぽんと降りて、

「おばさん、こんばんは」

豚の如く肥えたこの内儀おかみさんは法華ほっけ信者とみえて、店先から見通しの部屋で、非常に木音のよく響くものをカチカチと懸命にたたきながら、トム公を横目に見て、

「こんばんは」

と、お題目のあいだに言った。

「これネ、おばさん」

「はあ」

「ここんちの自転車だろう。居留地で、自転車を持つとる家は、何軒もないからね」

「そうだよ、家の<sup>うち</sup>だよ」

「八番館の横にあつたから、持って来てやったよ。いいかい、ここへおいとくよ」

「おやじさんは、見なかつたかね」

「見なかつたよ。——駄ちんに、鶏卵一個貰つとくぜ」

卵の箱から、一箇取つて、奥へ示しながら往来へ出た。彼は空腹だった。何しろ、きのうの銀貨は、みんな亀田の家族に<sup>み</sup>貢いで

しまったので。

トム公は、木靴の尖さきで、卵の殻からの両端をコツコツたたいた。歩さきながら、小さな穴を開けようとして、ていねいに、殻の亀裂きれつをむしっている彼の姿は、いかにも無邪気なマドロスである。

チュツと舌を鳴らしながら美味うまそうにそれを啜すすった。——と思おもうと、いきなり拳を振りあげて、彼へ嗅覚を向けて来た野良犬へ、卵の殻をたたきつけた。犬は驚いて、横ツ飛びに逃げた。そこに手をつないでいた清しんこく国の女の子が、棒の倒れるように転がった。纏てんそく足をした耳環の母親が、子供を抱き起しながらトム公を早口ののしで罵ののった。

「おれじゃねエや！」



トム公は、ポケットへ手を突っ込んで、ちよつと首をかしげていたが、ふいに、飛びこむように、うす暗い露地へはいつた。

石造家屋のうす穢ぎたない炊事場と炊事場がくつついていた。井戸のまわりで、四、五人の清国人が、豚の腸を分配している。今の犬が、バケツに首を突ツこんでいた。

幾つも、幾つも曲がった。曲がるほど、南京街の裏は、穢ぎたなく、狭く、異臭が濃い。

屈んではいれる程度の、石窟せつくつのような家の口が、右側にあつた。眠たげな赤い軒燈の下に、老ラオチユウ酒ビンの瓶びんが五ツ六ツ転がっているのを見る。

そこを、トントンと降りて行く。

「だれ？」

「トム」

「トム？」

地下室の番人は、<sup>にら</sup> 蕪くさい口臭と、安煙草に<sup>し</sup> 滲みこんだ体を、彼のそばまで運んで来て、何か、求める顔をした。

トムは、ポケットをさぐつて、<sup>しんちゆう</sup> 真鍮の貨幣<sup>ダラ</sup>を出してみせた。貨幣の両面には、<sup>いんび</sup> 淫媚な清国人の笑い顔がポンチ絵風に浮かしてあつた。

この倶楽部<sup>クラブ</sup>の門鑑<sup>あへん</sup>を阿片ダラといった。番人は、それを認める<sup>と</sup>、鍵を出して、突当りの頑固な戸を開けた。

中は、真つ暗だった。

だが、石の歩廊を少し歩いて、左側のカーテンをあげると、

「ほう?。」

と、その中で、間の抜けた驚き声を出した者がある。

「李鴻章りこうしよう、また来たよ」

「トムか」

李鴻章にそっくりな男は、もうひとりの清国人を相手に細長い網袋の両端を持ち合つて、何かその中にある非常にいい音のする金属を、極めて気永に、揺りうごかしていた。

「何をしてるんだい?」

トム公は、そこにあつたピンヘットを一本抜いて、燐寸マッチをする  
と、すぱツと美味うまそうに口へ啜くわえた。

「何さ、李鴻章」

「これ？」

「ム」

「砂金採り」

「へえ」

「まだわからぬ？」

「わからねえヤ」

「これ、みんな金貨。五千円程ある、こうして一晩ゆすぶる、金貨の角と角がすれるな、それ細かい金のクズが下にたくさんたまる、また、銀行に持ってゆく、金貨の額少しも変りない、またお紙幣さつを金貨に換えて来るな、またこれをやる。いくらでも砂金採

れる。密貿易、阿片、みんなあぶない、これいちばんいい」

「ちつとも、面白くねえヤ」

トム公は、歩廊へ出て、隣のカーテンを剥めくつてみた。卓テーブルの上に、阿片を吸う真しんちゆう鍬くわの道具が、幾つも、ぴかぴかと光つておいてあるのみで、今夜は、誰もいなかった。

「李鴻章、元町のお光さんは、来ねエかなあ」

「お光さん？ 来る」

「何時頃？」

「何か用あるか」

「あるから聞くんない、急に会いたいのさ、お光さんの智恵を借りたいことがあるんだよ、どうしても、おれだけじゃ、できねえ

ことだから」

「それでは、薬師様へ行く方、はやい、こん夜縁日ある、ムラサキ組の女衆、みんな、あそこに寄る」

「あ！ 薬師か」

トムは、阿片クラブの砂金窟をとび出した。

いい月が空にある。

## 角燈

赤い谷戸やとの薬師の縁日ちまたの巷から、その晩、彼が帰ったのは、ずいぶん、遅かった――

いつも、どんなに遅くなっても、寝もやらずに、彼の帰りを闇の家で待っている彼の母は、たいへん、勘がいいので、それらしい木靴の音が、狭きょうあい隘いな路地を弾はずんで来るとすぐに、

「トムかえ? ……」

と、闇の中に坐りなおした。

この家にはランプがなかった。トム公の母親は、このイロハ長屋にあっては、どうかしてできた一つぶの天然真珠のように、若くて、美しくて、この細民窟のすべての人になく常識ゆたが豊かであつた。——だが、悲しいことには、彼女は、盲目だつた、自分の指も見えない黒内障そこひであつた。

「トムかえ?」

「あ、あ」

トム公の返辞は、元気がなかった。六畳一室の闇の中には、なんにも、食物のにおいがなかった。

「おつ母<sup>か</sup>あ、ご飯を食べたのかい、今夜は」

「食べたよ——お民さんのお家<sup>うち</sup>から、また一合、拝借してネ」

「じゃ、もう何合も借りができたんだな。今に、倍にして、返してやるよ」

「お民さんは、親切だから、まだほかに、砂糖だのお醤油だの、お野菜まで」

「アア分ったよ、今に、みんなお礼するよ」

「おまえ、ご飯は」



「おら、眠たいヨ」

畳をなで廻す手が、トム公のからだへ探り寄った。そして、その重いからだを、乳呑み児ちのこのように抱いて、自分の寝ていたうすい夜具の中へかかえ入れた。トム公は、眼をあいていながら、母のなすがままに、甘えていた。

「おまえ、きょうも仕事に行かなかつたの」

「仕事どこじやないもの」

「悪いことをして歩くのは、やめておくれ。ネ……おつ母さんが、ひとりで、こうしていても、どんなに、心配だか。……分るだろう、おまえにも」

「おら、悪いことなんか、した覚えはねえ」

「だって、おまえは、愚連隊だって、言われているよ」

「誰に」

「警察の人に」

「警察のやつなんか、こっちの味方じゃないもの」

「小さな者のクセにして、そんなことを言うから、悪者に間違われるんですよ」

「そんなら、間違う方のやつが悪いんだ。おら、悪かあねえ！」

少したかぶ昂つて、そう言った彼の顔へ、ぬるい乳のような涙が、ばらばらこぼれた。

トム公は、いきなり母の手をふり払って、

「おつ母あは、嫌えだ！　すぐに、泣くんだもの！」

と、ふとんの外へ出て、足をバタバタさせた。てんかんのよう  
に拳を握った。

そこへ、戸が開いた。亀田の細君であつた。乳呑み児に、乳を  
ふくませながら、

「奥さん——トムさんはお帰り？」

「え、今、帰りました」

「トムさん」

トム公は、頭をかかえたまま、こつちを向かなかつた。

「きのうは、有難う。あんなに、お金をいただいてね。ほんとに  
……すみませんね。おかげ様で、五人が助かっていますの」

トム公の母には、何のことだか、わからなかつた。トム公も、

黙りこくっていた。

「——それから、きょう、警察の方が来ましてね、いろいろ調べて行きましたけれど、何だか、当分は、帰されそうもないようですね。……良人は、落魄おちぶれてこそいますけれど、決して、他人様ひとの物を盗むなんて、そんな大それた人間じゃないとお巡査まわりさんにも私から言いましたけれど」

「おばさん、心配しねえでも、大丈夫だよ。きつと、亀田さんは、おいらが、貰って来てやるよ」

「どうぞね、トムさん」

「横浜じゅうの愚連隊に頼んでも、ほんとの泥棒を見つけ出して、おれが、亀田さんを、キツと返すよ」

その時、四、五人の靴音がして、門口から無遠慮な角燈の光が、家の中を照らした。

「——相沢町字和蘭陀横丁百三十七番地、通称イロハ長屋、千坂ちさか桐代きりよ」

木刀を佩さげた巡査が、声を出して、手帖と標札を読みくらべながら、土間へはいつて来た。

「おまえの家に、千坂富磨とみまろという子がいるはずだな」

奔馳ほんち

「どなたでございましょうか」

桐代は、幸いにも、盲目であるために、なんの驚動もうけないで、ふとんの上に坐ったけれど、亀田の細君はふるえていた。

「水上警察署から電話があつて、ちよつと調べに来たんだが」

「警察のお方ですか……」

彼女も、初めてわなわなした。

「山手警察署まで、来てもらいたい。……いやおまえじゃない、

おまえの実子じやろう、富<sup>とみまろ</sup>磨<sup>ろ</sup>という少年<sup>ほう</sup>の方<sup>ほう</sup>」

「富磨なんていう子は、ここ<sup>うち</sup>の家にや、いねえぜ」

トム公が、母親のうしろで、呶<sup>どな</sup>鳴<sup>な</sup>った。

「これ、何を言うんです。おまえが、富磨じゃありませんか」と、桐代はもうおろおろとして、声が立たないほどである。が、――

トム公は、巡査のすがたを見ると、反撥的に、反抗的に、

「おら、誰にだつて、富磨なんて、呼ばれたことはねえもの。おら、トム公だ。かんかん虫のトムだ！」

サーベル

佩剣をにぎつて、立っていた巡査部長は、何か手帖へとめていた鉛筆の尖さきを向けて、

「あれだろう、引ツぱり出したまえ」

と、部下へ言つた。

巡査たちの泥靴が、床をふまないうちに、トム公はバネにかけられたように、木靴を両手にさげて、外へ飛び出した。

「逃げるもんか！ 誰が逃げる！」

駄々ツ子のように呶鳴りちらして、彼が、木靴へ足を入れると、

彼の母親の泣く声が長屋中を起した。隣、隣、隣、前、前、前、イロハ長屋のすべての戸があいて、同時に、露地をふさぐほどな人影が、真つ黒に、そこへ群れた。

「なんで、トム公を引つ張つて行くんだ」

と、まっ先に、食つてかかったのは、屠殺場とさつばへ通つている仙吉という男だった。

警官たちは、牛を殺す時のような嶮けわしい眉間みけんをした男の権まくに驚いて、一応の釈明を与えた。

「山手署の方では、全然関知しないことだが、恐喝罪きょうかつざいということで、拘引こういんするんじゃない、署ではすぐ、水上署の方へ引き渡すから、あっちへ行つて、聞いたらよかろう」



「ばか言つてやがら」

連中は服さなかつた。

「——十四のトム公が、誰を恐喝するんでえ。何か、寝ぼけているんだらう。トム公は、このとおり、盲目の女親を養っているんだから、あいまいな嫌疑で、連れて行かれちや困ら」

「そうだ。それとも、警察じゃ、女親は、乾干ひぼしになつても、いいと言ふのか」

ガラス工場の職工もいた、南京墓の番人もいた、貧乏異人館のコツクもいた、競馬場の馬糞ばふんさらいもいた、チイハの運送屋もいた。みんなそれぞれ、一理屈むくを酬むくいた。

だが、無力の者の力が、いかに多数でもイクオール無力だった。

すくなくも、巡査部長の佩劍はいけんに一触の感も与えはしない。

「じゃお前らも、本署まで、一緒に来たらどうか」

「……………」

その間に、トム公は、スタスタと自分で大股かっぱに濶歩して、相沢の大通りへ出た。巡査は追いかけて、彼の小さな両腕を左右からねじ取った。深夜の冷たい街路には、木もくさん棧の目隠し窓をつけた監獄かんごく馬車ばしやが、青い角燈をともして待っていた。

トム公は、馬車の中へと突き飛ばされた。その途端に、暴風のような長屋の同胞たちの喚きに交じって、ひとりの盲目めしいが、取りみだして叫ぶ声を彼は聞きのがさなかった。トム公は、思わず木棧の目隠し窓へ、顔をこすりつけて見たけれど、馬車の轍わだちは、深

夜の街を、もうグワラグワラと廻っていた。彼のからだは、その中で、セルロイドの噴水玉のように躍るのだった。

彼は、唇を噛んだ。

絶望と、憤怒のいろを抑えて、可愛らしく閉じた眼に、涙はなかった。その代りに彼の手は、腰のバンドを探って、そこに挟んであったかなづち金槌ハンマーのような物を握りしめていた。それはトム公の職業用のカンカンハンマー鎚である。

商船の横ツ腹をなぐる時のように、小さな槌は、突然、馬車の木棧をグワラグワラと破壊しはじめた。馬車は、爆弾を乗せて走っているように木片を飛ばして疾駆しゅくした。前後に乗っていた警官たちは、狼狽しながら、かつ怖れながら、

「こらッ」

と、中へはいった。

馬と車は、曲がった形なりに、突然、砂利を噛んで、疾駆を止めた。そこは、山手の居留地の辻つじだった。鬼おにづた蔦づたのつるがスコッチの外が套いとうでもかぶっているように絡からんでいる異人館の塀際から、煙のような人影が不意に襲襲つて来た。

彼らはまず馭ぎよ者しや台の馭者をひきずり下ろして、息も出ないよ  
うに踏みつけておいてから、馬車のまわりを一周して、

「トム公！ トム公！」

と、野太い声で呼びあつた。

紺ガスリの羽織の長い紐を、首へ引っかけているのもあつた。

バプテスト神学校の制服もあつた。西洋乞食のようなセラパンもあつた。それは雑多な若者の混色ではあつたが、ゴロ歯のさつま下駄と、桜の仕込み杖によつて統一された争鬪的団体の色があつた。

「愚連隊だな、貴様たちは」

そう言つて、馬車の上から睥睨へいげいした巡查も、巨浪の意志が、岩の上の物を持って去るように、苦もなく、地上へひき下ろされて、いきなり、ドタ靴とごころ歯とで、踏んづけられていた。

「愚連隊だがどうした」

「トム公を拘引するなら、吾々われわれを同伴しろ。弱い者いじめをするな」

「民権蹂躪みんけんじゆうりんじゃ」

「かまわん、馬車をやれ」

「やれ、やれ、どこまでも！」

ひとり、占領した馭者台に、大股をひろげて、鞭を振った。七、八人は、中へはいつて、巡査と格闘した。三、四人は、馬車の外へ蛙かえるの目刺めざしみたいになら下がつた。

馬車の中でも、激しい格闘の物音がくりかえされている。馭者台のそばに立ったマドロスは、警鈴をつかんで、大きく振りながら、深夜の異人館町を驚かしつつ奔馳ほんちしてゆく。

その間に、反抗力のなくなつた警官のからだは、一町ごとに、捨てられて行つた。凱歌がいかをあげた馬車はその勢いに駆られつつ、

代官坂の下りへかかつて、まるで、無軌道をゆく機関車みたいに、無鉄砲に、駈け降りた。

「やれ、やれ、どこまでも！」

鞭と警鈴は、乱暴者の気をおおるに持つてこいの伴奏だ。急坂の加速度への調節なしに疾走をつづけた。だが、坂の半ばまで来ると、彼らもやや狼狽して、

「あぶない！ あぶない！ あぶない！」  
と、さけび出した。

馬は、疝かんを起したように、止まらなかつた。いや止め得なかつたのかも知れぬ。四ツの車輪は、壊れて飛ンじまいそうに、猛烈な回転をつづけながら坂の下へかかった。前は谷戸橋の袂で、す

ぐ海岸にちかい、大岡川の川口だった。

「わッ」

「トム！」

「早く出ろ！」

彼等はいッペンに、馬車の両方へ跳び下りた。最後に——トム公が跳んで降りたすがたを認めると、大胆なる馭者は、びしりツと置土産おきみやげにひと鞭くれて、谷戸橋やとぼしのたもとで、ぽんと、地上へからだを交わした。

同時に——真つ暗な河の中へ、すさまじい音響いななと嘶いななきがとびこんでいた。水けむりが、橋のらんかんまで濡らした。川口の税関派出所のガラス戸が開いて、眠たげな監視の帽子が、びっくりし



て河の中をのぞき廻している頃——彼等の愚連隊は——水底に半ぶん沈没した馬車のすがたを、向う河岸にいて、ながめていた。

ひとり、ピンヘットを出した。ひとりがマッチを点けた。

マッチとピンヘットが、順々に、みんなの手へ渡った。——のどかな紫煙しえんが、トム公の鼻の穴からまで出た。

### 吊つり洋燈

夜あかしの好きな南京街の窓は、まだ所々に、紅燈を残している。康有為こうゆういの建てた大同学校に於てする清樂しんがくの哀歌がほそぼそとカーテンから洩れている。つい四、五年前の日清戦争の亡国

的記憶を忘れ果てるように、清国の学生たちは、毎晩、学堂で夜を明かしていた。

愚連隊の影が、その窓の下を、ぞろぞろと一列になつて通つた。順和商行と関羽かんうの廟びようのあいだを曲つて、いくつもの、ほそい露地をたどると、さつき、宵に、トム公の訪れた、阿片クラブの地下室へ出る。

銀絡ぎんらくの大きな吊洋燈つりランプをつるしてある地下室では、今夜は、

もう例の金貨から砂金を採る仕事をしてはいなかつた。——小指の爪をおそろしく長くのばしてある主あるじの李鴻章りこうしようは、赤い房のついている水煙管みずぎせるをくわえながら、花梨卓かりんたくへ肱ひじをついて、女の顔の白さに、眼をほそめてた。

女は、お光さんだった。北方のむらさき組のお光さんだった。

彼女は、横浜ハンケチ女の中での孔雀くじゃくだった。月々、この李鴻章から多大な小費こづかい金をもらっているというのは、うそである  
と、トム公はいつも人にも言う。事実、彼女が、稀 《たまたま》  
ここへ来るのは、阿片を求めに来るのと、男女の不良隊と密談の  
必要がある場合を出ないようである。

「あら、帰って来たよ」

お光さんは立った。

その晩の彼女は、とろけるようなヒスイの耳環を下げていた。

そして、彼女は広東カントン仕立のスマートな服がよく似合った。色の

白い、やや丸こい顔と、天啓てんけい陶磁とうじのような薄手な姿態にも。

多勢の、あしおと 跫音が聞こえると、李鴻章は、ものうい顔をして、水煙管を、卓の上へ捨てて、腰へ手をあてがいながら、室内をあ  
るきだした。

お光は、もう、はしやぎ立って、多勢の男たちの中から、トム  
公を拾い出して、しゃべっていた。

「なぜゆうべ、私が行くまで、薬師様に行っていなかったの」  
「待っていたよ」

トム公は、口を尖らした。すこし、不平のように。

その顔を、お光の白い指が、痛いほど強く突いて、からかい気  
味に、

「うそ、一時にはもう、いなかっただじやないか」

「ああ、十二時には帰ったから」

「それごらん、だからあたしや、心配しちやツて、あれから、どれほどヤキモキしたか知れないよ。——だがね、おまえに頼まれたことは、探っているから、安心おし」

「亀田さんは」

「検事局からすぐに根岸の未決監<sup>みけつかん</sup>へ送られているのさ。それはまあ、これからの工夫として——私が心配しちまツたのは、おまえの方さ」

「それで、みんなが来てくれたのか」

「山手警察にいる女小使いのおしげさんに、人をやって、聞いてみると、案の定だから、あわてて、みんなを糾<sup>きゆうごう</sup>合したツてわ

けき。トム公、おまえ、いくら齒ぎしりしたって、そんなどじじや仕返しはできやしないよ」

「おれたちは、まだ詳しいことを聞かないんだが、いつたいトムの復讐ふくしゅうっていうなあどういいう真相なんだね」

愚連隊たちは、それぞれ、椅子や寝台や家具の端に、腰をすえて、濛々もうもうと、ピンヘットの煙を立ちこめた。

「トム、お話し」

「めんどくせえや」

「じゃ、私が、代りに話そうか。こういうわけさ——それも宵に薬師の縁日で、トムから聞いたばかりなんだけれど」

お光は流暢りゅうちやうなことばで、トムの代弁者となつて、金満家の

高瀬理平と夫人お槇の不都合な点を熱をもって語りだした。トムが、彼らから、恩を仇あだで酬むくわれたことについて、彼女は、トムと同じ悲憤をおびて話した。

「イヤ、そんなことは、どツちでもいいんだよ」

トム公は、彼女のことばを遮さえぎって、小さな拳を、卓のうえに、突ツ張った。

「自分の遺恨いこんは、自分でかえすよ。おれがいちばん堪たまらないのは、自分のことじゃない、亀田さんのことさ。おいらが、馴れない人を、むりに仕事に連れて行って、その日に、あいつらのために、窃盗せつとうの冤罪むじつをきてしまった、亀田さんのことだけが、すまないんだ！ 悲しいんだ」

みんなトムの顔をじつと見つめた。すごい眉間をしている者があつた。もうありありと胸で怒っている顔があつた。

「——その人には、五人の家族がある。イロハ長屋で、満足に食える家はないけれど、亀田さんの家は、いちばんうちひどい。まだ、残飯の味を知らない官員さんのおちぶれで、おまけに、子供も病氣、おかみさんも、働けない体だから……」

「わかつた」

神学校の制服が言った。

「要するに、トムの責任感を果してやりさえすればいいんだらう」  
「ウム」

「同時に、横浜愚連隊は、

しゅうわい  
醜穢

なる石炭成金高瀬理平の家族



に、精神的、或いは物質的に、社会的制裁を思い知らしてやることを、ここで、宣言しようじゃないか」

「異議なし」

「賛成」

「手段は」

「えらばんよ、硬軟両策で行こうじゃないか。まず美男子のおれは、あそこの娘の奈都子というのへ、魔手をかけて、墮落させてやる」

「そんな方ばかり目企もくろんでいないで、トムの悩みを第一義に考えなくツちやあ」

「亀田を救うことかい」

「むろんさ」

「だれか名案はないかしら」

お光が、火照ほてツた耳を抑えながら言った。

「——ある！ それは船渠ドックのモンキー騒ぎの時にオペラバッグから金剛石ダイヤモンドの指環をちよろまかした小走すばしツこい、ほんとの盗ぬすツ人を探すことさ」

「なるほど」

その時ぼんやりと室内を漫歩していた李鴻章の足の前で、けたたましい非常ベルが鳴った。——今までの光景は、すべて、一場の煙草の魔術であつたように、一瞬に、その人影が消えて煙ばかりが吊洋燈つりランプのホヤに濛々とまきついている所へ、ひとりの靴

音が、あわただしく、地下階段を駈け下りて来た。

かわざら  
河 浚 い

—— 追い立てられるように非常鈴ベルは鳴ったけれど、李鴻章だけは、水煙管を啜くわえたまま、吃驚びっくりした表情もあらわさなかつた。尤ももっと、甚だしく大陸的な空漠をそなえている彼の顔に、ちツとやそツとの驚きかすが掠めても、他人には分からないのだろうけれど。ごむまりの弾はすんで来るような南京靴の登音が、地下階段を駈け降りてくるとすぐに、

「大人たいじん、おる？」

と、緞子どんすのカーテンを割って、出っ歯の清国人がひとり、はい  
つて来た。

同じ清国人でも、それは、非常にするどい眼をもち、苦力クーリーみ  
たいに穢きたなくて、弁髪べんぱつをグルグルと頭に巻きつけていた。ふたり  
の間には、同時に、おそろしく早口な、広東カントンごろつきのアクセ  
ントで、喧嘩じやないかと思うような会話がはじまった。

「張じやねえか、なんだツて、非常ベルなんぞを鳴らすんだ、ば  
か野郎め」

「今ネ、親方、あつしが、急用があつて、ここへ来ると、水上警  
察のお巡りが、いやにうるついているんでさ」

「どこに？」

「この南京街ナンキンまち界限かいわいに」

「それや、何も、おれたちの阿片窟あへんくつをかぎあるいているわけじやねえだろう。お巡りを見るたんびに、驚いていたひには、居留地に住んじやいらねえぜ」

「そんな手緩てぬるいんじやありませんや。二十一番館の四ツ辻と、前田橋通りじや、非常線を張っているんで。——おまけに、あつしの後からも、私服らしいのが尾つけて来たようですから、そいつを撒まいて、一巡りして戻つて来ると、またこの入口をのぞいている奴がある。で、あつしも、こいつアてつきり、今朝の一件から、巢が割れたなと思つたんで、隣家のベルを押したんです」

「そりや、トム公をさがしているお巡りだろう。——だが今朝の

一件というなあ、なんだ」

「まだ聞きませんか、明け方の騒ぎを。谷戸橋やとばしの袂は、たいへんな人ばかりですぜ」

「オヤ、もう夜が明けているのか」

「とつくですよ」

この地下室では、朝の微光も感じられなかった。

「谷戸橋で何を騒いでいるんだ」

「警察署の監獄馬車が河の中へ墮おちて、馬車の土左衛門ができたツていう騒ぎでさ。——何だろうと思って、見物に行つてみると、その馬車は、引ツ張りあげてあるけれど、後の騒ぎが大変です」

「フーム、どの辺だい、それは？」

と動じない李鴻章の顔も、だいぶあやしくなりだした。不安そうに水煙管をおいて、卓の上に、りようひじ両肱をのせた。

「築港の方から、舟で来るとすると、海口の税関の見張所と、谷戸橋のあいだ辺りの見当ですがね」

「……………」

「親方にも、覚えがあるでしょう」

「ある」

「そこへ、ゆうべ、馬車が墮ちたんでさ。……で、人夫や船頭を連れて来て、そのやつかいな土左衛門を引き揚げにかかると、誰が最初に見つけたのか、河底の泥土ン中から、金時計を拾ったやつがあるというわけなんで」

「ふ……」

「すると、おれも拾った、おれも見つけたと、たちまち、馬車の方はそツち退け<sup>の</sup>になつちまつて、この河には金時計がウンと沈んでいるというんで、まるで喧嘩腰で、河ざらいみたいな騒ぎがもち上がつたんでさ」

「ふ……」

李鴻章の顔は、だんだん、泣き出しそうに、曇つてしまった。

「そのうちに、通りがかりの沖人夫だの、石炭かつぎだの、あの辺のコックや御用聞きまで、みんな、河の中へはいつて、宝さがしを始めちまつたもんでさ。——だから、今朝の人ツたらありませんや、新聞記者までやツて来るといふ騒ぎでね」



「それを、知らせに來たのか」

「へえ、何しろ、河の底を足でさぐると、いくらでも、金時計が出て來るが、大体、これは、誰が落したものかということが、今朝のうちにはぱつと、横浜中の大評判でしょう。——それが分りや、すぐに此窟ここへ火がつかますからね」

「なあに、そんな心配はねえ」

と、彼は意志強そうに、かぶりを振つたが、そのことばの下からすぐに——「心配はねえけれど、だが、たいへんな損害だ。あの河の金時計をみんな拾われてしまったひにや、おれたちが、日本かで稼かせぎ込んだ儲もうけを、みんな注ついでも足らねえからな」

と、肺臟ちんの沈澱物でんぶつでも吐くように、鼻腔びこうから重くるしいため

息をついて、椅子の角へ、がつくりと首をのせた。

鶉う

むろん午前ではあるけれど十一時半ごろだった。——あれからトム公が眼をさましたのは。

幾つもある阿片あへん寢床ベッドには、もうゆうべの愚連隊たちはひとりも見えなかった。ただ、トム公と背なかをくつつけて、お光が、絹糸の束のように、からだを縫よ捻じツたまま、ふかい寢息をかいて寝ていた。

トム公は、眼がさめると共に、今、殻からから生れた小鳥のように、

からだも気もちも爽快だった。この倶楽部クラブで、面白はんぶんぶんに教えられた阿片のころよさを幾日ぶりかで満喫したあとの利き目が、てきめんに分ったように――

「おはよう。李鴻章」

歩廊へとび出すと、彼はすぐに、隣室のカーテンを刎はねた。

「おはよう」

返辞はしたけれど、それは、張という手下だった。

トム公は、すっかりゲツソリしている張の顔を、どうして人間けだるがそんなに気けだる懶だるくなれるかというように、きよろつと、見つめて、

「大将は、どうしたい？」

「谷戸橋」

「谷戸橋へ行つたのか」

「ウン」

「何しに？」

この清国人は、広<sup>カントン</sup>東語のベランメーのほかには、日本語はからだめだった。トム公は、あきらめた。

「谷戸橋へ、何しに行つたんだらう？」

歩廊から地上の昼の光を見あげていると、お光が、眼をさまして来て、

「お腹<sup>なか</sup>が減<sup>へ</sup>つたよ」

と、うしろから欠<sup>あく</sup>伸<sup>び</sup>笑<sup>わら</sup>いを浴びせた。

トム公は、音の物にひびくように、

「まったくだ」

「万珍へ行こう」

「アメリカ屋がいいぜ。あそこのテキは、こんなに厚いぜ」

指であつさを示してみせると、その手を、彼女の金剛石ダイヤが打つた。

「なまいきを、お言いでない」

「うそさ、何でもいいや」

「アメリカ屋のお昼を奢おごってやろうか」

「朝飯だろう」

「トム、顔を洗うといいよ」

と、彼女は、七宝側の時計をのぞいて、ぼたん釦の下へかくしながら、

「もうすぐに、午砲ドンじゃないか。そんな寝呆ねぼけた頭で外へ出ると、すぐに、御用になるよ」

ふたりは、口笛をあわせながら地下室を出た。南京街ナンキンまちのせまい路地にまで漲みなぎっている太陽の光を見ると、トム公の矮わいし小しょうなからだに、争闘的な血が、むくむくと温度をもった。

「さ。きようから、戦いだぞ」

トム公は、ズボン吊つりをしめ上げて、両手をもつて、青空を突いた。

「しっかりおやり」

「やるとも」

「軍用金はあるのかい？」

「軍用金なんか、一銭もねえや」

「そのあいだ、おつ母さんを、どうするの」

「どうかするだろう」

「心ぼそいネ。……やろうか、一円ばかり」

欲しそうに、考えているまに、西洋料理のアメリカ屋の前まで来てしまった。

温いミルク、パン、彼の渴望してやまなかつた大きなビフテキ。トム公は、口もきかずに食べてしまった。

そばの卓テーブルに、四、五人の商館番頭らしい背広服のひと一かたまりが、フオークの忙せわしない間に、さかんに、谷戸橋の河から金時計が出るといううわさをしていた。

「うそだろう、河の底から、そんなに無数の金時計が出るなんて、どう考えても、お伽ときばなし 噺じゃないか」

「うそだと思うなら、行つて見たまえ」

その人々の話はむきだった。

ここばかりでなく、お光とトム公は、路上でも、そんな熱病のようなうわさを、幾たびも耳にした。

「たいへんだよ、いくらでも人が出て来るんだ。あの谷戸橋を中心に」

「ほんとかなあ」

「慾ツて、ひどいもんだなあ」

「実際に、河の底から、そんな金時計が出るなら、僕らだって、



勤めを休んで、一日ぐらい真つ黒になつてもいいがな」

コツク部屋から、ビヤ樽のような腹をつき出して、ここの主人が言った。

「だめですよ、もう……。巡査が来て、すっかり、縄を張つて、しまいましたから」

「じゃ、まったく、出たのかあ？」

「なんでも、九時頃までに、われがちに河へはいつて、あの穢きたない底をかき廻した者が、みんなで四十個とか七十個とか、金時計をさがし出したつて言いますぜ」

「うまくやりやあがツたな」

「ところが、はやく、一つでも、見つけて、逃げたやつアいいで

しようが、慾の皮の突つ張り放題に、いつまで、ちまなこ血眼でいた連中は、そのうちに、警察署から来て、みんな、しろもの代物を吐き出された上にふん捕まってしまったそうです」

「ははは、そいつアよかった。さんざん、金時計をう鵜に吞ませておいて、ひとあみ一網に、吐き出させるなんて、警察も抜け目がない」  
「しかし、いったいそんな高価な金属品を、どうして、あんな河の中へ捨てたのだろう。まさか、金持の道楽じやあるまいがね」

「それが、疑問なんですよ」

お光が、卓へ勘定をならべたので、トム公は、満腹のバンドをゆるめながら、外へ出た。

そして、お光を待っていると、彼女は、紙入れからべつにして

来たらしい一円紙幣を、トム公の手ににぎらせて、

「あばよ」

と、元の道へ戻りかけた。

「お光さん、どこへ？」

「心配だから、もういちど、倶楽部へ帰ってみようと思うのさ」

「心配つて、何が」

お光は、往來を見まわしながら、トム公のそばへ寄つてささやいた。

「ことによると、李鴻章りこうしょうが、首を縊くくるかも知れない」

「？ ……」

トム公には、分らなかつた。

「どうして？」

「今、話していたろう、河から金時計が湧くつていう話。……あれはネ李鴻章が、この夏、密輸入をして一儲けひともうしようとして失策くじつたしろものなんだよ」

「へエ」

「おまえだつて、聞いてるだろう」

「話は聞いているけれど、どうして河の中へなんぞ、捨てちまつたんだろう」

「誰も捨てる気じゃないけれど、宝石や時計を密輸入する時は、はしけ舢舨の底に穴をあけておいてそこから水のはいらないうようにゴムの袋を、舟底へぶら下げておくんだよ。税関の監視や、水上署に

捕まって、いくら舟を調べられたって、しろ物が、舟底から、水の中に沈みこんでいるのだから、分りやしないやネ。それを、いい気になって、何度もやっているうちに、谷戸橋の辺は、河が浅いから、そのゴム袋を、何かに引ツかけて、破ってしまったのさ。おまけに、運わるくあの向う河岸には、税関の見張所があるから、きようまで、引揚げることができないでいたんだよ。——けれど、まさかそこへ、監獄馬車がとびこんで、それから、見つからうとは思わないから、悠ゆうちよう長ちやうに構えこんでいたものサ」

——聞いているうちにも、しじゅう動いているトム公のすばやい眼が、居留地を巡回する警官のすがたを四ツ辻に見つけて、

「いけねえ、木刀が来たよ」

お光は、ちよつと振り顧かえつたけれど、まだ落着いて、

「李鴻章に、首でも縊くられると、わたしだつて、お小費こづかいに困るからね」

そう言つて、さつさと、曲がつて行つた。

トム公は、すぐに、彼方の煉瓦の建物へ貼りついて、巡査の行動をながめていた。やがて、彼の影も、日向ひなたが消えるように、いつのまにかそこにいなくなつた。

雛妓おしやく

本牧ほんもくの三さんの溪たにに、遠くからでも見える十九世紀型の西洋館と、

破風はふづくりの、和洋折衷せつちゆうの、その頃ではめずらしい、また、豪奢ごうしゃなども驚かれていた、別荘があつた。

西洋館の方の塔みたいな屋根の尖さきに、赤い風車が乗っているの  
で、トマト畠はたけにいる百姓でも、それが北仲通りの輸出入商、セキ  
タン屋の高瀬の別荘だということを知らないものはない。

秋の晴朗な畠道を、きょうも、幾台となく、馬車や俵くろまが、そこ  
を向けて通つた。

「お大尽だいじんが通る」

「関内芸妓げいしやが通る」

と百姓たちは、幾度も、腰を立てた。

別荘の庭園の前にも、漁師の子だの、碧あおい眼の赤ン坊あかぼうを連れた

雑用婦だの、ピクニツクに出かけた外人の家族づれなどが、俵から下りては、邸内に吸われてゆく華やかな座敷着の女や、雛妓おしやくたちを、ものめずらしそうに、見物している。

そのうちに、黒の山高帽をかぶった跛行の紳士が、馬車から下りた。この跛行の紳士がその日の正賓せいひんであるとみえて、玄関のまえには、主人の高瀬理平や、夫人お楨マダム まきや、令嬢の奈都子なつこや、すべてのものが、ものものしく立ちならんで、出迎えた。

ガラスド硝子戸硝子戸いッぱいに、海の色である洋館の応接は、さながら貴賓室ともいうべき、すべてが重厚な色と匂いをもって装飾されていた。七、八年前に、外務省の玄関で、一壮漢のために右足を失った大隈重信は、そろそろと彼にか侍しづく人々の先に立って、海を前に、



ふかいソファの中に腰をうずめた。

「いいのう、横浜も、波止場や船渠ドックの音が聞こえる所ではたまらんが、山手町をこえて、ここまで来ると大いに景観がちがつてくる」

彼の顧みた所に、千歳ちとせの女将おかみが、笑っていた。

「御前様、それはお皮肉ですか。何しろてまえどもなどでは、眺めといえは、波止場のマストかかんかん虫の人通りだけでございませうからね」

「わはっははは、おまえの家うちを、けなしとるわけじゃないんであるよ。ここの眺望ほを賞めたまでじゃ」

「お越しにあずかりました上に、お賞めをうけて、恐縮にござり

ます」

と、理平が、わきの椅子から、しきりと頭を下げていたが、大隈伯には、眼にはいつていないようだった。

「女将」

「ハイ」

「おまえ今、かんかん虫ということをやったが、そのかんかん虫で思い出したことがある。なあ渡辺」

と、うしろの執事らしい男へ言った。

「は、いつぞや、船渠会社ドックのまえをお通りになった晩でございましてな」

「そうそう、あれは小ちツこいかんかん虫じゃった。何と思ったか、

わしの馬車に飛びついて来たのである。あんなのが、横浜名物とすると、女などは、夜歩きはできんぞ」

「御前様、それは、波止場乞食ではございませんか。よく馬車へとびついて、お金をねだる——」

「いろいろなものがあるんじやの、横浜には」

伊勢佐木警察署長の保科勝衛ほしなかつえが、壁に向つて、油絵の額をながめていた眼をうつして、ことばを挟んだ。

「渡辺さん、その晩のかんかん虫らしい小僧というのは、どんな服装をしておりますたな」

「夜なので、よく分らんが、十四、五ぐらいな奴じや。木靴というか、ズックで木の底の靴を、ぱかぱかとならして、逃げおつた

が、おそろしく、素早い」

「ははあ、それや、トム公という小僧であつたかも知れませんか」  
「トム公？」

伯は、トム公という名と、あの晩の——右脚爆失以来である路上の襲撃者であつた矮わいたん短たんなかんかん虫に、すくなからず興味をもつた様子である。

そこへ、座敷くばりを視みに行つた千歳ちとせの女将おかみが、

「御前様、では、お支度ができましたから、どうぞあちらのお広間の方へ」

と、扉ドアをひらいた。

華やかなイギリス絨じゅうたん毯たんをふんで、伯を中心にかこむ人々が

ゆるやかに日本間の方へながれてゆくと、その後から尾ついてゆく、一組の雛おしやく妓たちが、馴れて怖さを失った隠し笑いを、クツクツと、袂につつんで言った。

「かんかん虫つてなアに？」

「清ちゃんのお父さん、かんかん虫じゃないの」

「あらひどいわ」

「トム公つて、おもしろい名だわね」

「ごまかしても、だめだわ、覚えてらツしやい」

「あら、痛いッ、女将さん、清ちゃんがいじめるわ」

女将は、学校の先生のように、雛妓たちの中にたつて、めツと、睨んでみせた。

それを、雛妓たちは、よけいにおかしがつて、いっぺんに、声を出して笑った。——けれどその中に、たつたひとり、笑いもしないで、泣きそうにしている妓こがあつた。いちばん美しい雛妓だつた。

## 伯の旧事

伯を正せい賓ひんとしての、その日の高瀬家の招待は、いろんな趣向を尽して、午後から夕刻までつづいた。

豪ごう奢しゃな町人趣味の饗宴は、ようやく、伯をして、少々けん倦怠たいを催させて来たし、たえず、その顔いろを見ている高瀬理平にも

わかった。

「いかがでしょう、だいぶ席が濁りましたから、ひとつあちらの茶室で、姪の不手前なお薄茶うすを差しあげたいと存じますが」

七時に、神奈川県下の政党人たちの懇話会にのぞむが——それまでにはまだ少し時間がある。

大隈伯は、チョツキの時計をのぞいて、

「よかろう」

と、言った。

離亭はなれの茶席へ誘ったところで、理平は、伯のふところにはいつて、商法にかかるつもりだった。が、その胸算を切り出さないままに、伯は奈都子のたてた薄茶をひと口のんで、

「高瀬、すこし、女将に話があるんじゃないが、みんなあツちへやつてくれんか。む、君も……」

そして、千歳の女将だけを、そこに止めた。

「あら、みんなお人払いをして、何でございますの御前様」

「おむら、もそツと、前へよれ」

「こうでございますか」

と、おむらは笑いながら膝をすすめて、

「いやに改まって、変じゃございせんか」

「女というものは、どうして、そうすぐ気を廻すんじゃないろう」

「あら、そんな意味じゃございせんわ。御前様こそ、私の申しあげたヘンをヘンにお取りになつていらつしやるくせに」



「冗談は措おこう、時間がない」

「どうしても、こん夜の終列車でお帰りでございますか」

「ム。そこで、お前に頼み残して行きたいことがあるんだが、無論、きいてくれるだろうと思う。——ほかじゃないが、極めて内輪の話だ。秘密を守ってもらわなければ困る」

「なんなりと、私で、できますことならば」

「わしが民部省に勤めていた頃、もう二十年も前だから、権書ごんしよ記きじゃ。その頃、紀尾井町きおいちようの隣家にいた縁故で、千坂家ちさかの末娘を、ある県判事の家内に、世話をしたことがある、桐代きりよというてな、たいへん美人であつた」

おむらは、まじめに聞いていた。

一 婦人

「——千坂 男だんしやく 爵やくは、上杉家の支藩で、血統も正しい、両親も厳格であるし、兄弟たちも、それぞれ立派に社会に出ている。その末娘じゃから無論教養も十分、性格もまちがいないものと信じて、世話をしたのが誤りだった。媒人なこうどが若い」

「先様と合わなかつたのでございますか」

「なに、その娘の性格が、先天的みだに淫みだらにできていたんじや。嫁とらぐとすぐ、良人おつとの赴任ふにん先で、書生と密通するとういうように」

「まあ」

「すぐ破談になった。それで、わしとの手は一時切れていたが、それからも嫁ぐ先で、幾たびも姦通騒ぎを起した。千坂も弱り果てて、しまいには、邸にひきとつて、監視をつけておいた、その監視に媚色びしよくを送つて、座敷牢をやぶつて逃げてしまうという女じゃ、女にしては、めずらしい」

「上流のおひい様にも、そんなお方があるんでしようか」

「あるな、その程度ならいくらもある。——だが千坂の娘は、そんなことでは納まりおきがつかん。それから、男へ渡りあるいて、しまいには衣食にも窮してしまつた。むろん、生家の方は、親族会議の結果、絶縁になつとる」

「困つたお姫さまですことね」

「墮落すると、女でも、底なく落ちてゆくものとみえる。そのあげく、こんどは、わしの名を騙り歩いて、大胆な詐欺をして廻った。大隈の親戚、千坂の娘というので、慾につられた被害者が、ぞくぞくと、警察へ届けてくる。初婚の時から、約十年間、わしも迷惑をしたが、千坂家の親類はみなどれほどの不名誉に泣いたかわからぬ」

おむらも、そこまで聞くと、古い新聞記事で読んだ、女天一坊だの、華族の女詐欺師だのという、あくどいみだしを記憶の中に拾うことができた。

だが、それもずいぶん古い巷の世間話だのに、今ごろになって、伯は、何を自分に頼むというのだろうか。

「その……何と仰おつしやいましたツけ、桐代さんでしたか、千坂様のお嬢様は」

「ム、桐代」

「その後、どうなさいましたか」

「とうとう、しまいには、横浜の時計屋を詐欺して逃げたり、旅役者といっしょに、悪いことをして歩いたりしたあげく、水戸警察署に捕まって、検事局に廻され、重禁固二年かの処刑をうけたが、その時、妊娠みおもであつたので、執行猶予しつこうゆうよをされたことだけは聞いたが……以来杳ようとして消息も聞かずに来たんじや。ところが……」

ここからが、本題であつた。おむらは、伯のたのみをうける心

じたくをしてきた。

「近ごろ、また、その話が再燃してきた。というのは、千坂の当主が、老病で今東京のある病院に入院中だ。親には煩悩ほんのうがある、それほど、墮落した娘でも、どうかして死ぬまえに一度会いたいと言う。——で、いろいろ消息をたずねると、桐代は、刑の執行中に、ひとりの女子を生み、その前にも、男の子があつて、ふたりの子をかかえながら、しばらく神戸の方で、ある通弁ガイドと夫婦になつていたが、その良人とも死にわかれて、今では、横浜に来ているという話なのだが……」

「ずいぶん古い話なので、分りません、今おいくつ位になるんですか」

「左様……」と、伯は、指をくりながら、

「四十ぢかい」

「じゃ、子供も、相当な年にはなっていますね」

「いくら放ほうじゆう縦じゆうな女でも、さだめし、悔くいているだろうと思う。

何といつても血筋だから、本人の居所が知れるものならば、その子供たちも、どうかしてやりたいと言っておるんじや」

「私にいいつけのご用は、その桐代さんの家族を、たずね当ててくれと仰おんがつしやるんでございますね」

「どうじやろう、分るまいか」

「たしかに横浜においでになるなら、きっと探してみますけれど」

「あまり名誉なことじゃないし、新聞にでもでると、折角、昔の

生涯をすてている本人が、また新しく社会から鞭を打たれる……。で、これや、おまえが適任じゃと考えて依頼するんじゃ」

「よろしゅうございます」

「女傑じよけつと定評のある千歳の女将が、うんと言ってくれたので、わしもこれで安心した」

「御前様は、おだてるのが、お上手じょうずでいらつしやいます」

「分つたら、すぐ知らせてくれい」

「どういたしましょう、それだけのご用で、御前様がおいでになるわけには参りませんし」

「おまえが、東京へ伴つれて来てくれぬか。——わしの邸へ直接に」  
「その方が、かえって、世間にわからないだらうと存じます」



「すべて、女将の才覚にまかそう。——ちようど時間がきたな、懇話会へ行かなければならん。馬車を命いつてくれ」

高瀬理平は、折角の貴賓を、意味なく、うやうやしく、送り出さねばならなかった。

## 豆菊

「みんな！ 何を買って上げようネ」

本牧から横浜の市街へ向って走る馬車の中で、女将は、はしやいでいた。

七人の雛おしやく妓ばかりが、二台の馬車につまっていた。馬車がゆ

れるたびに、雛妓たちはキヤツキヤと笑い転こけた。

「たくさんご祝儀をいただいて来たんだからネ、何でもおねだり、何でも」

小猫のような眼は、急に羞はにか恥かんでしまった。

「欲しくないの」

「ほしいわ」

ひとりが手をあげた。

「なあに？ 軍艦？ おもちやの」

「いやあよ、そんなもの」

「犬屋にいるお猿さん」

「いや！ いや！」

「洋服」

「え。え」

「青い、職工服」

「ひどいわ」

「痛い、この子は」

「だって、あんまりだわ、私たち、かんかん虫じゃなくツてよ」

「そう、じゃ何？」

「——わたし、かんざし簪」

「——わたし、ししゅう刺繍のはんえり半襟がほしいわ」

「わたし、柳屋で見た、がまぐち墓口」

「お金もないくせに」

「いいのよう」

「ホホホ。みんなお安値やすいものばかりだね。——豆さん、おまえは」

七人組のなかで、一番小さい、一番おとなしい、一番かしこそうな豆菊は、さつきから馬車の隅に押しつけられて、淋しげに、笑っていた。

「豆さんは」

「わたし……」

と、やっぱり笑っている。

女将は、この子の、ふだんからそうであるが——何かしら淋しげなのを、浮かせるように、

「もっと、すばらしい物をお考えよ。なあに？」

と、顔をのぞいた。

豆菊は、笹色ささいろに光る口臙脂くちべにから、その紅さを、顔じゆうにちらして、

「……ないわ、わたし」

と、蚊のなくように。

「ないの」

「え」

「あら。あるツて言ったわ、昨日。うそよ、女将さん」

と、白粉おしろいの下おしろいにきびのある雛妓おしやくが告げた。

「——きのう、豆菊さんが、わたしに言っていたわ、欲しい、欲

しいって」

「そう、何」

「お金」

「え、お金」

「うそ！」

と、豆菊は、泣き出しそうになつて、顔をかくした。

馬車が止まつた。

雛妓たちはわれがちに降りた。活いき活いきとかがやく盛り場の無  
 数な灯が小さな胸を嵐らんそう奏する。街光と騒音をあびながら、女将  
 は、人浪に押されながら、らんちゆうのように泳ぎたがる彼女た  
 ちを、

「迷子になつても知らないよ。ひとりで歩くと、異人が手をにぎるよ」

と、叱りながらすすんだ。

勸工場かんこうばへはいつて、勸工場から吐き出されて来た時には、各

《めいめい》が、小さな小箱を一つずつ胸にかかえていた。豆菊も持っていた。しかし、小さな淋しい顔は、明るい灯をあびるほど沈んでいた。

相生座あいおいざには、川上音二郎の壮士芝居がかかっていた。アセチ

リン瓦斯ガスの白い光の中に、血みどろな絵看板と、幟のぼりが、ばたばたとはためいている。

その入口のわずかな空地に、新舶来英国聴音機御一名二銭と札

を立てている男が、空箱に、赤毛布をかぶせ、その上に一箇の機械をのせて十数本の象牙ぞうげの乳首のついているゴム管を、その機械から群衆の耳に貸していた。

「蓄音機だよ」

と、女将が教えた。

女将が、銀貨を払ったので、雛妓たちは、空いているゴム管を見つけて、象牙の乳首を耳にはさんだ。

「あら、浪花なにわぶし節が聞こえる」

とふしぎな世界をのぞくように、彼女たちは、眼をまるくした。そこでも、豆菊は、気おくれがしたように、その小さなからだを、うしろの方に隠していた。



と、誰か、彼女の背なかを、指で突いたものがあつた。

「? ……」

豆菊は、ちらと、後ろをみたけれど、知らない顔をしていた。また、人の間から、指が出て、同じところをついた。

豆菊は、かぶりを振つた。

また、指が出た。

また、かぶりを振つた。

「——ちえつ、いやなやつ！」

投げるように言つて、アセチリン瓦斯の人群れから、相生座あいおいざの横の方へ、抜け出して行つたものがあつた。

「ちえつ、いやなやつ！」

トム公は、暗い空地から振りかえつて、もういちど呟いた。

## 童貞洗礼

空地の向うには、射的場、釣堀屋、ミルクホール、白粉地獄おしろいといつていい家の灯がならんでいた。

コールタアで塗った相生座あいおいざの高い二階窓から、壮士役者が白い首を出して、射的場の女と、手で信号をしていた。

「オホホホ、オホホ」

「アハハ、アハハ」

紙くずだらけな空地の闇を、トム公が不きげんな顔をして歩い

ていると、忍び足に、後から尾いて来た大勢の影が、誰かがクスリと吹き出したのを機ツかけに、いちどに笑い出した。

「誰だい」

トム公はふり顧つて、

「何を笑やあがるんだ」

「プリンス」

隠れていた人影は、いちどに集まって、彼をかこんだ、  
臙脂えんじぐ組みのハンケチ女の群だった。

「プリンス、おまえは色気があるんだね、吃驚びっくりしちやったわ」

「どうして、隅におけるもんかね」

「いいよ、いいよ。色気があるなら、私たちにも、覚悟があるか

らね」

「あ、勘弁できないわ」

「清純なユダ、公園へおいで」

「童貞の洗礼をしてあげる」

と、大勢して、手を引ツぱった。

トム公は、驚きはしないけれど、何のことだか、彼女たちが擲<sup>や</sup>揄<sup>ゆ</sup>する意味がわからなかった。

「何さ、うるさいな」

「わたし達は、うるさいの」

ひとり、トム公のからだを抓<sup>つか</sup>った。

「——そして、雛<sup>おしやく</sup>妓<sup>やく</sup>さんなら、うるさくないのだろう」

「なにツてやがんでい」

トム公は、赤くなつた。

「悪いことはできないねえ、みんなして、見ていたんだから」

「あれは、おれの妹だもの」

「うそ、おつき」

ひとりが、帽子を攫さらつて、空へ投げあげた。またひとりが拾つて投げ上げた。三度めに、トムはそれを引ツたくつて、

「ほんとだ！ 聞いてみろ」

「だって、おまえとは、似ていないよ」

トム公、悲しい顔をした。

「なんといつても、現行犯だから、もう言い遁のがれの余地なし」

「そうよ、こん夜はもう、いくらプリンスが逃げようとしても、私たちで、暗いところへ連れて行って、童貞の洗礼をしてあげるよ。ね、みんな」

トム公は、女たちの淫みだらな眼め交まぜを見まわして、

「童貞つて、なんだい」

「だから、教えてあげるのよ」

「教えてくれよ、ここで」

「ここじゃ、教えられないわ」

「口でさ」

「口じゃ教えられないもの」

女たちの淫びえきらな眼は、それを想像するだけでも媚ぶん液びつを分泌し

て、熟<sup>う</sup>れた果物がおかれてあるように、トム公を眺め合つた。

彼にも、何かしら分つた。と共に、トム公は初めて阿片パイプを口に押しこまれた時のような陶<sup>とうすい</sup>酔と戦<sup>せんりつ</sup>慄に衝<sup>つ</sup>かれて動悸<sup>どうき</sup>をうつた。

「あつちへ行け！」

「おおこわい、どうしたの」

「おいらは、今夜ここで、みんなと会う約束がしてあるんだから」

「あ……愚連隊。そう、何時に」

「十一時」

「じゃ、それまで、兵隊山へ来ない。でなければ、高島町の倉庫

の裏」

トム公は、ポケットへ手をつこんで、五、六十錢ほどの、銅貨と銀貨をつかんだ。その中から白いのだけを拾って、つき出した。

「あら、授業料は、いらないわ」

「こつちから上げるわよ」

と、女たちは、接吻の雨を彼に投げた。

「この間の借りだよ」

トム公は、ひとりの女にそれを渡すと、逃げるように駈けだし、元の雑沓ざつとうの中へ、小魚のように、泳ぎこんでしまった。

蓄音機屋のまえの綺麗な一団も、もうそこにはいなかった。



## 南京豆の会

時計屋の時計塔が、夜の空に、十一時の指針をきっかり示している頃、その大きな時計問屋の地下室では、広<sup>カントン</sup>東服のお光さんが欠<sup>あくび</sup>伸<sup>みせ</sup>をしていた。

店頭<sup>みせ</sup>の方で前後して鳴る無数の時計の振子がてんやわんやに聞こえてくる。

お光さんは、実は、ここ<sup>めかけ</sup>の少し変態なといわれている老主人の妾である。居留地の清国人と連絡をとって、時計の密輸入で資産の大をなしたという隠居である。で、そんな関係から、妾のお光さんは、南京街の李<sup>りこうしょう</sup>鴻章の地下室も愚連隊の巢にしてしまい、

此店の地底倉庫も、みんなとの会合場所に利用する特権をもっている。

やがて、彼女の待つ足音が断続して訪れた。男のくせに、いつも薄化粧をしているバプテスト神学生の三浦、紺がすりの羽織紐を首のうしろへ引つ掛けていている今村、西洋乞食の檜井かしい、新聞配達まの西村といった順に、ぼつぼつ不良色が濃くなって、そのうちにトム公も交じっていた。

南京豆の三角な袋が、事務卓の上に、十ばかり腹を裂いている。その殻をわる音が錯雑さくざつとはじまった。トムの手が時々、お光さんの肩の上からそれをつかんで行った。

「食べてばかりいないで、そろそろ議事を進行しようかね」

お光さんが言った。こん夜の議長格然と。

「三浦君——」

彼女は、男に対しては、君を見つけ、君をもつて呼ぶことにしている。

「調べてくれたの？　監獄かんごくの方は」

「学校に、そこへ金曜ごとに行くきようかいし教誨師がいるから、それに依頼して、調べて貰ったところが亀田は三号舎の独房に収監されているが、健全だと言っていた。明日あすは行って、差入物をして来る」  
彼女は、トム公の方をふり願かえつて、

「トム公、聞いたかえ、よく聞いといて、亀田の家族に話して安心させておやりね」

感謝をあらわしながら、トム公は、黙つてうなずいた。お光さんは、パツと、指先と唇のあいだから煙草の煙をはいて、

「それから、あの、樫井君、石炭屋の高瀬とあの夫人マダムや娘を、どこかで捕まえる機会はまだ見つかりませんか？」

樫井は、ふけだらけな頭をかいて、

「どうも、うまく探れねえんだ」

「じゃ、落第よ、君は」

「撲なぐるとか、殺すとかいう場合には、いくらでも吾輩わがはいは先頭に立つが」

「なんにも報告がないの」

「きょう本ほんもく牧へ行ったことだけは分っている」

「そんなら、私だって知ってるわよ。これからも、一週間位は、別荘の方にいるようだから、じゃその方も私がひきうけちまおう……」

それから彼女は、びろうどの小型なサックを帯の間から取り出して、その中からすばらしい金剛石ダイヤの指環を、手品師のような指つきをして、つまみ上げた。

「諸君——こんなものが手にはいりましたのよ。こん晩は、そのご報告をいたしますわ」

## 黒眼鏡

「あつ、これかも知れねえぞ」

トム公は、直感的に、口をすべらして、黙つておいでと言うように、お光さんの眼に止められた。

「指環は、ごらんの通り、婦人の小型、金い剛石しは一・半カラット、  
白プラチナ金チナだい、時価二千元ならば当店でも買えるという品物なんですよ、諸君」

と、お光さんは、ひとわたりそれを一同に見せびらかして、一枚のマントを五人ぐらいで着廻している愚連隊の飢うえた眼をすく  
なからず羨望せんぼうさせた。

「それが、どうしたというのか、早く、説明に移つてもらいたい  
な」

と、神学生の今村が言った。

「この店で、二千円で買うと言うんなら、買ってもらつて、少しお光さんの手からうるおして貰いてえもんだ」

と、西洋乞食は寒がった。

「ところが、そうは行かないんですよ諸君。なぜと言えば、これは当店の品でも私の所有品でもありませんから、——実を言つと今日、ちようど私が店の金庫の前に坐つている狒々ひひだんな旦だんな那なに、お小遣いをねだつていると、そこへ、ある男が、売りに来た品物なの」

「なるほど」

「二千円……はあると言うのよ、狒々がね」

「ふうむ」

「男は、すぐにも売りたい顔なの」

「いったい、その男ツていうなあ、どんなご人態なんだい」

「至つて、おとなしやかな商人風の三十二、三という人物さ。黒

眼鏡をかけて、糸織のあわせばかり裕羽織ほりに、角帯をしめて、茶の中折帽、

東京から来て今生糸いとの相場ばうへ思惑をしてみたが、ちよつと、追おい

敷きが足らなくなつたからと、軽く言っているのだがね……」

「あぶねえもんだぜ、そんな口は」

「あぶないどころじゃないのよ、諸君」

「へ」

「ちらと、私がそばから覗くと、まあ、どうだろう、その前に検



事局や伊勢佐木警察署へ行つて、未決の予審調書から写して来た盗品と、そつくりじやないか」

「じゃ、亀田が窃盗せつとうの冤罪えんざいを被せられた、あの高瀬夫人の失なくした品物やつか」

「そう……。これが、そうなの」

「じゃ、いよいよ亀田の窃盗罪は、むじつときまつた」

「そんなことは、トム公が、最初から断言しているじやないの」  
「そこで、どうしたんだ、店では」

「狒々旦那は、考えておくから、あしたもういちど電話をしてみ  
て下さいと、軽く断ろうとしたのよ。——だけど私、そばからす  
すめて、無理に品物を預からしたのよ、その男も、急場に金がい

るんだから、置いていってもいいと言うのさ。……面白いだろう、明日の午後二時頃には、もういちどその男が、店へ来ることに仕掛けたのだから……」

「よし、そいつは、おれが捕まえる」

と、今村や二、三人が競い立きそった。

「で、捕まえたら」

「わたしとトム公とで、十二天の上で待っているから、連れて来てもらいたいわ」

お光さんは、指環のサックを、広東服のポケットに納めて、

「高瀬の方の手段は、それから考えたっていいしね……」と南京豆を割った。

その晩の話は、それですんだ。

「居留地のクラブへ行こうぜ」

「だめだよ、君たち」

「どうして」

「李鴻章は、シャンハイ上海へ高飛びしちまったから」

## 朝のうち

ちとせ千歳の女将おかみは、朝詣りの帰りを、呼びこまれた常盤町ときわまちの金こんば春るで、三十分ほど縁喜えんぎ棚だなの下でしゃべりこんでいた。

熱い塩桜さくらの湯を、手にのせて、

「おや、まめ豆菊ちゃんは、見えないね」

「昨ばんはどうも」

と、主人の春太郎という、自分も、抱えといっしよに、座しきに出ている三十ぐらいな働き芸もの妓、

「今朝もはやくから、つたや薦家さんのところへ呼ばれて」

「朝から、はんぎよく半玉が出るなんて、いい景気なこと」

「おかげさまでね」

「それに、あのこ妓は、まるで、お人形だから、お客には、いい玩お具もちゃだろうよ」

「何しろ小さくってね」

「内気だけど、品がいいもの、ほかのおしやく雛妓さんと来たら、私た

ちでも、顔負けがするのがあるもの」

「感心なことには、五十銭でも一円でもお小遣いがあると、家へ送ってやるらしいんですよ。なんでも、おつ母さんというのは、まだ若いらしいけれど、盲目だとかいうのでしてね」

「へ。家は」

「それを言うと、いやがるんですけど、相沢のイロハ長屋……」  
と言いかけて、口をむすぶと、格子が軽く鳴った。木履ぼっくりの鈴の音は、豆菊だった。

「あら、もう帰って来たの」

豆菊は、すぐ千歳の女将の方へ、

「きのうは、有難うございました」

「まるで、家の娘みたいだね」

「置いてみれば、可愛いもんですから」

と、言つて春太郎は、豆菊の方へ向いて、

「どうしたの、お座しきは」

「あの、薦家のお客さんが、伊勢佐木町へ連れてゆくと言うのよ、わたし、昼間だから、いやだつて、言つただけけれど」

「雛おしやく妓やくが、そんなませたことを言つちやあだめ、連れて行つておもらいなさい」

「今、家へ行つて、姐ねえさんに聞いてつからと言つて、帰つて来た

の」

「豆菊まめちゃん」

「え」

と、千歳の女将の方へふり向いて、長い袂を持った。

「あのね、おまえさん、ゆうべみたいに引っこみ思案じゃいけないよ。きょうは、そのお客さんに、何でもねだらなくつちやあ……」

「だってエ……」

「どんなお客さん」

「それはやさしい人」

「横浜はまの」

「東京ですって、まだ若いだよ、そして、黒い眼鏡をかけて、どこかの、若旦那みたいな人」

「おや、この妓こ、なかなかだよ」

「そんななら頼もしいけれど。……さ、お客さんが待っているんだらう、はやく行つてらつしやい」

「どれ、私も」

「まあいいじゃありませんか」

「おや、もう一時。ちよつと、朝のうちに、お薬師様へお詣りして、帰りに、西の橋の易えきしや者がよくあたるというので、観みて貰つて来たりしたものですからね」

「ご病人でも、あるんですか」

「いいえ、人様の頼まれごとだけれど、まるで見当がつかないの  
でね、探偵じゃあないし、またそう他人に話しては困ると言うし、



困ったことを背負しよわされてしまったのさ。……ひきうける私もすこしすいきよう粹すいきよう狂きやうだけれど」

「ホ、ホ、ホ。女将さんのような気性だと、見込まれるんですよ」  
「女のとりもちぐらいならいいけれど、大隈さんも、ひどい目にあわせるわよ。いずれ、お前さんにも智恵を借りたいと思うけれど」

と、急にいろいろの用事を思い出したように、そわそわと下駄をはいて、

「豆菊ちゃん、そツち？ また、遊びにおいでよ」

## 橋下橋上

真昼の、活動的な、太陽の下、ことに埠頭、船渠、荷馬車、お茶場工場などの、騒音と埃と人間の奔影とが錯綜と織られて  
 いる横浜の十字街を、ゆうべの芸妓や、雛妓を引っぱって、生糸を積んだ幌荷馬車の前を横ぎつても、誰も、そのすがたを、特に、不生産的冷蔑な眼で、見るものはない。

茶色の中折帽に、黒眼鏡をかけ、色の小白い中背の男だった。すこし、やにつこく、若旦那を氣どつてはいるけれど、女たちには、氣うけがいいに違いない。

「買ってやるよ、買ってやるから、往来でそんなことを言うのはよせやい。それに、用事を先にすまさなくつちやだめだから、お

「まあたちはそこいらで待つておいで」

「いやだわ、置いてけぼりなんか……」

「誰が、そんなことをするもんか、すぐそこだよ」

「どこ？ どこ？」

「どこだって、いいじゃないか」

「いけない、いけない」

黒眼鏡はあわてて手を振つて、

「尾ついて来ちやいかん」

と、睨む真似をして、早足に五、六歩離れると、またふり顧かえつて、ついと屋上に時計塔のある柳田商会の小売部へはいった。

豆菊とひとりの若い芸おんな妓は、しばらく、街路樹の下もとにたたずん

でいたが、通りかかる外国人に、ステツキで指さされたり、顔を知っている新聞社の原稿給仕が、わざと自転車を向けて来たり、撒水車が来たりするので、居たたまれないで、なんども、柳田商会のまえを行ったり来たりしていた。

時間を約束してあるので、小売部の金庫のまえには、豚のごとく肥えた老主人が、お光さんの所いわゆる謂ひひぜん狒々然たる精力的な精力を、為なすことなく、退屈させていた。

「どうでしょうか、昨日の指環あれは」

と、黒眼鏡は、店の椅子に腰をかけて、

「買ってくれませんか」

と、切り出した。

老主人は鈍角な赤ら鼻を上げて、

「拝見いたしました」

と、不明瞭に、ていねいに答えた。

「値だんですか、そちらで、考えているのは」

「ま……それもございますが」

「少しや、引いても、いいですよ」

「はい」

「一・半カラットは十分にあるんですからな。それに、尤も、そ  
つちの方が眼が黒いでしょうが、いし宝石そのものには、キズやナミ  
は絶対にはありません」

「分っております」

「どうでしょう、私も、きょうの夕刻の七時までには、どうしても、生糸いとの方へ、追敷しきを注つがなければならぬ場合ですから、即金ならば、たくさんは困るが、ある程度まで見きりますが」

「ま、お茶をひとつ……」

「人が待っているから、なるべく」

「こちらへ、お入れなさいましては」

「いや、かまいませんが、どうですか、その方は」

「実は、きのうここにいました娘が……」

「ふム、あの、広東服カントンを着ていた？」

「はい、あれが、非常に気に入ったふうでしてな」

「ふム。ふム」

「持って行ってしまったんでございます」

「どこへ」

「それがまだ今日此店へ見えませんようなわけで」

「じよ、じようだん言ツちや困るよご主人。僕は、こここの店へ売ろうというのだから」

「分っております。……ですから買う買わないのご相談も、ひとつ、それが来てからにして戴きたいのでございますが。いえ、責任は当店で持っております。お預かり物を、どうの、こうのと言うのではございません」

「じゃ、いつ頃見えるのかね、その広東服の娘さんは」

「晩には、きつと、見えましょう」

黒眼鏡は、店じゅうの時計の時間を見くらべて、

「それでは、もういちど、晩に来よう」

「ご足労でございました」

「値だんは折り合うから、なるべく、買い取ってくれたまえ」

「はい」

店先を出て行くと、男は、中折帽のやまへ手をやりながら、往來を見わたして、向うの角に見えた豆菊と芸妓おんなの方へ、大股にあ  
るき出した。

郵便箱の蔭にかくれていたトム公は、男の足がはやくなったの  
をみると、ついと飛び出して、一本指を上げた。

「おい、君、君」



愚連隊の西村と樫井だった。馴れ馴れしく、両方から肩をつかんで、

「手間はとらせんが、ちよつと来てくれないか」

黒眼鏡の顔が、さつと、青く冴えた。

「どこへ」

「警察たあ言わねえよ、僕らは、刑事じゃないからね、安心して来たまえ」

「誰だ、君たちは」

「横浜はまについて愚連隊を知らないのか」

「……………」

「まあいいから来たまえ」

「いや、僕は、連れがいるのだから」

「連れは連れで、また、いつでも別な日に会ったらいいじゃないか」

しつかり、両方から腕を拱くんで、ずるずると吉田町の河岸まで来ると、樫井と西村は、いきなり男を河の中へ突き落した。

が——下にはボートが待つていた。黒眼鏡のからだだが、蟹かにの穴だらけな黒い河砂かわすなの上に顛落てんらくすると、樫井と西村もすぐとび降りた。トム公もとび乗った。

そして黒眼鏡の四肢を、ぎりぎりうたと隅へしぼりつけるとボートは、オールの唄うたのどかに、鉄の橋の下をすべ迂るすべように潜すべって行く——

びつくりして、色を失った豆菊や若い妓はその橋の上を、今にもわつと泣き出しそうな顔をして、関内の街へ、走っていた。

頓馬とんま

火を放つければ、ぱつと、海が燃えそうだ。重油船からにじみ出る油の皮膜が、マーブルペーパーの紋もんよう様みたいに薄くひろがっている。

赤い帆の快走船ヨット、白い帆の快走船。また、猫背なヤンコの鉄骨の上には、秋の午後の陽がとろりと舂うすいて、C字形の築港ラッコに抱かされた港内の海はまるで思春期の狷虎の肌みたいに滑らかだ。

——岬みさきの十二天へ登つて、お光さんは、港内を見下ろしながら、  
 カントン 広東服の膝を組んで、その上へ、巻煙草を挟んだ指を放心的に  
 乗せていた。

「——失敬ですが」

先刻さつきから、森のうしろへはいつたり、社やしろの絵馬を仰向いたりし  
 ていた洋服屋の職人みたいな鳥打帽ハンチングが、その廂ひさしへ、ちよつと手  
 をかけながら、彼女の前へ屈かがみこんで来て——

「火を一つ」

と、一度吸つて消してある両切りの先ツぽを、ぶしつけに、出  
 して来たのである。

「火ですか」

「恐縮ですが」

お光さんは、わざと火のついている煙草はそのまま指に置いて、ポケットから、ホンコン香港出来の蠟ろうマツチを探つて、黙つて貸してやる。

男は、人間の小骨みたいな蠟の棒から、いおう硫黄色の火を出して、すぱつと、いやしい音をさせて吸つた。

それを、戻しながら、

「いい日曜ですな」

「え……」

お光さんは、道理で港内が静かなわけだったとうなずいたけれど、男の顔へは、いち一べつも向けなかつた。

「お散歩ですか」

と、男はうるさい。

「え」

「どこかでお見うけしたように思いますが……あなたを」

「そうですか」

「ご近所ですか」

「え」

「山の手やまてでしたらうか、さあ……何処でお目にかかったでしょう  
な」

お光さんは、とうとう、持ち前のかんしゃくが起きてしまった。

「うるさいわよ。君」

君！ と来たので男はぎよつとしたように彼女の顔を見直した。  
お光さんは、犬を見るように、<sup>さげす</sup>蔑んだ眼で、

「——ご苦労様、吹きさらしで、張り番も楽じゃないわね。君は税関のスパイでしょう。顔に描いてあるわ。だけれど、私が、密輸入の信号をしているわけじゃないから、お生<sup>あいにく</sup>憎様ね！」

呆<sup>あ</sup>っ気にとられているのを後にして、お光さんは活潑に、石段の降り口へ向って歩き出した。——そこへトム公が駆け上って来た。トム公を見るとお光さんは、姉のように手を伸ばした。

「どうしたえ、連中は」

「今、黒眼鏡を引っぱって、ここへ来るよ」

「税関のスパイがいるから、ここへ来てはまずいね。どこかない

かしら、ほかにいい場所が」

「坂のナンキン墓は」

「あ、あそこなら静かでもいい、こつちへ上がって来ないうちに、ナンキン墓の方へ行くように連中へそう言っておくれ、私は、上から廻つて行くから」

長い急な石段を、トム公が転がるように、駈け降りてゆくのを、見て、お光さんは反対に、十二天の境内を裏坂の方へ歩き出した。その背なかへ、まだ先刻さつきの頓馬とんまなスパイの眼がこびりついているのを感じながら――

ほだいむ  
菩提夢



川すじで、貸ボートを捨てた一ひとむれ群の愚連隊たちは、柳田商会の前でうまうまと罨わなにかけた黒眼鏡の男を取りかこんで、誰の眼にも、何の異様も感じさせずに、北方の通りをぞろぞろと連つながって来た。

「十二天はいけねえとよ！ ナンキン墓だ、廻れ右」

先へ行つたトム公が戻つて来て、そう告げる。

谷戸坂を登つて、左側の高い崖をのぼると、中腹に土どまんじゆうが鰻頭型の陰気な丘があつた。刈られてある雑草のひろい空地の向うは、凝固土コンクリートの低い杭くいから杭へ、鉄の鎖が垂れていて、その中には、異国で死んだ中華人の墓石が乱立している。

ここのナンキン墓の墓番をしながら、花や香を売っている広東人の若夫婦は、たいした金が儲かるといっているので、その頃、在邦の清国人のあいだでは羨望の的だった。

墓番の若い細君は、同邦人の葬式があるたびに、必ず、楊貴妃のように盛装して施主に雇われてゆく。それは、清国式の大げさな葬式にはぶたの丸煮と共に、ぜひともなくてはならない「泣き女」の職業に。

銅鑼や、木鼓板や、鉦を、破れかえるほどたたきながら、よく、彼等の祭の如き輿をかこんで行く葬式の行列が、横浜の町を練つてゆくのをみる。

職業婦人の「泣き女」は、その葬式の先頭に立って、人力車の

上でオイオイと声をあげて泣くのが商売だった。ナンキン墓の細君は、その泣くことの天才であつて、ご亭主さんよりは稼ぐといふことである。

その「泣き女」の細君と懇意こんいなのか、お光さんは、家の中で立ち話をしていたが、トム公の声を聞くと、すぐに出て来た。

「あ、来たのね、諸君」

捕まつて来た黒眼鏡の男は、彼女のすがたを見ると、すぐにか話しかけそうにしたが、檜井と西村に腕を抑えられて、

「オイ、逃げると、手荒くなるぞ」

「何も逃げやしない」

黒眼鏡もすこし度胸をすえたように、その手を突ツ放して、お

光さんの方へ迫った。

「ご婦人！」

「なあに」

「君はきのう柳田商會にいた娘さんじゃないのか」

「そうよ、覚えてゐるわね」

「なんだって、無頼者ならずものを使噓しそして僕をこんな所へ引っぱって来

たんですか。君たちは白昼おいはぎに追剥おいはぎでもやろうっていうのか」

「……………」

お光さんは、相手にならないで、笑いながら墓地の鎖またを跨またいだ。

そして、大きな菩提樹ぼだいじゆの下から振りかえつて、

「諸君、こつちへ連れておいでよ、その黒眼鏡を——」

ここへ来ると、愚連隊たちは、急に黒眼鏡を罪人のように小突き廻した。彼は、墓地の上へ追いあげられて、菩提樹の下に起立を命じられた。言うがままにしなければ、その度ごとに、拳骨げんこつが来るのだった。

「誰も来やしまいな」

と、今村がきよろきよろした。

「だいじょうぶだよ」お光さんが言った。

「今ね、墓番の若夫婦にたのんでおいたから……」

「誰か寝てるぜ、あんな所に」

「どれ？」

今村の指さす所へ、みんな鋭い目を向けた。墓と墓とのあいだ

に、ひとりの清国人が、新聞紙を敷いて昼寝をしている。いや、そこばかりでなく、よく注意してみると、あつちこつちの樹や石の蔭に、木の葉虫みたいにごろごろと人の寝ているのを発見した。その中には、日本人も交じまっていた。

「なんだろう？ あいつら」

「知らないのかえ、諸君は」

お光さんは笑って——

「あれはね、チイハという南京富籤とみを買う人間が、夢を見に来て  
いるんだよ。——ナンキン墓へ来て昼寝をして、その夢をけんと  
くに富籤とみを買うとあたるといふ迷信があるのさ。……抜け目はな  
いやネ、墓番のやつは、それでチイハ流行ばやりのこの頃、墓地の入場

料をとってしこたま儲けているんだよ」

——話しながらポケットを探っていたお光さんの手には、いつのまにか、小さな短銃ピストルが光っていた。

黒眼鏡は、それを見て、顔もからだも、硬直したように、竦すくんでしまった。

巾着きんちやツ切きり

ピストルが物を言うように、冷たいことばだった。

「君」

「……………」

黒眼鏡は、その黒い玻璃ガラスの奥で、お光さんの顔を、恐怖にみちた目で見つめたままだった。

「君」

「……なんだ」

「名まえを仰おつしやいな、名まえを」

「僕の姓名を貴様などに告げる必要はない。そんな物を人に向けて、何をするんだ」

「素直にしなれば、撃つよ。空弾からだと思えば、撃つてみましょうか、見本にネ」

彼女は、事もなげに、菩提樹のこずえに向つて、一発、実弾を放した。



「まだ、五発あるわ」

今の短銃<sup>ピストル</sup>の音に、墓場のあいだに、チイハの夢占<sup>ゆめうら</sup>をむさぼっていた人間たちは、びっくりして飛び起きた。そしてコソコソと逃げてゆく登音<sup>あしおと</sup>音を、黒眼鏡も、お光さんも、愚連隊たちも、黙って、聞き過ごしていた。

お光さんは、重ねて、

「名まえは？ 君の」

「高橋」

と、遂に、黒眼鏡もふるえながら言いだした。

「高橋？ それから」

「高橋<sup>やすお</sup>八寿雄」

「<sup>すまい</sup>住居は」

「東京」

「うそ。……ほんとのことを仰つしやいな」

「東京だから東京だつて言うのに、信じなければしかたがない」

「うそ、うそ。柳田商会の伝票へ書いてあつたのは、長者町八丁目、盛心館としてあつたじやないの」

「それは下宿先だ」

「ご職業は」

「木綿問屋ということも、きのう柳田の店で話していたはずだ。

知っているならば、くどく聞き給うな」

「お生憎様。君は、まずその黒眼鏡を外しては<sup>はず</sup>どう？ そんなも

ので、世間がごま化されていたら滑稽だわ。ね、トム公」

トム公は、さつきから、彼女の侍者のようにまた、今にもつかみかかりそうに、鋭い眼をしていたが、黙って、うなずいた。

「君は、木綿問屋ではありません、ほかに本職があるでしょう。言いにくければ、私が、代弁してあげてもいい」

「……………」

「言わないのね、じゃ、私が高橋八寿雄に代って告白しましょう。——諸君、わたくし、高橋はですね、実は<sup>すり</sup>掏摸でございます。うそだと思うなら、襦<sup>じゆばん</sup>袷の袖をめくって、二の腕の<sup>ほりもの</sup>文身を見てください」

彼女の皮肉な<sup>やゆ</sup>揶揄が耳を刺すと共に、黒眼鏡は、脱兎のように

逃げかけた。

「野郎」

「ふざけるな」

追いかぶさった腕が、何本も、彼の帽子、彼の襟くび、彼の袖、彼の帯をつかまえて、あわむ仰向けにひっくり返した。ゴロタ下駄やドロ靴が、たちまち眼鏡をとばし、肩を蹴とばした。

「野郎、逃げられるものなら逃げてみろ」

「……………」

男は、半殺しの目にあつて、腰も上げ得ないほど参つてしまつた。そして、眼鏡のとれたすごい顔を、お光さんに向けて、

「さ、殺せ。殺すなら殺してみろ。そのかわりにてめえたちも、

ただはおかねえぞ、おれは東京の仕立屋銀次の身内で常ツていうんだ」

「じや話はすぐに分るわ、とんだ失礼をしたけれど、君が、ここまで来ても口を開か<sup>あ</sup>ないから悪いのよ。ほんとなら警察へ突き出されたつてそれまででしょう。それを地道に訊<sup>き</sup>こうというのに、シラを切るんだもの」

「覚えていやがれ、畜生」

「まだ怨んでいるのね、君は。——君は勘ちがいをしているのよ、私たちは何も、好んで君を痛めつけたわけじやないわよ、そこに、相当な理由があるから敢<sup>あ</sup>えてお体を拝借して来たんだわ」

「なんだ、いッてえおれに聞きてえというのは」

「これよ」

お光さんは、ダイヤ金剛石の指環を示して、

「ご存じ？」

「知っている！」と、すり掏摸の常は、もう捨て鉢だった。

「ドック船渠会社の構内です掏ったんでしょね、あの、仲通りの高瀬商

会マダムの夫人お榎さんのオペラバッグから」

「それがどうしたって言うんだ」

「有難う……。それさえ分れば、ここにう泛かび上がる人があるのよ。トム公、おまえこの巾着ツ切さんに、よく事情をわけ話したらいいよ。こういう人は、物分りがはやいのだから」

トム公は巾着ツ切の常に向って、亀田がそのえんざい冤罪をうけて、

監獄へはいつていることを話した。また、その亀田には五人のあわれな家族たちがあつて、飢えに瀕ひんしていることも話した。

トム公の話の半ばごろから、巾着ツ切の常は首を垂れてしまつて、社会の最大悪を犯したように、ただただ恐れ入っていた。そして、こんな言葉をつけ加えた。

「実あ、あつしも、まさか船渠ドックの中でそんな仕事をしようとは思わなかつたのですが、横浜へ稼カぎに出て、ろくな仕事もなく、飯にも困マつてしまったので、ちよツくら、かんかん虫ツてやつになつて、一日、あそこへ働きに行つたんです。——すると、あの騒ウぎでしょう。おまけに、あつしの鼻ツ先へ、オペラバッグが飛んで来たので、ごたごた騒ウぎに、目ぼしい金属品かねめを三ツ四ツ抜いた

んですが、帰りとなると、門衛や私服が出口に詰めこんでいるので、しまった、と思ったので側にいたのろまそうな男のポケットへ品物を筒抜けさせて、指環だけを、ここへ」

と、大きな口を開いて、自分の喉仏を指さしながら、

「嚙のんじまったんです」

「じゃ指環これは、いちど、君のお腹の中をくぐったの」

「まさか」

と、巾着ツ切の常は、すこし明るく笑った。

「何しろ、わけを聞いてみりや、重々、すみません。何時いつなん時どき

でも、自首をして、その亀田さんとかを貰い下げにいたします」

「きつとだね」



「へい」

「じゃ、ほんとの住所を書いといてくれないか」

「ここへ知らせて下さりや、いつでも、入監の支度をして、出て参ります」

東京市本郷区湯島仕立屋銀次方——と鉛筆で書いたのを、お光さんに渡した。

山の下には、もう谷戸町や北方の町に、美しい灯がともつていた。

「どうですか、諸君」

常と別れてから、お光さんは、ナンキン墓を下りながらもろて双手をあげて、

「こん夜は、トム公のために、乾杯かんぱいしてやろうじゃないの。そして私は、この金剛石ダイヤモンドの指環を、柳田のお狒ひひ々さんに、二千元で売りつけてやるよ」

「二千元？」

みんな、嘆息たいきをあげた。

「アア二千元よ、そしてさ、百円は亀田の家族にやつとくよ、そして、百円はトム公のおつ母さんに上げつちまうよ！　そしてあとの千八百円をどうすると思う？」

「むろん、こつちへも渡るだろうな」

「仲間割れをしツこなしさ。合資会社コンパニーということがいいじゃないの。諸君！　八百円をわれらの合資会社の資金として、根岸の競

馬はどうですか」

「異議なし」

「さんせい！」

「だけれど諸君、競馬ばかりに熱中しちや困るわよ。まず、指環の真犯人はいつでも出せることになったから、これからは、高瀬理平への策戦よ。でなければ、なんらの意義がなくなつてよ、ねえトム！」

トム公は、愉快で愉快でたまらないように、足を弾はずませて、三シヤンペンの鞭むちのコロツプみたいに踊りながら、

「競馬？　そうだ！　根岸の競馬へ行きや、きつと、石炭屋の高瀬とあのおんなたちが来ているぜ！」

## 時の心臓

あれから幾日か経<sup>た</sup>つて、広東服のお光さんはまた、嬌<sup>きよう</sup>然<sup>ぜん</sup>と  
宝石を噛んでいるような明るい齒を笑<sup>え</sup>まして、屋上の時計塔が、  
薄暮の空に午後四時の指針を示している柳田商会の店へはいつて  
来た。

店の、うす暗い金庫と事務卓の隅に、赤い笠の電気を捻<sup>ひね</sup>つて、  
何かカード様<sup>よう</sup>の無数の紙<sup>かみ</sup>片<sup>きれ</sup>をならべて他念なく見入っていた柳  
田老人は、南京靴の軽いステップに驚いたような顔を上げて、  
「おや、来たのかい」

と、あわてて卓上のカードを取りまとめ、手の下にかくした。お光さんは、腰をおろすとすぐに、それを彼の手の下からむしるように引ひつ奪たくつて、四、五枚、ペラペラと見ては剥めくり返して、「いやなお狒ひひ々ひさんね、昼間からこんな物ばかり見ているのよ。店員たちに見られたらきまりが悪くなくって？」

と、唾を吐くように言いながら、お光さんもまた、それを離そうとはせずに、つい同じ物を何度も繰り返しては眺め入ってしまうのだった。

「いいじゃないか、何もこれは、わしの蒐コレクシヨン集だからな。趣味だよ」

と、老人は、どうせ見られたからには、という風に、隠してい

たあとのカードまで、みんな彼女の手へ公開してしまった。

「まあ？」

と、お光さんは、その一枚一枚に、わざとらしい眉をひそめながら、息をのんで見て行った。それは、阿片やモルヒネと同じように種々さまざまな文化の中に紛れこんで輸入されるドイツの売笑婦や、フランス物の淫蕩な乱舞を、トリックした写真なのである。――

それが迫真味の乏しい安俳優と売笑婦のトリックとは知りながらも、中には、何となく悩ましく胸の押されてくるようなものもあったけれど、そのうちに、二十名以上もいる金髪の裸美人が、胸や肱や曲げた足や、種々なポーズをもった四肢を組み合わせて、一個のグロテスクな人間の性慾的な面貌を構成している写真にぶ

つかつて、急にいやな気もちがして来たように、

「つまんないわ、こんな物」

と、デスクほう卓へ抛り出した。

老人は、それを、あわてて掻き集めて、金庫の中へ仕舞いこんだ。そして、意味のあるようなないような、妙な笑いかたを頬杖にのせて、

「あとで時計塔へおいで」

と、老人のする別種な気味のわるいはにかみをして言った。

「ええ、行くわ。私も話があるから」

老人は毛皮のスリッパを穿はき直して、小売部の横から狭い階段を螺旋らせんなりに登って行った。三階は二階よりも、四階は三階より

も狭隘きょうあいになつて、やっと一坪半ぐらいな、そして天井だけが妙に高い扁平へんぺいな感じのする一室に突き当つた。

その扁平な狭い所へもつて来て、要いりそうもない扉ドアが付いていた。扉を締めるとそこは壁と壁との間に隠れこんだような秘密的な落着きが得られる。床にはダブル寢床ベッドがいっぱい置かれ、仰ぐ上には、大きな真しんちゆう鍬の歯車だの油穴のあいている鉄板だの振子だのが、機関室の一部みたいに組みあわされて、その機械の間に、二個の丸い窓があつた。いうまでもなく、ここは四階の時計塔の時計の心臓であつた。丸い窓はその字板を切りぬいている鍵穴である。

お光さんは一週間に一度ずつは、この時計塔の裏に登つて、柳



田老人の自由意志の下に、そむくことのできない義務を買われていた。ベッドはすぐに事もなげな二人のためのものになり、壁の字板の鍵穴からは、煙草の煙が紫いろに夕方の外気へながれて出た。

「あ。………忘れた」

と、老人はぴくりと体を起しかけた。

「なにを」

「今の写真を持って来て、ここで、二人してゆっくり見るんだつたに」

「いいわ、あんなもの、持って来なくっても。………それとも私の魅力は、あんな物以下なのかしら」

「そ、そんなことは、ないがね」

「じゃ、こうしていらつしやいよ。あの写真のようになれというならば、私、どんなポーズにでもなつて見せるわ。その代り、きようは店へ買い取つて貰いたいものがあるのよ、この間、二千元と評価したけれど、千五百円に負けとくわ、儲けさして上げたり、言うことを肯きいたりする、こんな若い孔く雀しゃくを持つて、あんたは何ていう幸福者」

と、お狒ひひ々ひひさんの腮あごをつまみながら、左の指から外した指環をその鼻の先へ出して見せた。

慕ぼ住じゆう

その「時計の心臓」は、いつのまにか真つ暗になった。ちよ  
うどそれが懐中時計の機械の中の紅玉石ルビーを象徴するように、赤い  
豆電気が三カ所から、寢床ベッドに向つてぼんやりした光を投げている。  
ギギギと、天井の遊体歯車の一個が活動しはじめると、何処か  
にかくれている鐘しょう板ばんがジャンジャンタイムと時の音を連震した。――  
―お光さんはその音響に眼をさまして、さめるとすぐ無意識に、  
その指が、寝くたれた髪の毛を耳のうらへ搔き上げていた。

「……八時？」

と、数えていると、どこか遠い外の方で、するどい指笛が二度  
ばかり聞こえた。彼女は、寢床ベッドからすぐに手のとどく小さな梯子はしご

へ足をかけて、時計塔の鍵穴から首を出した。

まば 眩ゆい宵の街光と繁華な人の流れが、眼の下に見下ろされた。

しかし誰も、その夜の星空のよいことに無関心でいるように、柳田商会の時計塔の穴から、白い女の顔が、町を物色しているとは気がつかないのである。

ただ——たった今、郵便箱の蔭で、指笛を吹いたトム公だけがすぐにそれを見つけて、にこつ、と笑った。

お光さんは首をひっこめた。

そして再び、飽食した豚のように、いびき 鼾をかいて寝ている柳田老

人の顔をながめていたが、やがてダイヤモンド 金剛石の指環をその小指には嵌めてやって、その代りに、彼のポケットにある五、六個の鍵のうち

から一箇を抜き取って出て行つた。

三階は、日本間になつていて、老人の居間であつた。彼女がその勝手に通じていることは、自分の銭かねいれ入いれにいくらあるかということよりも詳くわしい。袋戸棚の手提金庫は、机の上に持ち出されて、苦もなく彼女に千五百円の紙幣をかぞえさせた。鍵をそれにさしたまま、元の所に納めると、お光さんは階下したへ降りて、小売部の若い店員へ、素直に、さようなら——を与えて街へ歩み出した。

この間、ナンキン墓での時に、今夜ここへ来いと言われていたトム公は、正直に、約束の時間を待っていた。

「君、たくさん待っていたの」

「なあに、三十分ばかり」

「うっかり寝込んでしまふところさ。そのかわり、予定は着々とはこんでいるわよ。……さ、この百円を亀田の家族に、この百円をおまえのおつ母さんの当分の暮しにあてがっておいで。——それからだよ。高瀬との争闘けんかはね」

トム公は、生れてからまだ見たこともない二百円の紙幣をからだに持って、なんだか、足がふわふわした。

「そしてと——明日じゃない——明後日あさってが競馬の初日だから、根岸の松林にある教会の裏へ集まるんだよ。アア、ほかの者もみんな知っているから……。いいかい、それを落しちやいけないよ」

こう言つて、彼女は、たくさんな人が歩いているのに、トム公

の顔を抑えて、痛いほど接吻をして、伊勢佐木町の裏で放した。トム公は、眼が眩まわるほどきまりが悪かった。そして、決して嫌ではないけれど、お光さんの手を突っ放すようにして、搔っ払いのように、あわてて、人混みの中へ駈けこんでしまった。

彼は久しぶりで、あれ以来足を抜いているイロハ長屋の、暗い故郷ふるさとを眼に描きながら、急いで歩いた。からだ中が金の重さのように感じられた。飢えたる亀田の家族や、目の見えない母の顔が、どんなに歓びにかがやくかを想像すると、トム公の胸にも言い知れない喜悅がいつぱいになる。

「牛肉を買って行こうか。おつ母あは甘い物が好きだ、風月の最も中なかを買って帰ろうか」

トム公はいくたびも、そんな食料品屋の前に立って、やさしい出来心を起してみたけれど、二枚の百円紙幣をくずすことが怖くもあり惜しい気もして、とうとう何も買い得なかった。

で、まっすぐに、ほとんど一散に、手を振って貧民街のイロハ長屋の露地口まで帰って来ると、誰かうしろから、大きな手が彼の肩をつかんで、

「トム公じゃねえか」と言った。

振り向いてみると、同じ長屋にいる屠牛場の仙<sup>せん</sup>さんだった。仕事場からの帰りとみえて、仙吉は片っぽの手に竹の皮包みをぶらさげて、少し異様な眼をして彼を見つめた。

「どこへ行くつもりだ？ トム公」



「家へ帰るのさ」

「とんでもねえことだぞ」と仙吉は誇張した声で、「長屋にやあれから後、毎日、一人ずつ刑事が交代で来て、見張っているのを知らねえのか」

「捕まツたつていい。おらあ行くよ、おらあおつ母あに会いに来たんだ」

と、張りつめて来た愛慕が、拒めるものこぼの好意にさえ感傷になつて、つよくさげんだ。

「ばかを言いねえ。おめえが捕まったらどうするんだ。亀田さんの出獄でて来るあてもなくなるし、おめえのおふくろまでが、どんなに嘆くかわかりやしねえぞ。……だからよ、おふくろも、病院

へはいる間際まで、そればかり周<sup>まわ</sup>りの者にたのんで行つたつて言うぜ」

「おつ母あが病院へはいつたつて」

「知らねえのか」

「知らねえ」

「おめえが帰られなくなつてから、病臥<sup>とこ</sup>についちまつたんだ。おれたちにや何の病気だかわからねえが、何しろ、粥をすすする元氣もねえんでオタスケ病院の医者に頼みこんだところが、入院しなかつちやいけねえとい<sup>おととい</sup>うので、一昨日のことだったよ、ふとんにくるんで、みんなが送つて行つたなあ」

「じゃ、銭がなくなつて、困つたらうな」

「なあに、病院の方は、オタスケ病院だから、一切金は要らねえのよ。俵くるま賃ちんだの何だのは、長屋の者から五銭ずつ集めて、それで立派に間に合ったから心配しねえがいい」

「小父さん」

トムは感激に燃えながら、二枚の百円紙幣さつを彼の前に示した。

「おら、こんな金を持って来たんだぜ」

仙吉は飛び上がるほど驚いて、

「や、おい、トム公、これやおめえ、百円紙幣さつが二枚だけ。どうしたんだ。こんな大金を」

「貰ったのよ……元町のお光さんに」

「お光さん……。あのむらさき組というハンケチ女のお光さんか」

「百円は亀田の家族へ、百円はおれのおふくろに」

「だって、あのお光さんは、南京ラシヤメン 妾だという話じゃあるけれど、こんな大金を、女愚連隊のくせに、持っているはずはねえじゃねえか」

「なあに、あの女のひと旦那は李鴻章じゃねえよ。吉田町の柳田という時計屋だよ。そこから持って来た金だからふしぎはねえのさ。

……もし刑事に捕まった時は捕まった時だ、おれは、これを、亀田さんの家族に渡してやらなければならねえ」

「ばか。ばか。——そんな大金を持って捕まったひにや、なおさら罪が重くならあ。それなら今、おれが亀田のおかみさんと呼び出して来てやるから、どこかそこいらに隠れている」

仙吉は、そう言って、イロハ長屋の暗い露地にかくれた。

## からたち

しばらくすると、あかご 嬰兒の泣くのをあやしなから、亀田の細君が仙吉に連れられて、いそいそと駈けて来た。今夜も、トム公の母のいた空家には刑事が張込みに来ているらしいからと言って、ふたりはトムに注意をしながら、植木商会の菊畑へはいつて菊の中にかくれながら話した。

「トムさん、こんなお金をいただいてどうしましょう。良人やどが帰ってから叱られます。どんな内職をしても、留守のうちだけはや

って行きますから……」

と、亀田の細君は、どうしても金を受けなかった。まだ貧民街のどん底気質に馴れない中産階級型のこの細君は、刑事に追われているトム公の手から出された百円紙幣を、何の恐怖もなくは見られなかった。

しかし、母乳が出ない上に、赤ん坊のミルクを買う金もないので、母も子も、ろうそく蠟燭のように青く痩せ細っていることは、仙吉が、よく知っていた。もし金のことで間違いが起ったら、自分達でひきうけるからと、口を酸すっぱくしていったが、それでも取らないので、仙吉が長屋を代表して預かっておく。そして意義のあるように費つかう、と言って自分の手へ預かった。

「もう犯人も分っているし、いつでも、自首させることになって  
いるんだから、近いうちに、きつと亀田さんを長屋に帰してあげ  
るぜ。……だから気を落しちやいけねえぜ」

トムはそれから、母の收容されている赤十字病院の所と部屋おたすけの  
番号をくわしく聞いて、

「どうしても、おつ母あに会つて来る！」

と、仙吉が危険だと言つて止めるのを振り切つて、そこへ廻つ  
た。

植木商会のひろい庭園を抜けると、道が半分も近いので、彼は、  
通行の止められている柵を越えて、背のたかい蘇鉄そてつの葉や温室の  
あいだを駈けぬけた。金きんぼたん 釦たんをつけた制服の園丁が、花の蔭か

ら彼のすがたを見たけれど、咎<sup>とが</sup>めなかつた。

輸出向の百合の根がたくさん蓄えられてある倉庫の間から、彼は山の手通りへ飛び出した。五、六丁、桜並木の蔭を走ると、右がわにひろい空地をかこんだからたちの垣がある。

そのまん中にある三階建て<sup>だ</sup>の古い病舎が、赤十字<sup>おたすけ</sup>病院<sup>だ</sup>だった。

——取りこまない白い洗濯物が、からたちの垣から桐の木へ、幾すじも渡してあつた。

あの三階に見える弱々しい灯の一つが、盲目の母の枕辺を照らしているのだと思うと、トムはひとりでに眼がしらが熱くなった。

## 十九号室



越前蟹えちぜんかにみたいに大きなそして赤く灼やけた薬罐やかんが、炭の一俵も

おこしたほどの炉の上に、手とつるとを伸ばしていた。医務室の職員たちもあらかた帰ってしまつて、番茶殻がらまできれいに流してしまつた小使部屋の老小使は、貸本屋の「自転車お玉」を愛読しながら、板裏草履いたうらぞうりの脚を椅子から椅子へ長々と掛けていた。

生首正太郎と自転車お玉とが、築地河岸の闇で七五三科白せりふで、  
ヒ首あいくちを持ち合う出合場であいばのところで、小使はちよつと本をふせた。  
同時に彼は、沸わきこぼれている大薬罐の湯気の向うに、忍術を使つて立っているような少年マドロスの姿を見出して、変な顔をしながら、職務的になつた。

「おや、どこからはいつて来たんだ、おまえは。——残飯なら明日<sup>あ</sup>おいで、明日<sup>した</sup>」

ぼんやりとそこへはいつて来たトム公は、この小使部屋で珍しいものを見た。それは天井から下がっている五燭の電気だった。居留地の異人館ですらまだ多くがランプなのにここには電気がついている。赤十字病院<sup>おたすけ</sup>はやはり金持なんだな、と考えた。

彼はポケットに突っこんでいる指先に意識をとめてみた。ポケットにはさつき亀田の家族へと言って仙吉にあずけた百円のほかに、もう一枚の百円紙幣<sup>さつ</sup>がうすいなめし革のような触感をもつて指先に存在を知らせた。彼は、その紙幣と同居している脂<sup>やにくさ</sup>臭い物をポケット糞といっしょに探り出した。それは半分の紙卷煙草<sup>まき</sup>

であった。一本の半分まで吸って、揉み消した方を紙パイプの中へ突っこんで丹念に次の喫煙慾の起るまでしまっておいた半分のピンヘットである。

トム公は、その吸いかけの方を紙パイプから抜いて差し直しながら、そこにあつた大きな鉄の炭挟みの先へ挟んで火をつけた。そして口へ持つて来て横に啜くわえると、初めて呆あつけにとられていた老小使へ返辞をした。

「おじさん、おら、残飯貰いじゃねえぜ。この赤十字病院にはおたすけいっているおつ母かあに会いに来たんだ」

「じゃ正門の方へ行きな。そして、受附へ面会人の名前と、自分の住所姓名を言つて、その上で、医務室のゆるしを得なければい

けない」

「だって、表門は締まっているじゃねえか」

「面会は午前九時から七時半までの規則だから」

「ところが、おら、昼間は来られねえんだよ。後生だから内証でおつ母あの病室へ連れて行つてくんねえか。え、おじさん」

老小使の眼は十分な疑いをもつてトム公の挙動を調べ始めた。

彼の頭脳あたまは「自転車お玉」を捕縛するために奔命する武藤刑事と同じように働いて来た。

「ちよつと訊くがお前——一体どこからここへはいつて来たのか」

「裏門から」

「裏門も閉まっているはずだが」

「からたちの垣を越えて」

「ふーむ」と老爺おやじはいかめしい顔をして、「これまでにして病院へはいつて来るといふのは、何か事情があるんじゃないか。その会いたいという病人は何号室の患者だね」

「三階の十九号室。——そこに、相沢町字和蘭陀横丁あやおらんだの千坂桐代つていう人がはいつているだろう。盲目で、女の……」

「はいつている。十九号は伝染病隔離室だから腸チフス患者だな。それがおまえのおふくろか」

「あ」

「名前は」

「おれのかい？」

「そうさ」

「かんかん虫のトムっていうんだ」

「トム？ ……あいのこ混血児かい」

「馬鹿にすんねえ！」

トムは純粹な日本語を飛ばして、口元まで吸い切った煙草を火の中へ抛った。紙パイプの蠟ろうが彼のたんかの如く罪のない焰をぱつと上げた。

「混血児か混血児でねえか、よく眼の色を見てくんな」

「だって、トムなんていう名は、日本人にはないだろう」

「詳しくいえば千坂富磨っていうんだけれど、舌が廻らねえや、トムで分るじゃねえか」

「とにかく明日あした出直して来なければだめだな。それにしたって、伝染病患者だから医務室で許可をするかどうか分らない」

「そんな馬鹿なことがあるかい」トム公は食ってかかった。

「自分のおつ母あに会うのに、他人が許可をするもくそもあるもんか。おら、ここからは行って行くぜ」

「そうかい、無断では行って行くならは行って行くがいいだろう。その間に、おれは前々から刑事さんに頼まれていることをしておくからな」

と、老小使も彼といっしよに廊下へあがって、電話室の扉に手をかけながら振り向いた。黄色い歯がげらげらと笑った。

トム公は、あつと足をすく竦めると、突然、爆片のように素ツ飛ん

で小使部屋から外へ逃げ出した。そして再び、うらめしそうに、三階の病室の灯を見上げていた。どうしても、彼は母の顔が見たかった。ちよつとでも、自分の声を母に聞かせたかった。

「おつ母あ。……おつ母あ」

心のうちで叫びながら、病院のまわりを歩いていた。夜もすがらこうして歩いていたら母が自分の姿を夢に見るであろうと儂い<sup>はかな</sup>ことを考えて慰めた。

と、永いからたちの生垣<sup>いけがき</sup>の外を、可愛らしいぼっくりの鈴が忍びやかに歩いて鳴った。トムが歩む方へ、その鈴の音が尾<sup>つ</sup>いて来た。彼がいつまで気がついてくれないのを焦<sup>じ</sup>れつたく思うように、やがて、垣の外から低い声がトムに向って呼びかけた。



「兄さん。……兄さん」

灯ひ

トム公は振り顧ふかえつて、ぎよつとしたように外の闇を見つめた。からたちのいばらを透すかして華やかな友ゆうぜん禪ぜんちりめんと緋ひ鹿がの子この帯おび揚あげが見えた。白い、夕顔の花みたいな顔が、悲しそうな眼をして、棘とげのある垣の隙間からのぞいていた。

「あ、お菊ちゃんだね」

トム公は言った。

お菊ちゃんとは、金こん春はるの雛おしやく妓くの豆菊の本名だった。あの、

小さな淋しい雛妓が、こんな晩こんな所へ、どうして来たのか、ぼつねんと袂をかかえて立っているのだった。

「馬鹿だなあ」

トム公は、兄さん顔をして、

「何だツて、女のくせに、こんな所へ来たんだい。馬鹿だなアお菊ちゃんは、早く帰れよ」

「だって……昨日病院ここへ面会に来たら、誰にも会わせることはできないと言って、帰されたんですもの」

「誰と来たの？」

「姐ねえさんと」

「どうして、おつ母あが病院ここへはいったのを、おめえに、分った

「んだらう」

「警察の人が金春へも調べに来たのよ。わたしみんな聞いたわ、兄さんは、警察でも手こずっている不良少年なんですって。こんど捕まえたら、八丈島の感化院へ送ることに極きまっているんですって。……兄さん、悪いことをするのはもう止めてネ……」

「ふふんだ！ 誰がくそ、感化院なんかへ行くかい！」と、トム公はむきになって怒りつけた。

「おれが悪いことをしたって、何時いつおれが悪いことをしたか、おれは、掏摸すりや泥棒なんかしたおぼえはねえぞ、警察のやつが来たら言ッてやれよ」

彼のみはそう言ッて、独りで気概を昂あげていたが、豆菊は垣の

外でほろほろと泣いているのだった。——寒そうに、そして、世の中の何もかも、すべてが凍え切つて、すべてが真つ暗こごのように。

「……兄さん」

「泣くない、馬鹿だな」

「おつ母さんは、死ぬんじゃないの」

「………」

「わたし、お座敷にいても、寝てからも、それが心配になつて。

……ねえ兄さん、おつ母さんが死んだら、私たちは、どうするの

………」

「死にやしないよ、病院にいりや大丈夫さ。それよりも、菊ちやんは、どうして今時分来られたんだい。金春の家うちで、探していや

しないのか」

「いいえ、お客さんに、お座敷を付けて戴いたの。……そんないいお客さんを、兄さん達はこの間、酷ひどい目に合わしたのね」

「あの黒眼鏡か」

「え」

「だってあいつは、掏摸すりだもの。それにどやしてやる理わけがあるんだから」

「違うわ、あんない人はなくってよ。わたしが、せめて病院の外から、おつ母さんのいる窓の明りでもいいから見たいと言ったら、俵屋くるまやをよんで、お座敷をつけてくれて、病院の灯を見ておいでと言ってくれたのよ。……私、ここから、あの窓の灯を見て、

お祈りをしていたの」

「おれも、おつ母あに会いたくつて来たんだけれど、どうしても、  
会わしてくれやがらねえ。——よし、菊ちゃん、もう少しそこに  
待つていな、もういちど行つて、何とかしておつ母あにおめえが  
見舞に來たことを話してやるから」

トムはたちまち駈けて行つて、前の小使室をのぞきこんだ。電  
気が消えて、錠がかかっていた。彼は安心したように、病院の横  
へ廻つて、物干場に渡してある、すべての綱と竹たけざお竿とを、こッ  
そり裏の方へ運び出した。そして、二、三本の竿を束ねて、所々  
を綱で結び、それを二階の露ベランダ台へ立てかけた。

外から眺めている豆菊の眼には怖くて見ていられないような、

彼の敏活な行動が始まった。苦もなく二階の露台ベランダへ上ったトムは、その扉を押ししてみたが開かないので、やがて今度は物干綱の先に何やら結びつけて、何度も何度も三階の手欄てすりへそれを抛ほうっていた。そして目的を達すると、ぐんと引いてみて綱へ体をまかせた。

ぶら下がったトム公の体は、時計の振子のように二階と三階の間に大きく揺れていた。彼の両足は高い壁を逆さになって歩き出した。

仙さんが教えてくれた通り、彼の見ておいた三階の五ツめの窓が、たしかに十九号室であった。

「おっ母あ！」

その手欄てすりに掴まりながら、彼は、首をのぼして、硝子窓ガラスのうす暗い明りへ呼びかけた。白い寢床ベッドがトムの眼に映った。

「おつ母あ！」

トムは遂に、手欄てすりを跨いで、ぴつたりと、硝子へ身を寄せた。懸命に、必死に、そして注意ぶかい低い声で、なんども呼び声をくり返した。ガラツと窓が上へ開いた。そして、

「こつちへおはいり」

と、彼は手を取って中へ引き込まれた。

しかしそれは、母ではなかった。黒い背広の上へ雪白の臨床服をまとった医員であった。トム公は吃驚びっくりして跳ね返ろうとする  
と、医員は臨床服のポケットから聴診器にあらぬ捕縄を出してト



ム公の目の前へぶら下げた。

「こらつ、静かにしちよらんと、縛るぞ、縛るぞ。——おまえわしの顔を忘れとるな」

彼は白い上衣うわぎを脱ぎすてて、ばたばたと暴れ廻るトム公を、易々として廊下の外へ抱え出した。それは船渠ドック会社の事務室で見たことのある伊勢佐木警察署の刑事である。柔道何段かのあの刑事だったのである。

よる  
夜の幌ほろ

暗いからたちの外に、豆菊は、いつまでも正直に立っていた。

わツと泣きたそうになるのを忪こらえて待つていた。

「おい、君あここで、何をしとるんだ」

刑事風の男がそばへ寄つて来た。そして彼女の恟おど々おどした眼をじいつと見て、

「おまえは、かんかん虫のトム公の妹じゃないのか」

「え？ ……」

「トム公は捕まつた。もうここへ戻つて来やせんぞ」

豆菊は吃驚びっくりして振向いた。うしろにも、もじりを着た気味の

悪い男が立つていた。

「可愛い雛妓おしやくのくせに、ひとりで物騒じゃないか。抱え主の家まで送つてやろう。さ、帰れ、帰れ」

豆菊はその手を振り払って、桜並木の蔭を夢中で駈け出した。遊行坂ゆぎようざかをころぶように駈け降りた。そして、坂の下で待っていた人力車へ跳びつくと、うしろ向きに蹴込みへ乗って、わツと泣いてしまった。

「どうしたんだい豆菊さん」

俵夫しやふは、茶屋からいつけられたままで、深い理わけは知らないの  
で、彼女に毛布をかけてやるとすぐに轆かじを上げて走り出した。彼  
女の泣けるだけを泣かせて夜露に濡れた俵ほろの幌は、やがて関内の  
色街へ帰った。

巾着切きんちやくきりの黒眼鏡の常は、前の日から馴じみの待合の奥にし  
けこんでいた。自分には此葉このはという好きな若い妓こがあつたけれど、

何となく、雛妓の豆菊もまた好きで、側においても邪魔にはならないので、いつも、来るたびに呼んでいた。

けれども豆菊が、あの愚連隊の仲間にしたトムの妹だということとは、その晩、彼女が帰って来てからの話で初めて知ったのであった。常はトム公が捕まったと聞くと、何時いつぞやのナンキン墓での約束があるので、自分が捕縛あられた以上に、しまった！ と思つた。

カントン 広東服のお光さんに話せば、何とか、応急の策があるにちがいないが、そのお光さんの一定の住所というのを知らない。また、愚連隊の樫井や今村や三浦などの連中の巢もどこだか分らない。

——ただ時計屋の柳田商会へ行けば、或いはお光さんとの連絡が

とれるかとも考えたけれど、自分が掏摸すりだとわかっているのに、  
凶々しく訪ねることも間が悪く思われる。

で——翌日、その柳田商会へ、電話でたずねてみることにした。  
電話口に出たところはたしかにあの狒々ひひ旦那であった。

「……はあ、はあ、お光ですか。お光ならば、こちらへ来るのを  
お待ちになるよりも、明日、根岸の方へ行ってお探しになる方が  
早うございますよ。根岸？ ……え、あの、競馬場です。何でも、  
明日が初日だそうで、あいつめ、屹度きつとそこへ参っているに違いご  
ざいせんから。——しかし、貴方様は？ え？ え？ どなた  
様で」

諄くどく諷きくのを、おかしく思いながら、常は、途中で受話器を切

った。

## 男女のユダ

——その頃まだ横浜はまの子ども達は、親達の伝統的な異端視をうけて、聖書を手にしながら歩いてゆく牧師や、花屋の軒先に立っている黒いバテレン・マントを着た耶蘇やその尼さんを見ると、こんな歌を唄って逃げた。

耶蘇やそ！

ミソ！

てツか味噌ツ。

と。——だが異人さんはそんな時、人のいい笑い顔を何事かと振り向けているだけだった。かえつて日本人である花屋の爺じいさんなどが、おとくいを怒らしてはという懸念けんねんから、

「こいつらツ、清正公様のお堂の蠟燭ろうそくで漬ひなでもかんで、ほツけてえこでも叩いてけツかれ！」

と、花はな桶おけの水を往来へぶち撒まいて叱なぐった。

だからまだカトリックの宣教師たちがいくらクリスマスに贈り物をくれたり、日曜学校を建ててオルガンを奏かなでていても、なかなか親たちも近寄らないし、子供達も人みしりをして馴なつかなか

った。それが相沢のような貧民街ほどそうであった。

今朝も丘の日曜学校ではオルガンの音が洩れている。しかし日曜の祈祷きとつではなく、きようは土曜日のはずである。人の来ない教会では、金を送って貰う本国のカトリック本部への言い訳みにオルガンばかり鳴らしているのだった。

——ところがその神聖な建物をかこむ根岸の松ばやしのある丘には競馬へ押し出す勢ぞろいをする約束だったので、約束の午前十時頃になると、広東服のお光さんの、愚連隊の三浦だの、樫井、西村、今村だのという、みんなユダミたいな人間ばかりが集まって来て、早速、マッチの棒や、ナンキン豆の皮殻からを散らかしはじめた。



しかしきよようの愚連隊たちは、みんな瀟洒しょうしゃな背広服を着こんで、また新しい鳥打帽ハンチングとネクタイと鳴皮の靴まではきこんで、どこの若紳士のお揃いかと思われるような風采だった。——むろんそれはお光さんの手から分配された例の指環のお金のおかげで新調されたものには、違いない。そしてこれからまだ千円ほどある金を資本として、根岸の競馬場の一等観覧席を占めて、馬券のガラ買合資会社コンパニーをやつて一攫いっかく巨万の夢をみている彼等なのである。

「諸君、紳士になったら、南京豆だけはよしたらどう」

お光さんは、両手を腰につがえながら、服装と品行のつりあいがとれない彼等のグループを上から眺めて、

「それはそうと、トムはどうしたんだらうね」

と、気がかりらしく呟いた。

「そうだ、トム公だけが来ない」

と樫井は芝の上から立ち上がった。そして、丘の端へ歩いてゆくお光さんの後について、そこから目の下に眺められる広い<sup>たんど</sup>垣道を、いっしょになって見下ろした。

相沢から根岸の競馬場へとつづいているその道筋には、ほとんど、<sup>あり</sup>蟻の行列のような<sup>おびただ</sup>夥しい人間の流れが動いてゆくのが見える。馬車、パラソル、二人曳きの腕車、その中に高く見える騎馬巡査の帽子、その路傍に押しつぶされかかっている風船売りの風船玉、すべての<sup>けんそう</sup>喧噪と色彩とが一つになって流れている。秋の空の碧<sup>あ</sup>

おあお

々と澄んだ彼方の馬見所のグラウンドの上には、黄いろい埃ほこりの虹が幾すじも立っていた。

「どうしたんだろう？」

お光さんはもういちど呟いた。けれどあのチビなトム公であるから、数万の人間が潮流のように押してゆく所に発見されるわけもなかった。

「あいつだけ知らないのじゃないか、きょう競馬に行くことを」と、樫井は言った。

「そんなことはないわけよ。ナンキン墓の帰りにも相談を聞いていたし、あれから後、私の口からもよく話してあるんだから」

「妙だな、来ると言えばキツと来るトム公なのに」

「だから私も心配なの」

お光さんは、折角もくろんで来た馬券合資会社の出ばなを折られた気がして、こんな日に競馬場へ行っても勝てないに決まっていますと思つた。トムのないないグループなら彼女になんの魅力もない、用もない存在だつた。

帰ろうかしら？

彼女はめずらしく女らしい憂鬱はげに曇つた。しかしほかの連中は、競馬場の上の埃を見るだけでも気が逸はつて、トム公の見えないことは伴奏者の来ない寂せきりよう寥ようにはちがいがなかつたが、きよ望に何らの支障とは思わないのである。

「もう十一時だ」

ひとりが、つまらなそうに言った。

「お光さん行こうぜ！」

花火が空に炸裂する、遠くの音楽隊の吹奏がながれてくる。観衆はグラウンドにつめ込んだ。——お光さんもまたきょうの合資会社の社長として否応なく連中に取りかこまれつつ競馬場の入口に立った。

「君、入場券をお買いよ。ええ、七枚」

今村に紙幣を渡している時である。さつきから人に押されながら立っていた巾着切の黒眼鏡が、すぐに彼女のすがたを見出して、

「あ。お光君じゃありませんか」

と寄つて来た。

## ゆすり

「オヤ、君はこの間の……」

「え、高橋八寿雄やすおですよ」

と、巾着切は中折帽をとつて、左の手の甲で汗ばんだ額を抑えた。

「ずいぶん尋ねましたよ、一度場内なかへはいつてみたのですが、来ていないので、切符をムダにしていた外へ出て見張っていたんです」

「よく知っていましたね、私たちがここへ来るのを」

「柳田商会で訊いたら、多分、きょうから競馬の方だろうと言うので」

「お狒ひひ々さんも察しがいいわネ。しかし、君はどうしてここへ来たの？　そしてそんなに私たちを探したの？　君も競馬が好きで私たちの合資会社コンパニーへでも入れてくれと言うの？」

「いや、あつしやあ、競馬なんざあ嫌えです。競馬へ来ることはあるけれど、馬を見たことはありません」

「なるほど、それよりは、むしろ馬に気をとられている人間のポケットの方に目をつけますか」

「もちろんです……」黒眼鏡は笑って、

「職業意識はどんな所へ行つたつて働かずにやいねえんで」

「私たちのだけは許して欲しいわネ」

「まさか。——あはははは大丈夫ですよ。あ、話が外れちまつたが、おとといの晩トム公の体に異状があつたのをござんじですかえ」

「異状つて？」

「とうとう、食らいこんだんです」

「えっ、捕まつたの」

「それを皆さんに報しらせたいと思って、おとといの晩からずいぶん泡を食ツちまつたつてわけです」

と黒眼鏡は豆菊から聞いたとおりのことを、そこで早口に、雑



沓の中で話し出した。——競馬場の中では初日ゲームの第一戦を報ずる爆音が揚がった。観覧席からは騎手の名をさけぶファンの絶叫が嵐のように起っている。それを、思いがけない蹉跌さてつで聞きながしている愚連隊たちは、いかにも髀肉ひにくを嘆たんじるように振り顧かえつて、

「なあに、トム公のことだもの、捕まったつて、二十日鼠はつかねずみじやないが、すぐに脱ぬけ出して来るさ」

と、なるべく簡単に、はやく、片づけたがった。

「でも、検事局へやられたら、もう手遅れですからな」

「未成年者だから、あそこまでへはやられまい。警察からすぐに少年審判所送りになって、八丈島の感化院へやられるのさ。——

鳥も通わぬ八丈島のね」

とお光さんが言った。お光さんはいつもに似あわない憂鬱で、言うことまでが感傷的であつた。

それを打消すように、今村や檜井たちは、

「大丈夫、大丈夫、トム公はきつと独りで逃げて来るよ」と、言つた。

「いいえ」

お光さんは争つた。

「こんどはそうは行くまいよ、警察でも要心をしているからね。

それに、私たちが義憤して起つたのも、いわばトム公が中心じゃないか。そのトムが捕まってどうなるかわからないというのに競

馬場へ来ていちや私は気がすまない。諸君はどう思うこと？」

「どうつて？」

「この競馬場へはいるつもり？ それとも、これから引つ返してトムを奪取するつもりなの？」

「だからその点ならば、彼奴が自発的に逃げ出して来ると思いうんです」

「だって、もし逃げられなかったら？」

「それや、やむを得ないことになる」

「とすれば、プリンスを見殺しにするツてもんじやないこと。私は行くわよ、諸君——」

お光さんとしては稀まれに見るヒステリカルな投げ言葉である。み

んなへ、そう言つて、くるりつと、南京靴の踵かかとを廻して二、三步  
はず弾みかけると、そこへ、時間に遅れたので急いで来たのであろう、  
わだち轍わだちを躍らして切符売場の前へ駈かけつけて来た二頭立ての馬車があ  
 つた。

「あぶない」

と馭ぎよ者しやは、馭者台の上から、お光さんへ呶どな鳴なつた。

その叱り飛ばしかたが、刑吏の罪人へのぞむような声だったの  
 で、愚連隊の連中は、きつとお光さんがまた例の手をやると思つ  
 ていると、案の如く、お光さんは、きりりつと馭者の顔を見上げ  
 て、奔馬のまえに屈みこんでしまった。——そして轆ひかれもしな  
 いのに片足を抑えて、

「痛い、痛い……」

と顔をしかめた。馬は止まった。奔馬のまえに屈みこむ美人を轢き殺してゆくほど勇氣のある馭者はかつてなかった。術もなく、お光さんの甘い策にかかるのだった。

お光さんにはこういう叛逆的な性格が多分にあつて、ことにそれが、二頭立ての馬車や一等列車に納まり返っている上流の人間に向つて強いのである。貴顕豪商というと彼女は生れぬまえからの仇敵きゆうてきのように反抗したくなるのである。——奔馬の前の危険な強請ゆすりも、稀 《たまたま》興味的にやりたくなる衝動の発作ほつきなのであつた。

壮俳そうはい

けれど、馭ぎよ者は驚おどいた、悪いた戯ずらとは思おもわない。

「だ、だから、言いわないここツつちちややない！」

と蒼あざくななつて馭ぎよ者しや台たいから飛とび降くだりると、屈かみみここんんでいる彼女かのじよの  
そばへ寄よつて、

「どこです？ 怪け我がは、怪け我がは」

と、ああわわて声こゑでたたずずねた。

「足を折おつたのよ」

彼女かのじよは言いつた。

「折おつた？」

「え、右の脚を折ったから起きてないわ、どうしてくださるの」

「大げさなことを言うな、脚を折ったものがそんな真似をしていられるか。ふてえ女だ、強請ゆすりだな、てめえは」

「君！ わたしをゆすりだと言ったわネ」

この、君！ にたいがいな馭者は毒ツ気を抜かれるし、またそのうちには人だかりがするので、車上の者が紳商貴顕のたぐいである場合には、必ず馭者を呼んで、金貨か紙幣をそつと握らせて囁ささやくに決まっている。

いつもの例である——とお光さんの折れもしない脚に、相手が薬でもない金貨をそつと塗りつけようとすると、俄然がぜんと起つて、その金貨か紙幣かを投げ返して、車上の貴紳を罵倒ばとうして去るのを

遊びとするのであったが、きよの馬車からはいつまでも反応がなかった。

馭者は、彼女の悪戯いたずらと知って、かんかんに怒る。

彼女は応酬おうしゅうする。

愚連隊たちは面白がって成行きを見ていた。

そのうちに、後から後から競馬場へ来る二人曳きの腕車や馬車がれきろくとしてつづき、そしてたちまち、停滞車に道を塞ふさがれて百足虫むかでのように止まった。——お光さんは平然としてうごかない。折れたと称する脚をかかえて、屈みこんだまま地上を離れない。

「おい、どうしたんだッ、前の馬車は」



競馬の日は、人々の気が立っていた。

「やい、わきへ寄せろ」

「ぼろ馬車」

「轢き殺すぞ」と、後ろの方でごうごうと喧しい。

かかりあいになった馭者は、甚だしく狼狽していたが、お光さんはあたりが殺氣立つほど冷然として、

「君はわたしを強請ゆすりだと言ったわね、強請であるかないか、また、わたしのからだに怪我があつたかないか、念のために、裸にして調べてくださいよ！ え！ 調べてもらいたいわ。——君、わたしを裸にして公衆の立会をうけて調べて頂戴、そのかわりに……」

翡翠ひすいの雫しずくの滴たっている耳じ朶だを桃ももいろにして、睨ねめつけるのだつ

た。

「もし、わたしの玉のような体に、少しでも怪我があつたらきかないよ。わたしもハンケチ女の紫組のお光さんだからね」

こう言われて尻尾を巻かない馭者があればもぐりである。果たして、彼女をさんざ罵倒した馭者は蒼くなつて謝罪した。けれどお光さんはきかなかつた。

「いやよ！ さ、裸にして調べて頂戴、君も男じゃないこと」

すると、群衆の中に交じつて、それとなく弥次つていた愚連隊の中から、神学生の今村がつかつかとそこへ出て来て、しかつめ鹿爪らしく仲裁した。彼女は今村と何か目交せめくばをして、

「じゃ、君にまかせるわ。——そのかわり晩までにごあいさつが

ないと、わたし、どんなことをするか分らなくってよ」

と、幌ほろの中へことばを投げて、お光さんは恥しげもなく、折れたはずの脚をもつて軽快に歩き去った。

馬車は揺るぎ出した。それとほとんど一斉に切符売場は殺到する客で混乱しだした。——神学生の今村は、そのまま救つてやつた馭車台に跳びついて、

「少しの間待っていたまえ——何、じきにすくよ、また今みたいな女愚連隊に引ツかかるとつまらんからね」

と、馭者に話しかけながら、眼は、幌ほろの中へ媚こびるように振りかえった。——その幌にくるまれた牡丹ぼたんいろ色のビロウドのクツシヨンには盛装した石炭屋の夫人高瀬マダム槇子と、姪めいの奈都子とが、ほ

ツと、蒼白い顫おのきから救われた顔をしていたのである。そしてむろん、神学生の今村に対して、ふたりの眼は、感謝に盈みちあふれていた。

「……奥さん、何でしたら、僕が、切符を買ってさし上げましょうか。どうせ僕も買わなければならんですから」

今村は言った。

槇子は、幌の奥から、

「ありがとうございます。切符は、私たち主人が馬を持っているのでレース倶楽部の会員券がありますから……」

「あ、馬をお持ちですか」

「はい、クンプウというサラブレッド種の黒鹿く毛ろを」

「クンプウ？　へえ、あれはおたくの持ち馬ですか、すばらしいよよびうまびうま  
人気馬ですな」

「さほどでもございませんけれど。……あの只今のお礼と言つては失礼ですが、今日は主人が参りませんから、まだ入場券をお買いにならないのならば私たちといっしよに、会員券でおはいりなさいましな」

「そりや大助かりです、どうぞ」

と、今村は馭者台の端から下りて、従者のように、彼女たちを馬車の扉ドアから迎えた。

——遠い人混みの中で、結果をみていたお光さんや黒眼鏡や櫛井たちは、くすりと、笑いをしのばせながら、

「今村のやつ、まるで、川上音二郎の下もとにいる桜井何とかいう壮そ俳うはいにそっくりだなあ。……どうだい、あの臭くさいしぐさは」  
 と競馬場の中へ消えたうしろ姿まで見送っていた。  
 そしてお光さんは、何かささやくと、みんなと別れて、ひとり、二人曳きの帰り俵を飛ばして、どこかへ急いで行った。

## 野菜屑

「あ、ここよ。ここでいいのよ」

お光さんは俵の上で腰を浮かした。

競馬の前から乗ったお客様ではあり、スマートな広カントン東服や腕

環などから見ても、俵夫しやふは、いずれこの俵は祝儀の出る門口へつくだろうと予測していたのに、羽衣町の裏通りのきたない縄のれんの軒先で止められたので梶棒かじぼうを迷わせた。

「へ？　こちらですか」

「そうよ」

膝ケツトの毛布をけこみへ捨てて、お光さんは軽く俵を捨てた。石田屋という差入れ弁当屋だった。暗い店の腰かけにも四、五人の男たちが、めしを食べていた。

「おばさん。——オヤ相かわらず働いているのね」

彼女は土間を通つて、野菜屑やさいくずですべりそうな煮物場へはいつた。便所、帳場、流し元、すべての機関部となっている畳四枚と

二坪ほどの土間に、秋あきばえ蠅が充満していた。

「なんだ、お光さんか」

いわゆる後家の気丈者らしいここの内儀おかみさんは、かぞえかけていた一円紙幣さつの束をもういちど読み直して、

「おまえさんも相変らずよく遊んで歩いているね」と、言った。

「だつておばさん、何をするのも、若いうちだもの」

「そうかね」

「おばさんみたいに、お巡査まわりさんや刑事さんの月給から小利息を絞しぼったり、輪切りにするお大根を三角に切つて何厘ちがうか考えてみたり、そうして一円紙幣さつの裏打をしては、銀行へ運んでみたつてつまらないじゃないの」



「そうかね……」と、処世の哲学をしつかり持ってしまつて、な  
りにも振りにもかまわない内儀さんは、てんからお光さんのたわ  
言などは、うわの空で聞いているらしい。

「松どん、松どん」と帳場の下からコークスにかかっている鍋を  
気にして、

「焦こげくさいよ。それから、庄吉は警察の後註文を持って行つた  
かい。七つだよ、ああ、留置場の方はみんな行つてるとき」

「おばさん、その留置場へ、ゆうべ、かんかん虫のトムがはいつ  
て来ない？」

「トム？ 知らないね。だれか知つてるかえ、伊勢佐木署へそん  
な男が抛りこまれていたかないか」

「お光さん、トム公つてな、子供でしよう。まだこんな小ツこいと煮方の松どんが、煮を待ちながら背丈せいの寸法を示して、

「そいつなら、ゆうべも今朝も、さんざん刑事部屋でなぐられていたツて、庄吉が話してましたぜ」

「じゃ、たしかに、捕まつて来たのだね」

「なあに、今朝はもう、西戸部の少年懲治監ちようじかんの方へ廻されましたよ。子供は二晩以上は留置場に置かねえことになっていきますから」

「おや旦那。……いらつしやいまし」

ふいに、内儀さんが座蒲団を向けたので、お光さんはうしろを振り向いてみた。そしてすぐに、自分の肩に寄つて、ぬうつと立

つている男に刑事らしいにおいを感じた。刑事の眸ひとみは眼の皮の左の隅に寄つて、見ぬふりをしながらお光さんの耳たぶをじつと見ていた。

こういう人たちにありがちな尊そんごう傲ごうな、それも至つて安つぽい官僚ぶりを鼻にかけながら、座蒲団の上に大きな臀部でんぶをぶえんりよに乗せて、

「おかみ、この別嬪べっぴんは」

と鼻で、お光さんを指したものである。

「わたし？」と、お光さんは先に答えた。

「ゆうべ、おたくでごやつかいになった、トム公の同類どうるいのお光というもんですわ。——むらさき組のお光さん。え、わたしのこ

と。君！　まだ新米らしいわね」

顔ばかり見つめてしまつて、うもすも言うのを忘れている刑事をうしろに置いて、お光さんは、家の中を素通りすると、とんぼのように裏通りの秋晴れへ出て行つた。

## 赤い舌

トム公は、ゆうべも今朝も、伊勢佐木警察署の刑事部屋で、刑事たちに、さんざん撲られたり蹴られたりした。けれどやがて九時ごろ、西戸部の少年懲治監<sup>ちようじかん</sup>へ廻されて来てから、急に、故郷へ歸つて来たように、愉快になれた。

ここは監獄ではない。そうかといって、学校や家庭のようでもなかった。高い黒塀は一丈もあるし、陽当りのわるい部屋には一つ一つ錠がかかるようになっていいる。昔は——明治四、五年ごろには、戸部の西洋牢と言つて、ふつうの罪人を収容した遺蹟だそうであるが、今では畳を敷いて、遊戯場には一個のピアノを置き、まげき曲木細工の椅子が四つほどもあつて、英国社会教育家のなにかしという老外人が、不良児の感化事業を試みている、いわゆる少年懲治監なのである。

不良児たちの間では、ここへ三度来ると、八丈島の感化院へ送られて一生涯帰れないということが信じられ、恐れられていた。——トム公はこんどで三度目だった。そして高い塀の下に咲いて

いるコスモスまでが故郷の花のごとくなつかしい。

「トムが来た」

「プリンスが来た」

懲治監の不良児たちはおそろしく敏感でまた早耳だった。その無電的な囁きはたちまち伝わって一丈もある黒塀の囲いの中を明るくした。各個の監禁室にいる不良児たちは、バンザイのかわりに、指笛をふいて、監視に叱りつけられた。

「何を騒ぐ、おまえたちは」

監視人には、まさか入監者のトム公を歓迎するそれが彼等の礼式だったとは知らなかった。ただいつものように、

「また晩飯を減らへされたいのか！ 麻つなぎをやらせるぞ！」

と、ただ脅かすべく、各室を事務的に吠鳴りあるいた。

トムは、十四番の監室へはいった。ここには十三歳以上十六歳未満の少年漂泊者ルンペンや小悪漢ばかりが六人いた。トムがはいつて七人になった。ひとり一畳ずつにすると、ちようど畳が二枚余る真四角な箱のごとき部屋だった。

「やあ、おめえたちは、まだいたのか」

トムの知っているのがその中に四人いた。一番のツぽの徴兵検査ぐらいに見える少年は涙はなをたらしていた。

「トム、また捕まったのか。こんどはおめえ八丈島へ行くんだぜ」

「アア行くよ、八丈島へ行ってみてえや」

「あそこへ行くと、一生帰れねえんだぜ」

「嘘だい」

トムは彼らよりは高い知識で、少年感化院の性質を説明しかけた。

「こらツ、しゃべつちやいかん」

監視人のスリツパの音はたえず廊下を往復していた。彼らの心境とは最も遠い音であつた。

「チイツ、くそ。……おびんずるめ」

と、七枚の赤い舌は、はまぐり蛤のようにチュツと啼いて、感化事業家のあしおと登音を軽蔑した。

## 消燈天国



薄暮になると戸部の西洋牢時代を偲しのばせる遺物の鐘が、黒い塀の中で六時を鳴った。

「チャブだ！ チャブだ！」

と、監内の不良児たちはざわめくのだった。

「食事」

と、冷たい声を投げながら、監視は、各室の錠をひらいて、五名、或いは七名、或いは十名ずつの食慾そのものに柔順な不良児たちを引率して、ひろい板場の食卓にあつまった。

薪たきぎの煤すすで真まツつくろくろに燻くすぶっている天井から、笠の焦こげげているのや、ホヤこうやくばに膏藥貼りのしてあるランプが、卓の上に添そううて七、八個

ほど吊りさげてある。真摯しんしな感化事業家をもつて生涯をゆだねているような老外人の夫妻は卓頭に立つて黙もく禱とうをする。不良児たちもその間だけは、しおらしく口のうちに祈き禱とうのことはを呟つぶいている振ふりをするのだった。

老外人の夫妻は、彼らと同じように、割麦の大部分な日本米を食べ、鯨油げいゆをたらしたまずい野菜汁をすすり、沢庵漬たくあんづけをも噛んだ。しかし不良児たちは、監長のそういう行いに何らの感激をもうけた例ためしはない。

彼らはこの食事室の会合によつて胃ぶくろを満たしながら、その箸の先と、眼と眼とのうごきかたで、意中にあるすべてのことを仲間の者と語りつくした。——たとえば、きようは吾らのトム

公が入監はいつて来て大いに愉快だということも、また、こん夜、誰よなかか夜半に事務室へしのびこんで巻煙草を各室へ一本ずつ配分する英雄はないかという信号も、また、K監視はすこしこのごろ生意気だから何かで失策しくじらせてやろうじゃないかという計画も——敢えてことばを要せずに通じるのである。

トム公もその声なきことばで一同へ入監のあいさつをした。トムを知る者も知らないものも先輩の彼氏かれへ対して汗しるわん腕を上げて敬意を表した。それからそろそろと監房へ分れて帰ると、二時間の作業である。一時間の修身である。なんと胃ぶくろに反比例して詰めこませることか。

「消燈——」

監視のこの声こそは彼らの黎明だ。絶えず彼らの聴神経にながってる、いやな監視人のスリツパの音は朝まで遠く消え去る。そして彼らは自己になる、腕も、足も、眼も、ことばも、自己のものとして自由なる使用をゆるされる。長い一つの枕とうすべつたい蒲団の中に、伸びの伸びと寝ころがった彼らの枕元に、やがて天国が降りてくる。

突いたり、抓つねったり、女のまねをして抱きついたり、さんざんふざけているうちに誰からともなくいびき軒をかいてぐつすり寝こんでしまう。——ただトム公だけは、ほかの六人の寝息を羨ましい気もちで聞いていた。

彼はそつと起き出した。ゆうべから予定していた行動にかかる

のであつて、極めて落着いたものであつた。どこへかくしていたのか、小さな捻釘廻しねじを硝子戸ガラスの鉸びようへあてた。くるくると廻すと鉸はすぐに足元へこぼれる。二本、三本……そうして一枚の硝子戸はずを外すことは三十秒の作業であつた。

が、トムは六人の寝顔を見て考えた。自分が無断で逃げれば、共犯の疑いをかけられて、あしたから減飯の懲戒をくうことは勿論であるし、彼ら自身も、また、取り残された寂せきりよう寥れうから自分をうらむに違いない。

彼は考え直した。——そしてみんなを揺り起した。

「火事かい？」

と、寝呆けているのがある。

「どうしたんだい、トム君」

と一同は眼をこすった。

「おれはね」——とトム公は言った。「ここに長くはいられねえのさ。だから逃げようと思ったけれど、みんなに黙って行ツちや悪いからお別れを告げて行くよ」

六人の不良児たちは困った顔をした。それは実に困り入ったよ  
うな顔つきだった。

「だけれど、心配しないでくんな。おら、用がすめば帰ってくるよ。ここへ帰ってくるよ。みんなの好きな土産をうんと担いで——

——

「何日？」

「二週間」

「二週間経ったら帰って来るのか」

「うん、きつと帰って来る」

彼らはトム公のことばに嘘のないことを信じた。硝子戸ガラスを外はずすことを手伝ったり、また時々、扉ドアに耳をつけてみる注意を怠らなかつた。

## 騎手

「じゃ、後はまた、これで鋷びょうを締めねておいてくんない」

と、トムは窓の外へ出て、捻釘ねじ廻しを彼らに預けた。

「あしたになったら、どこから逃げたんだろうと思って、驚くだ  
ろうな監視が」

「じゃ、あばよ」

「土産をたのむよ」

硝子ガラスを外した窓の一劃から、交かわりばんこに手をのばして握り合  
った。

トムは走って、闇の突き当りへ立った。しかし一丈あまりも高  
い塀だったので、足がかりがなければ越えられないのが分った。

彼の脱ぬけ出した穴から、六名の不良児たちはほんぽんと外へ跳  
び降りた。そして塀の根にあつまると、一人が手をつけて台にな  
る、また一人がその上に重なる、また一人がその上に段をつくる、



そして人間の梯子はしごを作つて、トムを塀のみねへ送り上げた。

「諸君、健康でいろよ」

「土産をたのむぜ」

「オーライ、何？」

「あんぱん」

「煙草」

「ナイフ」

「ピストル」

梯子の下から順々に注文した。

トムは外へぽんと降りた。かくべつ新しい世界でもなかった。

ことに十二時近いので戸部の町は寝しずまっていた。彼は杉山神

社のお堂へ行つて寝ることにきめた。貧しい町にかこまれた松の丘には、貧弱なベンチとブランコがあつた。

その晩、拝殿の裏に寝ころんでから間もなく、彼はすぐ下のベンチに不思議な動物を見てしまった。うとうととしかけると、どこから来たのか二個の動物が、夜更けのベンチに憩いこつて、手も足も顔もどこにあるのか分らないようになって、いつまでも動かずにあるのだった。……トム公はこの時ほどふしぎな感うに衝たれたことはない。彼はまじまじと闇を見つめて寝られなかつた。

やがてそれが人間であること、男女のふたりであつたことが分つてからよけいに胸がときめいた。二人はベンチを離れると、すぐに他人のようになってべつべつに別れて行つた。

彼は、ぼんやりとお光さんの唇を思いうかべた。——そして朝、眼がさめてまでゆうべの悪夢が後頭部にこびりついて彼の軽快を削そいだ。

陽がたかくなると、全市の空に、根岸競馬の花火が晴々しい爆音をひろげた。町の人々はすべて競馬場へ向っているようにトムには見えた。

ポケットの百円紙幣さつも海軍ナイフも、きのう伊勢佐木署から少年懲治監に送られるまえに刑事に取り上げを食っていたので、彼の淋しく探る指先には、何もふれるものがなかった。それでも競馬場にさえゆけば、お光さんか誰かが来ているにちがいないという希望が、わずかに彼の気もちを幾分か躍らせていた。

「トム、トム公じゃないか」

彼は刑事の声と聞きちがえた。ビクリとした眼は秋の空の下にはちきれそうな健康さをもつて笑っている男の眼と出会った。彼は、数百円もしそうな漆黒しっこくのサラブレッド種くらの鞍くらにぎゅつと乗りこんでいた。その毛の艶つや、乗馬靴の艶、鞭の艶、トム公は惚ほれ惚ほれと見入ってしまった。——それは競馬界で島崎とよばれている売出しの騎手ジョッキだった。

内外人の女たちにもてて、体がいくつあつても足りないほど騒がれているというこの根岸の花形騎手も、つい数年前まではメリケン波止場で砂糖馬車組合の幌荷馬車に鞭を打っていた労働者だったのである。——しかし島崎は自己の才分を生かしていつか惻り

巧こうに波止場ゴロなどとの縁を切つて、今では山の手到庭園ガーデン付きの宏壯な邸宅や厩きゆうしや舎をもつて、取り澄ましている。しかし、なかなか昔のゴロ仲間の方からは縁を切らさないので、人気商売として、かなりその操縦には腐心が要いつた。また、トムは彼をそうまでよく知らなかったが、彼の方ではトムをよく知っている様子だった。

「トム、おまえ逃げて来たな」

トムは笑つて答えなかった。

「探していたぞ、お光さんが」

「お光さんはどこにいるでしょうか」

「ゆうべ僕の厩舎へちよつと見えたが、さあ、きょうは競馬にい

るかどうだか。何しろ、おまえのことで狂奔していたからな」

「何しに行ったんだろう？ お宅へ」

「それは話せない」

と島崎は意味ありげに笑った。

ルーレット  
回転盤

「おまえもお光さんを探しているんだろう」

「お光さんに会わなければ、困ることがあるんだもの」

「競馬場へ行つて見るさ」

「だけど、入場券がないもの」

「厩舎へ行つて貰つて来い。……あ、だが、おまえは未丁年者だからだめだ」

「馬券を買わなければいいでしょう」

「駄目駄目、観客としてもはいる資格がない。馬丁べっとうに連れて行つてもらえよ。厩舎うまやの通用門からはいるんだ」

「名刺をください」

「辰公に言えばわかる」

トムは駈け出して島崎の家へ行つた。馬丁べっとうの辰公と彼とはな  
お懇意だった。辰公の好意で彼はズボンと上衣うわぎと、そしてやや大  
きすぎるけれど赤革の編上靴まで借りることができた。

根岸の場内へ行つてみると、きよようの最興味である特別のハン

デキヤップ競走が内外人の人気を煽<sup>あお</sup>つて、一等観覧席からひろい柵のまわりに至るまで人間をもつて埋まっていた。午前<sup>ゴ</sup>に居留地のある外人の持ち馬であるアメリカン・トロツターが大穴を出したというので、フアンの眼は血走っていた。

ここの競馬場の歴史は古い。まだ大小の刀をさした丁<sup>ちよんまげ</sup> 鬚<sup>ひげ</sup> 日

本人たちが、維新の革命に血みどろになつて騒いでいた慶応年間に幕府から敷地を請求して、そのころからもうぼつぼつ外人間だけでやっていた最古の競馬場であるのだ。それだけに、ここの競馬倶楽部は国際的なスポーツ熱と上海式な賭博本能をあおる組織にできていた。いわゆる巨万の一攫を夢みることもできるし仲<sup>コンパ</sup>間<sup>ニ</sup>買<sup>イ</sup>もやれるし合<sup>べい</sup>八<sup>はち</sup>もできるし、飽くまで自由なガラ式なの



である。

人気馬には巨万の値がついた。種のいいサラブ、或いは英国ダービー馬の仔など、何万円というのが珍らしくなかつた。二千三千の賞金などは垂涎すいぜんにも価しなかつた。騎手の生活は社会のどんな者より華やかで、また多すぎる艶福えんぷくに神経衰弱になるほどだつた。その中でも人気者の島崎にことばをかけられて、はいつたトム公は、非常に肩身のひろい気がした。

視野のかぎり平面なきれいに刈りこんだ芝生を眸にするだけでも、トムはすばらしい爽快さにすぐ衝うたれた。その芝生のいろの中に、男性的な駿馬しゅんめと騎手とが個々に持つ、ユニホームの赤、紫、白、青などの洋画的な色彩がすぐ眼の中にとびこんで来る。

トムは、いつのまにか、貴族的な匂いと色との人中に埋っている、一等観覧席のあいだにもぐりこんでいたが、お光さんの姿を見つけるよりも、まずその方に気を奪<sup>と</sup>られてしまった。無数の眼、金ぶちの眼鏡、望遠鏡、そして息づまりそうな沈黙をもった顔とが、すべて同じ角度に向いていた。

やがて、騎手たちはスタートを切った。弦<sup>つる</sup>を離れて行つた七色の点が星のように馬場を駈け出した。——巨きな賭博の回<sup>ルーレット</sup>転盤<sup>ト</sup>が旋<sup>まわ</sup>り出したのだ。

観衆はみんな常に装<sup>よそお</sup>うている第二自己を抛り出してしまつて、まつ裸の自己になつた。拳を振る。怒号する、飛び上がる。

そして口々に、自分の買馬を呼んだ。或いは惚れている騎手の

名を金かなきり声でさげんだ。

「島崎！ 島崎！」

そういう女の声がついにトムの耳をついた。トムはそれによって初めて今スタートを切ったハンデキャップ競走に島崎も交じっているのを発見した。島崎のユニホームは白地に紫の筋だった。

「紫！ 紫！」

トムもつり込まれて叫び出した。

二周目の半ばごろで島崎の馬は危うかった。わずかな距離の差であるが、紅白それから紫が見えた。

「紫！」

「島崎ッ」と前の女も、見栄みえを忘れて叫んでいた。

「勝て」

「島崎」

「紫——ツ」

とたんに、トムは観覧席の段を踏み外して、前の人々の脚の林立へと転げこんで行った。しかし誰一人、それを顧みている者はいなかった。

「いやよ、いやよ、この人は」

ただ彼と共に、島崎の名を叫んでいた女だけが絹靴下につつまれた細い脚をふりうごかして眉をひそめた。トムは気がついて、恥かしそうに、女の脚から手を離れた。

そして彼が腰をさすって起き上がった時には、競馬場は発狂し

たような群衆の乱舞と絶叫とにくるまれて、濛々もうもうとほこりの煙幕がかかっていた。トムには、誰が勝ったかわからなかった。

「やっぱり、われらの島崎よ！」

「さ、あんた！」

「伯父さん」

と、あわただしく眼の前から駈け去ってゆく男女の横顔をながめて、

「あつ」

と、人蔭へからだを避けた。

それは石炭屋の高瀬理平と夫人マダムのお禎だった。なおトムにとつ

て、ふしぎでならないのは愚連隊の今村が高瀬の姪めいの奈都子と肩

をならべて、やはり、あわただしく、高瀬夫妻の後について駈けて行つたことだつた。

ほこりにじ  
埃の虹

「おや?」

トム公は眼を皿にして、仲間の一人である今村の姿を見送つた。どうして、札つきの愚連隊の闘士が、あんな、けばけばしい、しかも俺たちの敵としてゐる高瀬の家族なんかと、睦<sup>むつま</sup>じげに肩をならべて競馬場を歩いてゐるのだろうか。

その側に添つてゆく夫人<sup>マダム</sup>のお楨は、今観覧席で足をつかまれた

時に気づいたとみえて、時折トムの方をふり顧りながら、

「いやな奴！ あの、いつかのチビが、後から尾いて来ることよ」と、姪の奈都子にささやいているらしかった。

そして、既成品屋の店頭人形のように反つくり返つて歩く良人の高瀬理平をせきたてて厩舎の方へいそいだ。

ちいッ、とトムは舌うちをして、彼等の後塵に尾いてゆくことをやめた。そして、彼もまた、その日は瀟洒であつた赤革靴のきびすを回すと、やや低いスロープを作っている芝生の窪みに、お光さんがいた。さつきから探しあぐねていた彼女が、白い手をかざして、自分を呼んでいる！

そこに、お光さんと共にいた黒眼鏡も、櫛井も西村も三浦も、

みなトム公よりは早く高瀬の家族たちを見つけていたらしく、彼がそこへ駈け寄つても、多くのことばをかけなかつた。そして厩舎の方へと、なだれ押しに集まつてゆく紳士淑女群の中にある高瀬理平と、そして奈都子と今村と、夫人のお槇とに、等しく探奇的な注視をそこから送り合つていた。

で、トム公も、低い背丈をのばして、お光さんの側から彼方あなたの埃っぽい中に騒然としている貴族色の集団を浅ましいもののように眺めることにした。

人々は、厩舎うまやに曳きこまれた勝馬いたわを宥りにゆくのでもなく、敗者の騎手を慰めに行くのでもなかつた。競馬場は飽くまでも、勝者の独壇場でありかがや燦く者のためにある広場だった。



最終のハンデキャップ競走が終ると共に、ファンたちは、いつせいに、人気騎手の島崎を取り巻いた。銀の優勝カップを取り落すまいとして、高く空に右手めをあげている島崎を目がけて、女、男、白色、黄色、あらゆる人種と階級のファンたちが、彼の握手を争奪した。わけてもその中に、中年の婦人たちが甚だしく勇敢であつた。

その中に、高瀬の家族たちも、押し揉まれていた。

島崎は、チラと、その人たちを群衆の中に見かけると、巧みに、ファンの群を逃げて、短い時間に、理平や奈都子たちとことばをか交わした。神学生の今村は、夫人に紹介されて学生らしい初心うぶさをつつみながら、島崎と握手を交わした。

「ね、いらつしやいよ」

理平が知人に肩をたたかれて、後ろを向いている瞬間に、お槇は、ついと、島崎のそばへ寄つてささやいた。

「いらつしやいな！　ね！」

「どちらへですか」

「本<sup>ほん</sup>牧<sup>もく</sup>へよ」

「どうも、今夜は」

「それや、ひく手は多いでしょうけれどさ、ひどいわ！　何<sup>い</sup>日<sup>っ</sup>か

の、あれツ<sup>き</sup>限りでは！」

「おいおい」

理平は振り向いて言った。

「今な、そこで十番館のダグラスさんと会ったから、一緒に馬車へ乗って、先へ行くから」

「あなたは、どちらへですか」

「どちらへって、今夜は、本牧の方へ、船のお客を呼ぶ晩じゃないか」

「じゃ、そこへ、島崎さんをお連れして行ってもいいでしょうね」

「うん……。だが、来るかね」

「嫌だと言っても、連れてゆきますわ」

「よかろう」

マダム夫人のお槓は、そういう間にも、ともすると見失いそうになる

島崎の顔を、眼から離さないで、会話が終るとすぐに、彼のそば

へ戻つて来た。

そして、彼の耳へ背のびをして、

「いいこと。事務所の門の方へ、馬車を廻して置いてよ」

と、言いながら、手袋をぬいで、島崎の指先をつよく握りしめた。そして、もういちど、

「いいこと。分つて、——ばら薔薇色の馬車よ、薔薇色の」

と、念を押した。黄金色の埃の虹を立たして、根岸の競馬場に陽が沈みかけた。はるばると、東京から来て東京へ帰る俳優の羽左衛門だの、洗い髪のかながしだの、仇っぽい名や、いかめしい著名の名士たちが、つかれて帰る群衆の眼に拾われながら、そこが暗くなるまで、人の崩れがやまないのである。

ひとりの従者を連れて、島崎は、合着のオーヴァの襟を立てて、事務所の門からこつそりと外へ出て来た。

鼻<sup>ひいき</sup>の騎手を攫<sup>さら</sup>つてゆこうとする貴婦人たちの旨をうけた俵や、幾台もの馬車が、まだ根気よくそこに網を張っていた。島崎は、それらの蜘蛛の眼みたいな誘惑線を巧みに避けて、柵<sup>しがらみ</sup>のそばにびつたりと箱を寄せている小型な薔薇色の馬車を見かけて、

「お、これだね」

「はい」

と、馭者は心得ていた。

「はやくやってくれ」

島崎は、従者と一緒に、逃げこむように、扉<sup>ドア</sup>をあけて中に飛び

こんだ。——と中のクッションにからだを埋めていた女が、

「ま。遅いのね」

と、手を取って引き入れた。

それは千歳ちとせの女将おかみだった。

「あ。違った」

と、島崎は狼狽して出ようとした。しかし、馬車はもう勢いよく走り出しているのみならず、女将は、調子のたかい笑い声を疾走する窓から撒まきながら、こう言うのだった。

「人違い？ ほほほほ。島崎さん、いつかの機おり会には、私を、月む下氷人すぶのかみだと言ったくせに、今夜は、人違いなの。——だけど、

ご心配はいらないことよ、お約束の人は、今横から出て来ますか

ら。あれ、もう後から尾いて来る！ 同じ薔薇色の馬車ですの。  
あれには、皆さんが乗っていらつしやいます。——え、私？ 私  
はお料理屋ちややの女将おかみですもの、あなたを横奪りなんてとんでもない。  
ただ、本牧のお別荘に着くまでの途中、人目につくといけないと  
いうんで、こうして、飾り物になって、おつきあいしているに過  
ぎませんのさ」

「なるほど！」

島崎はすぐ落着いた。

馬車の中からうしろを覗くと、色ガラスのライトを点けた同じ  
型の馬車が、楽しい夕べをれきろくと奏でるように、すぐ後から  
つづいて来る。

その中には、夫人の姿も見え、奈都子と今村の顔も見えた。——そして前にゆく島崎を祝福しているかにみんな明るい。

だが、それよりも後に、また一台、幌ほろのやぶれた辻馬車が、荷物のように黒い人影を積んで、ぐわらぐわらと、華やかな二つの薔薇色の疾走に尾ついて来つつあることを、恐らくは、誰も知らないらしいのである。

## 温室

幾つもの窓の灯は映はえて、青い夜の空に、魔の翼のように風車はくるくると廻っていた。本牧の——石炭屋高瀬の別荘である。



横浜はまの栈橋さんばしに、巨大なジャマンの商船や蘭領インドあたりの無

数の外船が新しくはいりこんでいるような時は必ず、この風車の

家の下には、桃ももわれや、つぶしや、銀杏いちようがえしの、数多あまたの二ホ

ン娘むすめが、関内の花街かがいから送りこまれて、夜をくだつ器楽や強烈な

酒アルコール精せいの騒音と共に、毎夜毎夜、更ふけるのを知らない。

高瀬理平はその間に、石炭といわず、雑貨といわず、そのころ

夥おびただしく輸出される絹ハンケチといわず、何でも、利のあるものを

売りこんで、巨額な儲け仕事をするのだと言われていた。つまり

この風車の別荘は、そういう商取引において、よい都合を与える

上級船員たちを擒人とりこにしておく、商法の捕虜収容所だった。

千歳の女将おかみも、そのたびごとには、すくなからぬおこぼれを頂

戴した。つまり商戦の捕虜たちに饗応する白粉の女を、彼女は彼女の商法としてここへ提供する。そして、二日でも三日でも、捕虜たちの解放されるまで、彼女もまた娘子軍じょうしぐんの幾十人かと共に、関内の店とかけもちに、ここで眼を紅くしておとりまきをしているのだった。

で——その晩もである。

しかし競馬場からそこへ薔薇色の馬車がはいった時には、もう、狂躁な饗宴さかの熾さかんさが、玄関にまであふれ、ホールには、その前から運ばれている関内の芸妓げいしや、雛妓おしやくたちにとりまかれて、多くの、外人賓客たちが、酔態をきわめていた。その中に交じって、先へ帰った主人公の理平も、乱酔といつていいほどに、浮かれて

いた。——いつか大隈伯をここへ招待したあの晩の理平とは、だ  
いぶ調子がちがう酔い方なのである。

下品な海員ごのみの音楽にホールを鳴らして、彼もまた、特殊  
な寵愛をかけている何とかいう若い妓を擁ようして客と共に踊ってい  
た。背のたかい異人たちの間にあつて、彼はフロックを着けたゴ  
リラのごとく背が低い。

<sup>ドア</sup>扉が開いた。

シャンデリアに曇っていたいっぱいな煙草の煙が、そこからは  
いる夜の風に、美しくかき乱れた。理平は、<sup>ドア</sup>扉口に立った騎手の  
島崎と、夫人と姪とに気がついて、

「——遅かったじゃないか」

と、踊りをやめた。

「だって、島崎さんをこっちへ奪って来るにはたいへんな努力ですわ。ねえ、女将」

「そうですとも」

千歳の女将は、調子をあわせて、

「ひとつ、お客様たちへ、ご紹介してあげてくださいいな、島崎さんを」

だが、その労をまたずに、島崎のすがたを見出すと、幾組かの踊りは、みんなステップをしずめて、島崎のまわりになだれて来た。そしてきょうの見事な騎手ぶりを外人特有な誇張さをもつて賞ほめたたえた。芸妓たちも、客たちへの遠慮を忘れて、みんな、

島崎の注意を欲するように、そばへ寄りたがった。

「島崎君。この次の機会には、ぜひ、わしの持ち馬に乗ってくれ  
んかな」

「あのサラのクンプウですか」

「そうじゃ、君がひとむち一鞭いいところを乗って優勝してくれたら、  
うんと呼び値があがるな」

「機会があつたら、ぜひ、試みましょう」

「こんどには、だめかの」

「一、二年は、私の手もとに、お預かりしてみなければ」

「はははは。気のながい商法じゃな。それじゃ、やつと、利廻り  
にしかつかんぞ」

「やはり、ご商売にするなら、こつちにも、相当に玄人くろうとすじが  
おりますから、石炭の方が、まちがいないでしょう」

「ふム、そういうものかな。とにかく、ご来客を煩わしてすまん  
が、わが島崎君のために、ひとつ、ご乾杯を願おう」

と、理平はグラスをあげて、乱酔している賓客たちを煙に巻い  
た。芸妓たちは、それこそは本気になって、島崎を祝福するのだ  
った。

その騒々しい客間サロンをのがれて、奈都子は庭へ下りていた。例の  
神学生の今村といっしよに。

「——まったく、僕も、こういう場合には実に困ることがありま  
すよ」

今村はセンチメントに彼女の会話を誘い出しながら――

「何しろ僕も、酒ときたひにはちつとも飲けない性たちですからね」

「私も……」

と、奈都子は言った。

「ああいう部屋の扉ドアを開けただけでも、むうつと、しますのよ。

それがもう、年中なんですからたまりませんわ」

「こういう生活というものも、そう申しては何ですが、実に、お察しできますね」

「わたし、何でもいいから、はやくこんな混濁した、心にもない、生活を抜け出して、ほんとに、力のある個性のもてる、家庭に生きたいと思えますわ」

「そうでしよう、そうでしようとも。……誰だって」

と、今村はちよつと暗い庭の前後を見廻して、

「あたまがお痛いんじゃないんですか……」

「ええ……すこし」

「あれへ休みましようか」

ベンチがあつた。

ちようどそこは温室の蔭で、人目を避けて星を見るにはいい。

高い南洋植物があたりをつつみ、温室の花の香が、そこはかとな  
く、闇にただよつてもいるし……。今村は、奈都子の手をつよく  
握つた。



奈都子は拒まなかつた。

「ほんとに、ご同情ができます」

「今村さん」

彼女の眸は、何か、夢をみている。

「伯父はあんなお金だけに生きていますしね。それに伯母と  
いったって、親身じゃありませんし、それに……私の口からは言  
えないような行いをしているんですし。そんな家庭へ、お人形の  
ように貰われて、そして、伯父の傀儡かいらいになって、何の生き甲斐がい  
があるでしょう」

「あなたの性格は、ああいう、濁った中に、物質的にだけ生きるには、あまりに清純なんですよ」

「清純？ ……そんなことばを聞くと、私、怖ろしくなりますわ、いつ、今に、あの伯父が私を黄金の犠牲にえにするか……」

「奈都子さん」

彼女のうつつな感傷は、いつのまにか、今村の両手の中に、つよくゆすぶられていた。

「逃げませんか」

「え」

「ほんとの道へ」

「ほんとの道って」

「僕が手をひいてあげます」

「でも……」

と、彼女は、両手で顔を掩おおつた。

「だって……わたし」

「つよくなければだめですよ、つよく」

今村は、ささやいた。彼女の顔を掩もっている指を、腕もぐように剥めり離して、そして唇をそつと寄せた。

「あッ」

奈都子は彼を突き放した。彼のくちびるを恐怖したのではない——すぐうしろの棕しゅろ櫚の葉がガサツと妙な音を立てたので、ひよいと振り向いた途端に、わつと、泣くように驚きながら、羞しゆう恥うち

に眼が眩くらみそうになつたのだつた。

「奈都子さん」

「ひどい人！」

奈都子は、袂を上げて、今村を打つた。

棕櫚の葉のかげや、温室のうしろに、鳴りをひそめていた妙な人影の気配は、たえきれなくなつたように、どつと笑つた。そして、そこらの南洋植物の暗い蔭の中から、お光さんの顔が咲いた。黒眼鏡がのぞいた。櫛かしい井や、トム公や、愚連隊たちの顔が、いちどに伸び上がった。

「——誰だい、かんじんな所で、吹き出したやつは」

奈都子を取り逃がして、引つ返して来た神学生の今村は、腹立

たしそうに、仲間のものに当りちらした。

「蔭でクスクス笑い出しちや、こつちで真面目まじめになれやしねえじやねえか」

「いよう、いろ男さん」

「なに言つてやがんでい」

と、今村はでんぼうに言い返して、

「人にここまで踏みこませて、慰みものにしちやひでえや。そんな約束じやねえはずだろう。もつと辛辣しんらつによ、あの娘を、墮落おとするところまで引っぱり墮おとして、それから、高瀬のやつに吠え面づらをかかせてやるという話なんじやねえか、それを……」

「まあ、いいわよ、あれくらいで」と、お光さんが、彼の諄くどい泣

き言を打ち切った。

「可哀そうじゃないか、あの娘に、罪はないんだもの」

「なあにネ」と、樫井が横から、口を出してからかった。「今村のやつは、実は、自分からあの娘に、興味をもってしまったんですよ。それを、浅いところで済まされたものだから、むやみに、腹が立つわけさ。君の口くちぶり吻をまねして、ほんとに、僕、同情いたしますよ」

「畜生ッ」

「あはははは」

「おい、高すぎるぞ、声が」

「そうそう、まだ島崎が、来るはずだ」

「今のは、罪ッぽいけれど、あの方の口ならば、どんな辛辣しんらつにやつてもかまわない」

「来る時分だぜ、やがて」

「ひっこめ、ひっこめ」

いたずらな魔もの達は、さんざん言いたいことを言いい囃はやして、それぞれ皆、温室の蔭と植物の葉の中に、その首を沈めこんだ。

誰やらそツと、燐寸マツチを摺すつて、煙草をのみかけたけれど、仲間の者に低声こごえで叱こられて、あわてて揉み消してしまった。

## 花櫛

棕<sup>しゆろ</sup>栢の葉の闇は二十分間ほど沈黙をつづけていた。誰か、欠<sup>あくび</sup>伸をするような声を立ててからまた五分間ほど戦<sup>そよ</sup>ぎもしなかつた。そうしている間は、別荘の裏にあたる海の音が眠気を誘うような諧調をもつて聞えてくる。小蒸気のエンジンの音が、その暗い海の連想をよぶ。

「来ないわね、なかなか」

お光さんはとうとうしびれを切らして、第一に温室の蔭から腰をのばしてしまった。冷たい玻<sup>ガラス</sup>璃板へ息が曇っているように秋の特有な星雲が空に夜更けていた。

「ねえ諸君、まさか、木<sup>ミイ</sup>乃<sup>イラ</sup>伊取りが木乃伊になつているのじやないだらうね」



「何とも知れねえぜ、こう遅いところを見ると」

彼女が、立つと、みんな、待つていたように、一斉に首を伸ばした。棕櫚の葉の中から、南洋鬼おにづた蔦の中から、シヤボテンの中から、蘇鉄そてつの中から。

「トム。見ておいでよ」

「斥候せつこう？」

「あ。そしてね、もし島崎がいい気もちになって、こつちの約束を忘れていたようだったら、人のいない所で、お尻をつね抓つかつておやりよ」

「そりや可哀そうだ」と、誰か笑った――

「そんな事をしなくつても、チラと、おめえの姿を見せてやれば

気がつくだろうぜ。プリンス、頼まあ」

「それだけか」と、トム公の影は海藻もくずの中を泳ぐ縞鯛しまだいのように、

ぴちぴちと、正確な針路を探つて、青い庭園の闇をわけて行つた。

別荘の日本間には、どこの座敷にも灯明あかりがはいっていた。が、

そこには客のすがたはなかつた。噪音を辿たどつて、トム公は洋館の

窓から客間サロンをのぞいてみた。

そこは、濁りきつた空気と噪音を入れたガラス箱みたいの不透明である。泥酔した外人、すれツからしな通弁、芸者ガール、賓客も主人公側のものも、けじめなく踊り疲れ、飲み疲れて、長椅子の隅やあちこつちに、とぐろを巻いているのだけがわかる。

日本人も幾人かいたが、騎手の島崎だけは見えなかつた。帰つ

てしまったとすると、お光さんやみんなはずいぶん馬鹿な目を見るわけだ。

「どうしたんだらう？」

トムは窓を離れた。そこは、十歩を出ると本牧の海である。波打ちわから咽せあがる汐の香が白く煙っている。洋館の屋根の風車は勢いよく旋まわっていた。

「日本間の方へ、茶を喫のみに行つたのかも知らねえな。そうだ、きつと、そうだ」

裏庭の海べづたいに、彼は歩き出した。すると、その洋館と日本座敷をつないでいる橋廊下の上にぼんやりと、海をながめている雛おしやく妓のすがたがあつた。トム公の影はすぐに隠れていた。

雛妓の影もそこから消えた。

いつのまにか、二人の影はひとつになって、海の方へ斜めになつてゐる芝生の蔭にかがみ込んでいた。それは豆菊だった。

「兄さん、おつ母さんは、どうしたでしょうね」

「あれつきりだよ。おら、ゆうべの晩、西戸部から逃げ出して来たばかりだから、まだ行つて見る暇がねえのさ」

「もう行つちやいやよ、兄さん……」

「どこへ」

「おつ母さんの病院へ」

「自分のおつ母あのところへ行くのに、どうして悪い？」

「あそこには刑事さんが来ていて、兄さんが行つたらすぐ捕まえ

られてよ。もしおつ母さんの耳にはいったら、その心配だけでも、きつとおつ母さんは……」

と、たもと袂を顔に当てると、掴み細工の花櫛はなぐしが、前髪からふるえて落ちた。

「冷たい手をしているなあ」

「行っちゃいやよ、兄さん」

「じゃ、止よすよ。……冷たい手だなあ、菊ちゃん、おめえ子供にくせに、どうしてこんな冷やツこい手をしているんだい」

「どうしてだか、分らないわ」

「陽あたりへ出ると、消えちまいそうだな。おいらはこんなに丈夫なのに、どうして、おまえは弱いのだろう」

「女だからよ」

「女だつて、そんなに細い女つて、あるもんか。こんどおつ母あが病院を出たら訊いてみよう。菊ちゃんとおれとは、きつと父親ちゃんがちがうのかも知れねえぜ」

「そんなことないわ、そんなことないわ」

賢い豆菊は、トム公よりは、そのほんとなることを知っていた。母がどんなにして自分たちを産うんだか、また自分たちが、私生児という名であることも、また自分たちが生れるまえの、母が若さを濫費らんびして来た行いなども、ちらちらと耳にはいる人の話が、いつか豆菊の澄んだ心のなかに纏まとつて分つていた。その淋しいものが、豆菊の少女らしさをだんだん内気な聡明にして来た。

「菊ちゃんは、時々、この別荘へよばれて来るのかい」

「ええ時々、千歳の女将さんや、姐ねえさん達といっしよに」

「もうじき帰るの？」

「まだでしょう、お客様たちが寝てしまわなければ」

「じゃ、後でまた、ここへ来ねえか。ふたりで唄おうよ」

「唄なんか唄いたくないわ。私、いろんな話がしたい」

「あ、話をしてもいいさ」

「兄さんは一体、大きくなってから何をやるの？ おつ母さんは、

これから先、どうして暮すの？ そして私は……。こんなことも、

話したいわ」

「あ、島崎さんは、帰ったかい。——騎手の島崎さん」

「いたわ、今そこに」

トム公は、花櫛をひろつて、妹に渡してやりながら立つた。

「どこにいる」

「夫人といっしょに、客間サロンから出て行つたわ。きつと庭の四阿亭あずまや

の方へ行つたんでしよう」

「じゃ、後でネ」

豆菊の涙ツぽい眼をそこにおいて、トム公はあわてて前の温室の蔭へ歸つて来た。

「じゃ来る！ きつと来るんだ」

彼の報告に、そこらの闇はまた、人影をかくして、何げない夜の景色を森しんととのえていた。



## カメヲ

「真面目まじめね、真面目まじめね、いやよ、島崎さんは」

そういう夫人マダムお楨は酔っていた。相手の酔いの程度が不足なほど酔っていた。庭へ出て、騎手の島崎と、腕を組んで、しどけなく夜露あきを漁あさつて来るのだった。彼女と島崎との対照は、ちようど脛すねの長いアフリカ種の馬のそばに驢馬ろばが寄り添ったようであるけれど、彼女は、十分な満足を感じ得ている。

「あんた狡ずるいわ、今夜は酔うと言っておいて、私にばかり飲ませ  
て、そのくせ、酔ってないんだもの」

「それや無理ですよ、奥さん、騎手つてもものは、朝から夜まで、派手なものにつつまれ通しでいながら、それで、夜更かしも酒も、食べるものすらも、始終神経質でいなければならんです」

「分ってるわよ」と夫人は地を出して——「分っているけれど、こん夜はいいじゃないの」

「まだ、もう一競馬ありますからな」

「酒は飲めない、夜更かしはいけない、女も何もなんて、そんなにびくびくしていなければならぬものなら、騎手なんてやめつちまえばいいのにさ。坊さんになっても同じことだわ」

「まったく、騎手生活なんて、はやくやめたいです。人気者になるほどこいやなものがありますまい」

「だから、この次の競馬には、負けた方がいいじゃないの」

「そうも行きませんな。ははは」

「やっぱり、人気者でいたいんでしよう」

「だから苦しむのです。それがなければ何も」

「むじゅんしているわね、この人。——いいわよ、どっちにしても、こん夜ひとばんは、きつと私につきあつてくれるのだから。

ね、そういう約束だったわね」

「それやいいですとも」

「なんだかうわの空だわね、この人は。よその奥さんをだま騙すようには、私は、いかないことよ。ご承知でしょうが」

「ははは、騙せるあなたでもないでしょう。ま、そこのベンチへ

腰掛けましょう、すこし草くたび臥れました」

と、島崎はくすぐつたい顔をしながら、ベンチのまわりを見廻した。お槇は男の腕に拱くまれたまま、投げるようにならだを崩くずして、

「呆れたでしょう」と、仰向いて、ちよつと理性めいたことを言つた。

「何がですか」

「だって、高瀬の夫人マダムであるくせに、こんな強要をしてさ」

「今の上流の奥さんたちは、そんなことは、一つの娯楽ぐらいにしか考えていないでしょう」

「じゃ、私ばかりじゃないのね。——だけれど島崎さん、あんた

いったい、幾人ぐらい女のパトロンがあるの」

「幾人？ 冗談じゃありません。男のなら、ないこともないが」  
「知っていますよ、私に、隠したって駄目駄目。だからね、そんな者はみんなやめてよ、私が、三人分でも、四人分でも、力になつてあげるから」

女の執拗しつようさがそろそろ島崎を疲らしてきた。島崎はかなりよいほどに生返事をしているのであつたけれど、彼女には、それが人気者の偉えらさに見えた。そして今夜失望している幾人かの女性もあるだろうと思ひながら、自分の幸福感を刺戟した。やがて男のからだを揺すぶつてみた。島崎はまかせていた。家鴨あひるの愉悦するような女の嬌態きょうたいが、しきりとくすぐつたく思えた。

「ね。ね」

お槇は、もう自分のものであるように、島崎に唇を命じた。眼をつむって待った。男の近づけて来る顔を心臓で想像した。

彼の口臭が温く頬にさわった。鼻骨が鼻骨にふれた。そして、全身の神経が麻酔ますいしかけたところへ、ぱつと、マグネシウムをつよい閃せんこう光と爆音が、彼女を撲りつけたように驚かした。

彼女は、弾はじかれたようにベンチから飛び上がった。とたんに、棕櫚しゅろの葉が手をたたくように揺れて、あたりの闇が、笑い声に騒いだ。

「? ……」

夫人マダムのお槇の顔へ、もういつペンマグネを与えたら、どんな表

情をしているだろうと思つて、お光さんや愚連隊の男たちは、止めどなく笑いを交換した。

お槇は、ふるえていた。そこに硬直したまま、誰とはなく睨みつけているのだった。そのあたまのうえを、ふわつと、白くながれてゆくマグネの煙が、島崎の化身けしんのように。そばにいた島崎はいつのまにかそこにいなくなつた。

「見ておいで！」

彼女は、こめかみをぴりぴりさせて、うしろを振り向くと、突然、ヒステリックな声で呶鳴つた。

「どなたも！ みんな来てください！ 悪いやつが大勢、邸宅やしきの庭にはいりこんでいますから。——爺じいやツ、三吉ツ、お客様たち

も来て下さい」

そして、危険を避けるように、温室の周囲をバタバタと駆けめぐった。

「諸君、お芝居はハネましたよ」

お光さんは、夫人の狼狽を冷笑しながら、小型なカメラをかかえて、すばやく、庭園を横ぎった。誰の足もはやかった。——だがひとりトム公だけは、みんなが逃げる方角とは反対に、さつき豆菊と会った裏手の海岸の方へ駆けだした。

彼は、もういちどそこに待っていると云った妹との約束にひかれたのだった。しかし、彼はすくなくならずそれを悔いた。座敷から、風呂場から客間サロンから、いちどに、吐き出されて来た人間は、



彼ひとりを見つけて、大げさに追い廻して来た。

一方が、海であるだけに、トム公は逃げ場を失ってしまった。風呂番の男のたくましい腕が、まず彼の襟がみをつかんで、外人だの、ガイドだの、召使だの、ほとんど彼のすがたをつつんでしまふほどの人群が、そこに度胸をすえて坐ってしまったトム公をかこんで、がやがやと騒いだ。

「この少年、ドロボウ？」

一外人の質問に、通弁は言った。

「いいえ、かんかん虫」

「かんかん虫？ あ、かんかん虫？ ……」

外人は、分つたような分らないような顔をして興きようがうつた。主人

の理平も来た。千歳の女将も来た。芸妓げいしやたちものぞきに来た。

「電話をかけておいたろうな、警察の方へ」

「はい、すぐ知らせておきましたから、もう程なく来るでしょう」

「さ、お客様たちは、どうぞあちらへ。……いや何でもありません、コソ泥です。かんかん虫のトムという小僧で、まいど、強請ゆすりをしたり何かして、よくないやつなんで。……こらっ、今夜こそ、警察へわたしてやるぞ」

トム公は、黙って理平の顔を睨んだ。その高瀬の肩に、甘えかかって、何か、恟々おどおどとささやいているお槇へ、何か言っつてやろうかと思つたが、ここではやめた。

「警察のお方がお見えになりました。署長さんまで」

「署長も。——いやそれ程のことじゃないのに」

「電話をかけたものが、ひどく、あわてたものですから」

「まあよいよい。伊勢佐木署の保科ほしなさんならあとでお詫わびをすればいい。とにかく、こちらへ」

警官の提燈ちようちんと、佩剣サーベルの音は、そう言ってるまに、人々のうしろへ来ていた。

とみまろ  
富磨

「あははは、そうですか、何か非常なことらしい電話なので、自転車をとばしてお見舞に来たわけです。——がまあ、そんな小事

件であつておめでたいわけでした」

署長の保科勝衛ほしなかつえは、高瀬理平と肩をならべて、もうほかの雑談などをしていゝのだつた。だが部下の巡査は、その小さな一事件にも、職務の忠実を示し得るように、おそろしくげんしゆく厳肅がって、鉛筆のシンを舐なめる。

「こらつ、貴様あ、かんかん虫のトム公だな」

「さきおととい、調べてもらつたばかりだ」

「でも一応は、住所年齢を聞くんじや。年は」

「十四さ」

「住所は」

「忘れちまつた」

「貴様、署では言ツたじやないか。——相沢町字和蘭陀横丁、俗称イロハ長屋、千坂桐代長男——そうだな」

「おつ母あの名なんか、そんな、汚ねえ手帳に書いてくれんなよ。おつ母あは何も、警察の手帳に書かれるようなことをしたことはねえ」

「署長、こういう小僧です。実に手におえんです」

「こんなのが大きくなったら、さしずめ、吾々の飯の種じやろう。あははは」

「しかし、法律というものも不便ですな」と、理平が、署長の吸いかけている巻煙草へ燐寸マッチを摺すつてやりながら横口を入れた——

「こんなチビでも、いっぱし、大人以上の悪事を働いて社会を害

するのに、十四歳では、それを懲役にすることができないのですか」

「まあ、こんなひどい不良は、八丈島の感化院へやるわけですがな。その感化院へやっても、どうも大した効果はないようです」  
「そうでしょう、こんなのは、つまりもう先天的に、血のなかに悪を持っているのでしようからな」

「おい、連れてゆけ」と署長は無造作に顎をすくって、

「僕はまだちと用事が残つとるから、後から行く。何、トム公のことは武藤主任むとうが何もかも知りぬいとるから、武藤君にやらすがよい」

「じゃ、署長、ご迷惑でしょうが」

と、理平が彼を客間サロンへ迎えようとする、さつきから、しげしげと、トム公のすがたを見入っていた千歳の女将おかみが、そのトム公の腕をつかんで引きずり上げた巡査へ向つて、ていねいに、腰をかがめた。

「あの、失礼でございですが、ちよつとお待ちくださいませか」  
署長と、高瀬とは、振り顧つて、

「女将、なんじゃ？」

「はい、この子のことで、すこし……」

「おまえが、かんかん虫のトム公などに、何の用があるのか？」

「相沢町字和蘭陀横丁、千坂桐代、そう仰あきつしやつたように存じますか」

巡查も、妙な顔をしながら、

「はあ、それがトムの母親にあたる者で、今、どこかの施療病院にはいつとるといふことです」

「もういちどお確かめ下さいませんか。母親が千坂桐代——そしてトム公というその子は、本名を、富磨といひませんか  
しら」

「さ、それはどうですか。おい、トム。貴様の本名はトムではなくて、トミか、トミ磨か」

その巡查の顔を見ないで、トムはじつと千歳の女将のすがたをながめていた。女将も、彼の鼻すじのとおった顔だちに、自分の直覚をまちがいのないものと信じた。



「署長様。おそれいりますが、ちよつと、お顔を拝借させてくださいませんか」

千歳の女将と、署長の保科とは、そこを少し離れて、闇の中へ顔を突っこむように屈み合つた。

トム公——千坂富磨が大隈伯のたずねている千坂男だんしゃく爵やくのむすめの子にちがいないと囁かれて、保科署長はびつくりしてしまつた。

それを、背なかあわせに、耳をすまして聞いていた高瀬理平が、度を失うほど驚いたのは、なおのこと当然であつた。

もや  
つか  
靄の疲れ

伝統の濃いこの国の女、彼らの故国の酒——

悪い雰囲気であるはずがない。

風車の別荘にかんづめ罐詰とされた商策の捕虜ほりよたちは、理平のたくみ

な歓待に日を忘れて、出帆の朝の間際まで、完全に、二日二晩を、  
そこで沈酔しんすいしていた。

その間に、さんばし棧橋にある彼等の本船は、すべての積荷を終つてしま  
う。一万トンもある船腹は、不良品に充満する。石炭は、かんか看  
貫かんをごまかし放題ごまかして、どしどしと、その期間に積みこ  
まれた。

貿易華やかなりしころ、巨富をつかんだ横浜成功者の多くは、

そうした智謀に富んだ器であつた。——いよいよ悪辣な輸出戦の火ぶたが切られる日の前に、やかましい本船の頭株の異人達は、遠くは箱根、大森のあけぼの、新橋の花月と拉して行かれる。まだまだ、本牧の風車の下で、関内の安ッぽいお吉や、似て非なる亀遊の髪あぶらの香を嗅いで、うつつを抜かしているてあいなどは、至つて、馭しよい異人たちであるのだ。

だが、オキチでもブタでも、とにかく、彼等の満喫するに足る柔肌のかいなに抱かれて、彼らが姫氏の国の甘夢にうつつなき一夜こそ、港の埠頭は戦争だつた。カンテラは棧橋を焦し、炭煙は棧橋に立ちこめている。ボーラ吠え、石炭かつぎ吠鳴り、波止場人足さけび、かんかん虫夜業にたたく。何もかも夜明けまでと、

徹夜で、一万トンにあまる船腹を、手品ののように、不良品とごまかしで、征服してしまうのだった。

ぼうっ！ ぼうっ……

出帆の朝。——あの色けのない本船の咽のどぶとい汽笛の音が、横は浜まの朝靄あさもやをゆるがすころになると、あっちこっちの遊仙窟から、それこそ、とるものもとりあえず、といったような、あわてふためいた異人たちが、上は船キャプテン長から下は火夫やコックにいたるまで二人曳おきで押おツとばして、出帆五分前——二分まえ、という際きわどいところを棧橋の本船へ駈かけつけてくる。

その時こそ、船乗り異人の薄情さかげんがわかるし、開港町の女たちの、いと、あっさりしたものであることが歴然とする。

「この次は、サイベリア丸だとさ」

呉ごの客を送つて、すぐに越えつの船の入港日を税関の前の掲示板で見ながら、よく戦つた白粉の女たちは、裾寒げに、そろそろと、自分の巢へかえつてゆくのだつた。

「や、ご苦労、ご苦労」

高瀬理平は、やつと一船かたづけて、ほつとしたように、腰をたたいた。——その朝は、千歳の女将が姿を見せなかつたので、船の外人を送つてきた芸妓たちも、何となく、つぎ穂ほがなく、まじめに挨拶をして、それぞれの方角へ、俵ほろの幌をかぶつて、歸つて行つた。

「旦那さま、旦那さま」

棧橋を出ると、すぐに、迎への馬車が理平の方へ寄つて来た。

「お疲れでございましょう」

と、お楨は、おととい一昨日の晩から、別人のように彼に親切だった。

こんな朝はやくに、彼を迎えに来ることだつて珍しいのであつた。

「——朝は、だいぶ寒くなつたな。もう季節だとみえて、はぜつり鯊釣

の竿さおが見えだした」

「夜ふかしがつづいたせいでございましょう」

「それもある。……あ。奈都子はどうしたね、医者に見せたかい」

「あれから、ずっと、寝ております。石川博士が毎日診察に来て

くださいます」

「病名は」

「やはり神経性のものだろうと仰おつしやるんですが」

「分らんのか。……熱は」

「三十八度前後……。ゆうべは、九度ぢかくまでありましたが」

「ふーむ」

「やっぱり、年ごろですから」

「肺じゃあるまいの」

理平は、沈鬱になった。眼の下の皮が、疲労にたるんでいた。

北仲通りの本宅へ、馬車はやがて着いた。支配人はまだ事務所の電燈を鼻の先まで下げて執務していた。瀬戸の大火鉢にゆうべからの忙しさを語る吸殻がむせッぽい煙を漲みなぎらしていた。

「松下君、やすみたまえ」

「あ、お帰りで」

「だめ、だめ。此こツ方ちもへトへトに疲れとるから。話は、あとで聞こう」

あわてて、手を振って、理平は奥の洋室へ逃げこむようにはい  
つた。どつかりと、椅子のなかに体を投げこんで、

「珈琲コーヒ」

両手を、後頭部でむすびながら胸をそらして、

「熱く」

と言い足した。

それを待っている間に、彼は眉をしかめ出した。上の露ベランダ台だ  
ろう、朝からハーモニカを持ち出して、幼稚な、騒々しい音を、



吹きちらしている者があつた。

ちんにゆうしや  
 闖入者

おそろしく熱い珈琲<sup>コーヒ</sup>へ、くちびるを近づけただけで、理平は、ふきげんに下へおいて、

「誰だ、あれは」

と、女中へ咎めた。

「ハーモニカですか。あれは、おとといの晩<sup>ちとせ</sup>千歳の女将<sup>おかみ</sup>さんと警察署のお方が預けておいでになった、トムさんです」

「トム公か。困ったやつじやの」

「ほんとに、とんでもない者を預かってしまいましたわね。警察へおいてくれればいいのに」

と、お槓もいっしよに、眉をひそめた。

「だが、女将の証言がほんとだとすると、あれが千坂男爵の身よりのものだというのだから、そう分つてみると、署長も処置に困つとるんだらう。……おいあの小僧に、トム公に、そう言え、病人があるんじゃないから、そんなものは吹いては困るって」

女中は旨をうけて、さつそく露<sup>ベランダ</sup>台へ上がって行つたらしいけれど、ハーモニカはやまなかつた。

理平は一睡したのであつたが、それが気になつて寝る気にもなれなかつた。千歳へ電話をかけさせてみると、女将はきのう東

京へ行つてまだ歸つて来ないとのことで、結局、そこへも当りようがなく、隣室へ寢床を命じて、横になった。

読みかけていた新聞にも、すぐに眼がつかれて、二、三時間ほど彼はウトウトとしていた。——すると隣室で、聞き馴れない来訪者の声がひびいた。

「ごじようだんでしよう、君！　嘘を言ツたつて、だめよ」

それは、男とも聞えるし、女ともうけとれるアクセントだった。「——居留守なんて、古手だわよ、第一、君、自身ですら、女中にいないと言わせておきながらここに居るじゃないの。しかし、君だけじゃ相手にならないですから、ご主人に会わせてください」

「だってほんとに今、主人は船のお客をつれて、箱根の方へ参っ

て、不在なのです」

応接しているのは、明らかにお槇だった。けれど、来訪者の圧倒的な語調のまえに、何となくおろおろしている風がわかる。

「誰だろう？」

と、理平は寢床の上に起き上がって、耳を澄ましていた。

「ホホホ」と、落着きすました笑い声だ。笑い声はやはり女だった。「——今朝、棧橋からお帰りになってから、ここのご主人はまだ一步も外へ出ていないはずよ。君！ そんな嘘ツぱち、いくら並べても、認めなくってよ。はやく会わせたまえ」

「あなた。会わせる会わせないはともかく、いったい誰に断って、ここへ、はいつて来たんですか」

「女中君が、嘘をつくから、家宅侵入を敢えてしたのよ、君、訴えますか」

「……呆れましたね、なんていう、あばずれでしょう」

「けれど、君ほどに、あばずれでないつもりよ、その証明は後に立てます。とにかく、ご主人を呼んでもらいますよ」

「いませんよ」

「います」

「いません」

ふたりがいい募<sup>つ</sup>つしているところへ、扉<sup>ドア</sup>を押して、ひらりと、はいつて来た者があつた。ポケットの口にハーモニカを短銃<sup>ピストル</sup>のようにのぞかせているトム公だった。

「お光さん」

「あ、トム公、おまえここにいたの？」

「主人はすぐそこの奥に寝ているぞ、いないなんて、大嘘さ、おれが連れて来てやろう」

と、大股にあるいて、隣室の扉をぽんと足で開けた。すかさず  
に、広東服のお光さんは、彼につづいてその部屋の口から、

「ご主人、起きて頂戴な」

と、覗いた。

## 征服

「誰だおまえは。やたらに人の居宅へはいつて、寢室へまで無断で来るやつがあるか。警察へ言うぞ」

「結構ですわ」

と、お光さんは、椅子に倚よつて、ほそい脚線を組みあわせた。

「けれどご主人、君は、私の用向きを聞かなくつてもいいんですか」

「おまえみたいな婦人に、わしは、何の用件も持つとらん。いずれおまえは、女愚連隊とか、ハンケチ女とかいう、そんな類の者じやろう」

「そうよ、私は、ハンケチ女から成り上がった、女の愚連隊よ。」

しかしご主人、君もつい十何年かまえは、みなとぼし港橋で真つ黒なパ

イスケを担いでいた石炭担ぎじゃなかったの」

「失敬なことを言うな。つまみ出すぞ」

「おもしろい、私がつまみ出されるかどうか、トム公、そこで見物しておいで」

「あ。見ていよう」

トム公は、二つの椅子を並べてその上に足を投げ出しながら、  
ハーモニカを弄もてあそんでいた。

「——が、ご主人、つまみ出されるといけないから、その前に、  
かんたんに私の訪問した好意だけを分つてください」

お光さんはポケットを探つて、まだ感光液のねばりそうな生々しい一葉の写真を出して、理平のまえに突き出した。理平は、手



もふれようとはしなかったが、ちらと見ると、顔いろをうごかして、思わず眼を奪とられてしまった。

「どうですか、この写真は。……夫人、マダムあなたもここへ来て見ないこと。大へんよく撮とれましたよ」

お楨は青白まきい戦せんりつ慄を奥歯にかんでいた。写真の画面には、大きな自分の顔と、騎手の島崎の顔が、唇を寄せ合つて、見るからに淫みだらな陶酔を語っていた。彼女は、この間の晩、その秘密な場シ面を盗しんまれたせつなに浴びたマグネシウムせんこうの閃光を、今また、驚愕の後頭部によみがえらせて、眼がぐらぐらとして来た。

「ご主人、君は、買いますか、買いませんか、この写真を」

お光さんの笑靨えくぼは、だんだん冷たく誇らしくなった。

まるで、滅心したかのように、どすぐらい憤怒と、苦悶に、ぶるぶるとそれを睨んでいた理平は、いきなり彼女の手の物を引ッ奪<sup>た</sup>くツて、

「買おう！　いくらだ」

と、言下にビリビリと引き裂いてしまった。

「お生憎さまです」

と、お光さんは皮肉な商人のように、わざと少し頭を下げて、

「それは、お売りいたしませんわ、なぜかと言えば、幾ら君の財力かいしで買占めを試みても、原板でない以上は、何百枚でも複製がききますからね。無駄じゃないこと」

と、また隠しの中から、一葉の写真を出し示しながら、

「たとえば、こういう、トリック写真でも作ることができると  
すから」

次のそれはまた、正視できないほど悪辣な猥画屋のトリックに  
依つて画面の拡大されたものだった。夫人のお楨の首は、見も知  
らない売笑婦の裸体の胴にすげ代えられてあつた。理平はもうそ  
れを奪つて、裂き捨てる勇氣さえ失つてしまつた。

その硬ばつた理平の顔と、慚愧ざんきそのもののようなお楨の戦慄と  
は、トム公の眼に、頗る愉快すこぶな対照であつた。トムは、椅子の上  
に軽く足を弾はずませながら、その間に、ハーモニカの低吟を唇くちに弄  
しはじめた。

「もつと、ごらんにいれましようか。まだ、奈都子さんのもあり

ますが」

「ゆるしてくれ、もう、たくさんだ」

理平は、両手で、頭をかかえたまま、とうとう屈伏してしまつた。

「金はいくらでもやるから、その原板を持って来てくれんか」

「売るならば、私は、輸出絵ハガキ屋のトリック師へ売りつけてやつてよ。こういう絵は、外国船の下級船員たちが、非常によろこぶもんですつて」

「だから、わしが買うよ」

「いいえ、売らないと言うんですよ。——ようござんすか君！

私は、これ売りつけに来たんではありません」

「じゃ、何だつて」

「夫人も、一言あつていいでしょう、君はこれを認めますか。騎手の島崎との醜行を」

「え！ 今言おうと思つていたんです」お槇は、乾いた唇をわなわなさせて――

「それはみんなトリックです、私の、何かの写真を盗んで、悪戯をしたんです、冤罪です」

と、終りの一句を、理平に向けて、訴えるように叫んだ。

「む、む、そうじやろう。誰かの、悪戯にちがいない。おまえにとつては、まったくの冤罪だろう。もし、そんなものを、承知しながら流布するならば、警察の力を借りて」

「君たち！」お光さんは、平等に、ふたりを睨んで、その秩序のない泣き言に句点を打たした。

「そんな強がりや、見ツともない狎なれ合いはおよしなさい。その代りに、夫人の冤罪という点だけは認めて上げましょう。場合によつては、この原板を無償で進呈してもいいことよ。——だが私の大事な用向きはここなのだから、ここをよく聞いて欲しいの」

と、お光さんは、平調に澄まし返つて、「冤罪マダムということは、これほどに怖ろしいことでしょう。だのに、夫人は、君よりももっと正大な、一人の労働者を、冤罪に墜おとし放して、素知らぬ顔をしていましたね。——そのことは、私が連れて来た男の口から言わせましょう。——黒眼鏡君、来て頂戴」

彼女が、扉の外へちよつと顔を出すと、瀟洒しょうしゃな巾着ツ切の常は、おとなしい笑いをたたえながら、

「ごめん下さいまし」

と、羽織の裾をはねて、一つの椅子を占めた。

## 夕坂越えて

トム公は愉快でたまらなかつた。ハーモニカを唾つばだらけにして、弄もてあそんでいた。その間に、彼の希望していたことは、はきはきと、片づいて行つた。

船渠ドックの構内で、お槓の指環を窃盗せつとうした真犯人が、亀田でなか

ったことは、黒眼鏡の口から立証された。

それを掏<sup>す</sup>った当人——黒眼鏡の常が、自分の口から述べることばだった。お光さんはまた、その証拠として自分の手にある、ダイヤの指環を見せた。

理平もお植も、その後、亀田がほんとの窃盗者でないことは、うすうす感じていたのであつたが、そういう階級の人間に、何らの同情も介意もしない富豪通有の冷淡さが、彼らにもあつて、いかげんに放念していたのである。しかし、今はお光さんに、きびしい鞭をピシピシと打たれて、その真実のまえに、慚愧<sup>ざんき</sup>のあたまを下げずにはいられなかつた。

「いや、相すまん。さっそく、亀田という人を、貰い下げよう。」



何とも、すまん事じやった」

「当然その人には、賠償ばいしょうする義務がありますわね」

「あります。その人の身の立つように考慮しましょう」

「よろしい、誓ったことよ。——ではすぐ伊勢佐木署の保科署長を呼んで貰いましょうか。黒眼鏡は自首するそうです。つまり、冤罪をうけてはいつている亀田さんと入れ代りになるんですから」

「さつそく、電話をかけましょう」と、理平は唯々いゝいゝとして、お光さんの命に伏した。

署長、刑事主任、ほか二、三人、すぐに自転車をとばしてきた。黒眼鏡はるるとして、船渠ドック以外の犯罪の事実までを陳述ちんじゆつした。それは、すこしも暗惨な気分のない、明るい話をするようだった。

「仕立屋の身内か。じやいちど、手にかけてたことがあるな」

「ごやかいになつたことがございます」

と、いう風に柔順であつた。

「よろしい」

と、常の方を終つてから、

「検事局の方へ上申すれば、亀田は、即日放免されましょう。何、まだ未決監ですから、ほうそうかい法曹界の人々に聞えても、問題化される心配はありません。こんな例はありがちなことです。——それからトム公の方ですが」

と、チラと、彼をしり目にかけて、

「県庁の警務部へ行って協議した結果ですが、たとえ本人が、大

隈伯のおたずねになつてゐる千坂家の身よりの者であるにせよ否にせよ、情実でこのまま、放免することはいかんという意見なんです、で、一応は、本署から彼の脱走した戸部の懲治監へ送り返してやることに決めました。どうぞ、それのご諒承を」

と、宣言的に、経過を告げて、すぐトム公の手くびをつかんだ。「刑事主任、ついでに、連れ帰つてくれたまえ」

「ちよつとお待ちください」

「何をしているんだ君」

「彼はどこへ行きましたか」

「彼つて」

「黒眼鏡です、今の、巾着ツ切です」

「? ……」

「……便所じやありませんか。中折帽がおいてある」

と、理平がつぶやくのを、トム公は、横を向いて笑った。そして、お光さんに、眼くばせした。

「いるんでしょう、見て来ますわ」

と、お光さんも、部屋の外を覗き廻った。そして、ちらつと、広東服の裾の端を見せたまま、彼女もそれつきり帰らなかつた。

——もちろん金剛石ダイヤモンドの指環も、トリック写真も、その隠しにつツ  
こんだまま。

\*

大隈伯の代理という人と、千坂家の家令という老人とが、紋付

袴で、千歳ちとせの女将おかみに伴われて、横浜駅から大江橋のすぐまえにある千歳楼へはいったのは、同じ日だった。

女将は興奮していた。一昨日の晩から何か非常な奇蹟にぶつかったような驚きもあったし、最高な善事のために自分を疲らしているという満足もあった。

帰るとすぐに、しきりと、あつちこつちへ、電話をかけていた。高瀬家の番号も、警察署の番号もよび出された。——やがて程経て、金春こんばるの春太郎ねえ姐さんが、すこし、瞼まぶたに泣いた痕あとを見せながら、豆菊の手をひいて、連れて来た。

豆菊は、いつもの座敷着とは、すこし袂めいのみじかい銘仙せんの着物を着せられて、髪まで、お下げ髪に改められていた。賢い彼女

の眼も、すこし、きよとんとしていた。

「このお方が、おきく様という、お末のお嬢様でござりますか」と、両手をつけて言う千坂家の老家令に、彼女はやはりきよとんととして、抱え主の春太郎のそばへばかり寄っていた。

やがて、しめやかに、襖を閉たてきつて、大隈伯の代理の人と、女将とが、何か細こまごま々と言いきかせるうちに、豆菊はしゆくしゆく泣き出した。

その心もちが分つたので、女将はまたせかせかと警察へ電話をかけた。話がついたと言つて、急に馬車をいいつけて、豆菊も加えて、四人づれで伊勢佐木署へ出頭した。

県庁との打合せに、さんぎ手間がかかったらしいが、トム公は

そこにいること二時間ばかりで、一同へ下げ渡された。馬車はまた一人の客を容いれて、そこから山の手へ向つて鞭を打つた。

「分っている？ 赤十字病院だよ」

「分っています」

「いそいでおくれネ」

女将は、こんなうれしい日はないと言つて、涙をふいた。まつたく、うれしそうだった。

豆菊が、お下げ髪に結ゆつて、きちんと、銘仙の袂を膝に重ねているので、トム公は、ぎごちなかった。髯ひげの生えているそばの人、紋付袴で謹厳そのものといった態度でいるそばの老人、それも、

鬱陶うつとうしいものだった。

ただし彼は、こうして公然と、母のいる病院へ訪れ得ることがとても愉快であった。一刻もはやく、冷たいだろうと思う母の手を、自分の頬ぺたに当ててやりたかった。

馬車はかなりの歩速で躍ッていたが、馭者ぎよしゃの鞭の数がまだ少ない気がした。黙っているお菊ちゃんだつてやつぱり同じだろうと思つた。彼は、妹の眼にいつぱいうるんでいるものを見て、共に、目を熱くしている自分に気づいた。

馬車は、うねうねと、黄昏たそがれの坂路にかかった。坂のうえに、灯が見えた。あれもこれも母の枕べにともる灯かと思われた。――坂を登り切ると、軌みちは並木の下を縫っている。

やがて、からたちの垣根が見えた。――夕暮の空に白いペンキ



塗りの赤十字病院が仰がれた。豆菊もトム公も、その窓の灯を見たとき、まつげ睫毛にほうつとその灯が滲にじんでしまつて、幾すじとなく熱いものが、むずがゆく頬を流れてくるのも知らなかつた。

## 飛降り

「はい、ご通知を拝見して、非常に驚いたわけですから、非常に驚いたわけですから、で早速、病室も特別室の方へお移ししておきましたから」

通された病室は、雪の夜のように白々としていた。主治医は、寝台に椅子をよせきつて、無言を守っていた。助手や看護婦たちの沈黙にも、あきらかに、病人の危篤きとくを語るものがあつた。

「実は……」と、主治医は三名だけを蔭へよんで「東京からの電報も拝見しておりましたので、極力、尽しましたが、遺憾いかんながらお待ちしきれなかつたのです。で……只今注射をしましたから」  
「どうも、万、やむを得んことでござります」と、老家令は沈痛な低声で言った。

そばに、俯うつむ向いていた女将が、しゆくツと嗚咽おえつをして、突然、袖口をかみながら背を向けたので、二人もはつとして、寢床ベッドの方へ眼をふり向けた。

いたいたしい、厳肅な光景が、人々の眼を打った。注射によつて、わずかな時間の生を意識した盲目の病人は、からだを蔽つている白いきものを、無性にうごかそうとしている。ベッドの両方

からは、トム公と、豆菊とが、母の胸へ、頬へ、まるで泣いてもいないように顔をすりつけてふるえていた。

細い、ろうざい蠟細工みたいな指が、何ものかを、宙に探った。トム公の髪の毛をつかんだのである。片方の手には、豆菊の背をつよく抱えよせて、異様な、泣くとも歡喜ともつかない声を、咽のどから発した。

「ゆ……ゆるして！ わたしが作った罪を、おまえたちの一生にまで、こんなに負わせてしまうなんて。……でも、女の一生つて」と、きれぎれだった。「初めの一步ね、貞操つて、自分のために大事なものよ……そ、それを、お母さんは」

すこし息をついた。しかし、あわただしい死の督とくそく促が彼女の

心臓をたたいたらしい。

「ふたりとも、堪忍してね。……堪忍してね」

わつと、トム公があるツたけの声を出して泣いた。

「おつ母あ……」

「お母あさん」

「おつ母あ。……おつ母あ」

「おつ、おつ……おつ母さん……」

直立していた主治医と看護婦とは、眼を見あわせてその枕元へ、無言のまま冷たい歩みを運びかけた。

\*

数日の後——

横浜駅のプラットホームは、今、新橋行の列車に駈けつける人々の騒音で慌あわだしかつた。

一等車の窓の外には、千歳の女将おかみと金春こんばるの春太郎とが、送りに来ていた。あとの処置はすべてよいようにしておくということ。大隈伯によろしくということ。——そして、くれぐれも、二人のことをなどということ。

「いや、お坊っちゃん、お嬢さまのことは、もう一切ご心配はございません。何事も大隈の御前様が、よいようにして下さいませようから」

と、家令、代理の者、ふたりが謹厳に帽子を脱いで労を謝した。五分鈴ベルが鳴ると、女将は、のび上がって、一等車のなかをのぞ

いた。華族のお孫になってこれから東京の邸へ迎えられようとする豆菊とトム公とは生れ代ったように、品よく見えた。

「……じや菊ちゃん、富磨さん、さようなら」

汽車はゆるぎ出した。送りに来た二人のすがたは、プラットホームといっしよに、うしろへ飛んで行った。

トム公はすぐに窓から首を出した。横浜の市街、横浜の港内が、彼のひとみに展開された。船渠ドックの構内も瞬間、眼の下に見えた。

「——菊ちゃん、うれしいかい？ 華族の家へ貰われてゆくんだとき」

「わからないわ、私には」

「おつ母あ、何と言ったんだっけ。——死ぬ時に」

「あやまっていたわ」

「どうして謝るんだろう。自分の子供へ」

「よしてよ……」

「また泣くの。泣虫」

「自分だって、泣いたくせに」

「汽車は、疾風を衝ついていた。

トムは、ちらと窓外をのぞいた。

「あ、もう横浜はまは見えねえな」

「そんなことば、やめてよ」

「おまえ、もうお嬢様になツちまったのか。早えなあ」

と、少し浮かぬ顔で、

「菊ちゃんは、華族のお嬢様が似合うよ。だが、おいらは嫌いだ。金持もきらいだし、華族様もきらいだ。……ああ、おつ母アが生きていれやいいのになあ。おつ母アとなら、一生でも、かんかん虫をしていた方がいい」

「よしてよ、そんなことば。トムさんが、かんかん虫をしていたことなんか、これからは言わない方がいいのよ。千歳の女将さんも言っていたわ」

轟ごうおん音が変った。汽車は、ひとつの川をうしろにしていた。

「おら、帰ろう！」

「どこへ、兄さん」

「菊ちゃん、あばよ」



トムはふいに、そばにあつた帽子をつかんで扉の外へ駈けだした。あつと、豆菊と付添の二人が、窓を開けたとたん、トム公の矮わいたん短たんなからだは、激流する空氣の震音の中を、もんどり打つて、線路堤から沼地らしい蘆あしのなかに振り飛ばされていた。

「帽子が見える！ 帽子がッ」

豆菊のかなきり声が、疾風にちぎれて、列車の黒煙といっしょに、後方へ飛んで行った。

## 彼の航路

水族館の魚みたいに、  
懲治ちようじ監かんの不良児たちは、  
監禁室の底に

へバリついて寝ていた。青いガラス窓の外にさつきから彷徨ほうこうしている人影にも、なかなか眼がさめなかつた。

「オイ、<sup>びよう</sup>鋏を抜けよ。鋏を抜けよ」

そういう外の幻に、やつと、一人が眼をこすり出した。そして、ほかの者の耳を順々に引つ張り合つた。

「トム公だぞ。トム公だぞ」

「えつ、帰つて来たのか」

「ほんとか」

「ほんとだとも」

彼らは、畳の下の捻廻ねしまわしを持ち出して、たちまち一枚のガラス板を外した。トム公は、にこにこしながら飛び込んで来た。彼

は、からだじゆうのポケットを探つて、手あたり次第に持つて来たものをそこへつかみ出した。アンパン、ハーモニカ、ピストル、煙草、かみそり洋刀、ドロップ。

「食え、食え、食え、みんな。まだあるぞ、いくらでもあるぞ」

「偉えらいなあ、プリンスはやっぱり偉い。おいらのプリンス」

「約束どおり帰つて来たぜ」

「持つて来たぜ」

「ばんざい！」

アンパンの饗きようえん宴が初まった。煙草の曲きよくの喫みが始まった。

餓えた中に物のあること！

人生のなかで、およそこんな感激的なことがあるか。トムは、

それを眺めていると、からだじゆうを幸福でくすぐられるように欣うれしかった。果した約束に、爽快であつた。

だが、その深夜の享樂は、大騒ぎは、当然監視人に発見されずにいない。トムはすぐに別室へ拉らし去られた。東京の千坂家へ、大隈伯へ、また県庁の方へ、十幾日間の交渉がかわされた結果、トム公はやはり放縦だつた母の血を多分にうけたトム公であつて、ある年齢までは、それを厳格な監視の下もとにおく必要があるときまつて、八丈島の最不良児感化院へ送ることになつた。

月に二回、横浜を出帆する八丈丸に、トム公は監視付きで乗せられた。もう海の寒い冬だつた。だがその朝は、港いッぱいに陽がさして、水蒸気が水面にあつた。

「プリンス！ プリンス！」

トムは左舷さげんに立つて、自分へさげぶたくさんなハンケチ女の群むれを見出して笑った。お光さんはその中に立つて、白い手をさしあげていた。唇が届かない——トムはそう思った。——唇が届かない。

また、男たちは、男ばかりで一団になっていた。愚連隊の連中である。警官もちらほら辺りに見えるのに、二重廻しを着て、あの黒眼鏡がやはりトムを見送りに来ていた。——だが、彼の最も満足したのは、そこに、嬰兒あかごをおぶっている細君を連れた亀田が来ていてくれたことだった。

ふとい汽笛の呶号どごうが、霧をふらした。船は栈橋を置いて徐々に

水紋の間隔をひろげた。

見送りの人影は、てんでに、口へ手をかざして、彼に饑別の「ことば」を送った。トム公も、舷へのり出して、口へ手をかざした。

「——あばようツ」

港はいつぱいな陽あたりだった。方々の船で仕事をしているかんかん鎚ハンマーの音がうららかだった。トム公のために唄うように、かんかん日和びよりを唄が流れた——

だが、少年期から次の成長へ向って、彼に与えられたこの重大な航路が、いや岐路が、よい環境と未来とに恵まれればよいが。

——もしそうでなく、悪い潮から潮へ迎えられても、その結果

には誰も責任は持ってくれないのだから。





# 青空文庫情報

底本：「かんかん虫は唄う」吉川英治歴史時代文庫、講談社

1990（平成2）年9月11日第1刷発行

2009（平成21）年3月2日第10刷発行

初出：「週刊朝日」

1930（昭和5）年10月号～1931（昭和6）年2月号

入力：門田裕志

校正：トレンドイースト

2017年5月9日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# かんかん虫は唄う

吉川英治

2020年 7月13日 初版

## 奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>